

甲府城下町遺跡Ⅷ

— 甲府駅周辺土地区画整理事業(17・43街区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2013

甲府市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所

甲府城下町遺跡Ⅷ

— 甲府駅周辺土地区画整理事業(17・43街区)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2013

甲府市教育委員会
公益財団法人山梨文化財研究所



1. 17街区出土遺物・磁器（18C中葉～後葉・肥前）



2. 17街区出土遺物・磁器（18C後葉～19C前葉・肥前）



1. 17街区出土遺物・青磁
(16C前半・龍泉窯)



2. 17街区出土遺物・白磁
(18C前葉・肥前)



3. 17街区出土遺物・磁器 (明治以降・瀬戸美濃)



4. 17街区出土遺物・陶器 (16C～17C前半)
下段右から2つ目 (17C後半～18C前半)



5. 17街区出土遺物・陶器 柳茶椀
(18C後葉～19C前葉・瀬戸美濃)



6. 17街区出土遺物・陶器 (18C後葉～19C中葉)



1. 17街区出土遺物・陶器 (19C前葉～中葉・瀬戸美濃)



3. 17街区出土遺物・陶器 汽車土瓶（大正期・信楽か）



4. 17街区出土遺物・陶器 汽車土瓶（銘文）

空土
こしひん
かは
下の
へ



5. 17街区 Pit1 出土遺物・銅椀

6. 43街区出土遺物・磁器 碗
(15C後葉～16C前葉・景德鎮)

7. 43街区出土・磁器 (18C前葉～中葉・肥前)



8. 43街区出土遺物・陶器 (18中葉～19C中葉・肥前)



1. 43街区出土遺物・陶器（16C後半～17C前葉）



2. 43街区出土遺物・陶器（18C後葉～19C前葉）



3. 43街区出土遺物・陶器（18C後半～19C中葉）



4. 43街区出土遺物・陶器（18C後葉～19C前葉）



5. 43街区出土遺物・陶器（19C前葉～19C後半）

例　　言

1. 本書は山梨県甲府市に所在する甲府城下町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は甲府駅周辺地区画整理事業に伴う本調査であり、甲府市より委託を受けた財団法人山梨文化財研究所（2012年4月より公益財団法人山梨文化財研究所）が発掘調査および整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、43街区を平成20年3月3日～3月31日に、17街区は第1次として平成22年3月10日～平成22年3月26日、第2次として平成22年8月30日～平成22年9月29日に実施した。
4. 本書の執筆・編集は望月秀和が行った。17街区試掘に関しては志村憲一氏（甲府市教育委員会）、43街区に関しては入江俊行氏（元財団法人山梨文化財研究所）の調査所見を基に望月が執筆したもので、本書中の文責は望月にある。
5. 本書に掲載した写真は、17街区試掘調査における造構は志村、43街区の造構は入江、その他を望月が撮影した。
6. 発掘調査および整理作業のうち一部の調査・業務について、以下の機関と方々に委託ならびに協力を得た。

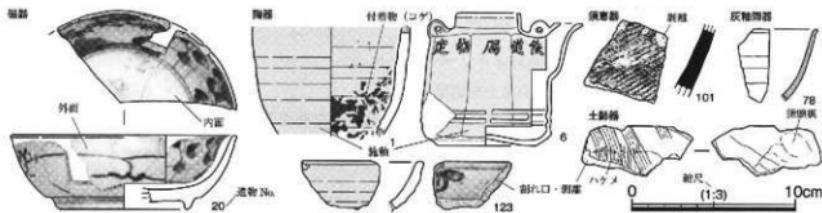
基準点・航空測量 株式会社テクノプラニング
鉄器保存処理 公益財団法人山梨文化財研究所
陶磁器類鑑定 堀内秀樹（東京大学大学院人文社会系研究科埋蔵文化財調査室）
石材鑑定 河西学（公益財団法人山梨文化財研究所）

7. 本書に関わる出土品・記録類は、甲府市教育委員会で保管される。
8. 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸機関、諸氏よりご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい。（順不同、敬称略）。
甲府市教育委員会 甲府市都市建設部 山梨県立博物館 堀内秀樹 水本和美 諸星真澄
植月 学 入江俊行 志村憲一 佐々木満 平塙洋一 村松佳幸 宮澤公雄 植原功一
平野 修 河西 学

凡　例

1. 本書におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系（原点：北緯36度00分00秒）、東経（138度30分00秒）に基づく座標数値である（世界測地系数値）。各遺構平面図中の方位はすべて座標北である。
2. 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。その他、各図版中にスケールを示している。
井戸(SE) : 1/30 土坑(SK) : 1/30 滝状遺構(SD) : 1/40 ピット(Pit) : 1/20
土器・須恵器・陶磁器類 : 1/3 石製品 : 1/3 金属製品 : 1/2 (古銭は原寸大)
3. 遺物掲載番号は、調査毎に実測図、写真図版、出土位置を示したドットの番号全てを一致させている。なお、調査・整理記録と対応させるため、観察表には取り上げ番号および実測番号を合わせて掲載した。
4. 遺構図版中の遺物点をつなぐ実線は接合した2点の接合関係、破線は同一個体である可能性を示す。
5. 遺構図中に示した遺物ドットは、各図版に凡例を示した。

6. 遺物実測図の表現については下図の通り。なお、図版中の縮尺については、各スケールの()内に示した。



7. 土層説明における土色表示には、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(2006年度版)を使用した。
8. 本書図版中に使用した地図および加筆転載資料は以下のとおりである。
第2図 1/200,000 地勢図『甲府』国土地理院 平成17年7月1日発行
第3・5図 1/10,000『甲府市都市計画基本図』甲府市役所発行
第4図 1/25,000地形図『甲府』国土地理院 平成11年2月1日発行
1/25,000地形図『甲府北部』国土地理院 平成2年2月1日発行発行
第41~44図 山梨県教育委員会 2004『甲府城下町遺跡』—甲府駅周辺地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財発掘調査報告書—Fig.112~119
9. 参考文献については第5章の文末にまとめた。

目 次

例言・凡例

目次

表目次

図版目次

写真図版目次

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	2

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境	3
第2節 歴史的環境	6
第3節 周辺における発掘調査について	9

第3章 17街区(KJ17)の調査

第1節 調査区について	12
第2節 調査経過について	12
第3節 周辺環境と基本層序	14
第4節 発見した遺構と遺物	19
第1項 井戸跡(SE)	19
第2項 土坑(SK)	22
第3項 ピット(Pit)	22
第4項 溝跡(SD)	24
第5項 不明遺構(SX)等	28

第4章 43街区〔丸の内一丁目12-3地点(KJ1-12)〕の調査

第1節 調査区について	39
第2節 調査区周辺の環境	39
第3節 調査経過について	40
第4節 発見した遺構と遺物	47
第1項 土坑(SK)・井戸跡(SE)	47
第2項 溝跡(SD)	50
第3項 ピット(Pit)	52

第5章 総括

第1節 遺構・遺物の年代と時代背景	59
第2節 遺構の変遷について	63
第3節 資料にみられる土地利用の変遷	69

参考文献	76
おわりに	76

表 目 次

表1 周辺遺跡一覧	6	表9 43街区(KJ1-12)ピット一覧	54
表2 甲府城下町遺跡周辺主要調査地点一覧	11	表10 43街区(KJ1-12)遺物観察表(陶磁器・土器類)	
表3 17街区(KJ17)遺構別出土遺物重量等一覧	18		55
表4 17街区(KJ17)ピット一覧	24	表11 43街区(KJ1-12)遺物観察表(金属製品)	55
表5 17街区(KJ17)遺物観察表(陶磁器・土器類)	29	表12 甲府城下町遺跡労働局地點(KJ43)における	
表6 17街区(KJ17)遺物観察表(石製品等)	31	時期区分	68
表7 17街区(KJ17)遺物観察表(金属製品)	31	表13 甲府城・甲府城下町に関する絵図史料一覧	70
表8 43街区(KJ1-12)遺構別出土遺物重量等一覧	45		

図 版 目 次

第1図 甲府駅周辺整理区画位置図	2	第22図 17街区出土遺物(遺構外②・金属製品)	38
第2図 遺跡の位置	4	第23図 43街区(KJ1-12)調査区位置図	39
第3図 調査地点と甲府城下町の街路名および町名	5	第24図 43街区(KJ1-12)全体図(1)	41
第4図 甲府城下町遺跡の範囲と周辺の遺跡	7	第25図 43街区(KJ1-12)・労働局地點遺構対応図	43
第5図 甲府城下町遺跡周辺主要調査地点	10	第26図 43街区(KJ1-12)全体図(2)	43
第6図 17街区調査区および試掘トレーン配置図	12	第27図 43街区(KJ1-12)遺物出土状況図	45
第7図 17街区(KJ17)基本層序柱状図	14	第28図 43街区SK(1)	48
第8図 17街区(KJ17)全体図	15	第29図 43街区SK(2)	49
第9図 17街区(KJ17)遺物出土状況図	17	第30図 43街区SK(3)	51
第10図 17街区SE(1)	20	第31図 43街区SD	53
第11図 17街区SE(2)	21	第32図 43街区出土遺物(SK①)	56
第12図 17街区SE(3)・SK	23	第33図 43街区出土遺物(SK②・SD・Pit・遺構外)	57
第13図 17街区Pit	25	第34図 43街区出土遺物(金属製品)	58
第14図 17街区SD(1)	26	第35図 出土遺物編年の位置付け(磁器)	61
第15図 17街区SD(2)	27	第36図 出土遺物編年の位置付け(陶器)	62
第16図 17街区出土遺物(SE①)	32	第37図 17街区遺構変遷図	64
第17図 17街区出土遺物(SE②)	33	第38図 43街区遺構変遷図(1)	66
第18図 17街区出土遺物(SE③)	34	第39図 43街区遺構変遷図(2)	67
第19図 17街区出土遺物(SE④)	35	第40図 43街区遺構変遷図(3)	68
第20図 17街区出土遺物(SE⑤・Pit・SD1)	36	第41図 43街区時期別土地利用状況図(1)	71
第21図 17街区出土遺物(SD2・遺構外①)	37	第42図 43街区時期別土地利用状況図(2)	73
		第43図 43街区時期別土地利用状況図(3)	74
		第44図 43街区時期別土地利用状況図(4)	75

写真図版目次

図版1 17街区(KJ17)調査区景観	図版14 17街区(KJ17)出土遺物(遺構外②・金属製品・石製品等)
図版2 17街区(KJ17)調査状況	図版15 43街区(KJ1-12)表土剥ぎ、調査区全景(モザイク写真)、調査区近景
図版3 17街区(KJ17)遺構・遺物出土状況	図版16 43街区(KJ1-12)調査区近景・土坑(1)
図版4 17街区(KJ17)遺構・遺物出土状況	図版17 43街区(KJ1-12)土坑(2)、調査区近景
図版5 17街区(KJ17)遺構・遺物出土状況	図版18 43街区(KJ1-12)土坑(3)・溝跡、Pit(1)
図版6 17街区(KJ17)遺構・遺物出土状況	図版19 43街区(KJ1-12)Pit(2)
図版7 17街区(KJ17)遺構・遺物出土状況	図版20 43街区(KJ1-12)Pit(3)
図版8 17街区(KJ17)調査区状況及び調査風景	図版21 43街区(KJ1-12)Pit(4)
図版9 17街区(KJ17)出土遺物(SE1-3・SE2①)	図版22 43街区(KJ1-12)Pit(5)
図版10 17街区(KJ17)出土遺物(SE2②)	図版23 43街区(KJ1-12)調査風景、出土遺物(1)
図版11 17街区(KJ17)出土遺物(SE2③)	図版24 43街区(KJ1-12)出土遺物(2)
図版12 17街区(KJ17)出土遺物(Pit11・SD1・SD2)	図版25 43街区(KJ1-12)出土遺物(3)
図版13 17街区(KJ17)出土遺物(遺構外①)	

第1章 序説

第1節 調査に至る経緯

甲府市では新都市拠点整備事業として、平成3年よりJR甲府駅周辺における土地区画整理事業を進めている。甲府駅は近世城郭である甲府城および甲府城下町遺跡地内にあたり、整備計画にあわせて発掘調査を実施してきた（第2章第3節）。

今回報告するのは、甲府駅周辺整理区画位置図（第1図）に示した17街区および43街区で実施した発掘調査の成果である。各発掘調査は甲府市教育委員会と財団法人山梨文化財研究所（2012年4月より公益財団法人となる。以下、山梨文化財研究所とする。）が業務委託契約を締結し、山梨文化財研究所が実施した。なお、発掘調査は17街区を望月秀和、43街区を入江俊行が実施しており、本書は望月が執筆・編集を行った。

その他、今回報告する調査に至る経緯・調査期間および調査体制については次の通りである。

17街区

整備計画にあわせて第1次・第2次の2回の調査を実施した。計画が具体化したのは平成21（2009）年であり、同年7月3日に文化財保護法第94条の通知が甲府市長名で甲府市教育委員会に提出された（都發第749号）。同年7月13日に甲府市教育委員会教育長名で山梨県教育委員会へ進達（教發第582号）、その届出に対して同年7月23日付けで県から発掘調査が必要である旨の通知を受け（教学文第1107号）、調査を実施するに至った。

同地区では、試掘調査を甲府市教育委員会が平成22（2010）年2月1・3日に実施している。対象面積約1200m²に10箇所のトレンチを設定（第6図）して約120m²を調査した結果、古墳時代前期の土器片や陶磁器片の出土、溝跡や近世の井戸などが検出された。この成果から、対象地の北側及び東側の道路部分については、既存の上下水道が敷設されていることから立会い調査とし、宅地部分については、再度申請の提出を願い、状況に応じて試掘または立会い調査を実施することで対応する方針とした。今回の調査対象範囲は、道路敷設部分及び下水等で遺構の保護が困難となる南側部分であり、現地の整備計画にあわせて2次期に分けて発掘調査を実施することになった。なお、本調査に先立ち、甲府市教育委員会により対象地北側の宅地部分の調査が実施された。同調査では3箇所に調査区を設け、古墳時代の溝跡や遺物を検出しており、今回の本調査においても同遺構の延長部分を検出している。

本調査の調査期間、調査体制は次のとおりである。

〔調査期間および体制等〕

業務契約日 平成22年3月10日（第1次）

平成22年8月30日（第2次）

調査期間 平成22年3月10日～平成22年3月26日（第1次）

平成22年8月30日～平成22年9月29日（第2次）

調査主体 財団法人山梨文化財研究所（平成24（2012）年4月1日より、公益財団法人山梨文化財研究所）

調査担当者 望月秀和【財団法人山梨文化財研究所 調査員】（同上）

発掘調査参加者 〈第1次〉

石井弘文、久保田明義、河野逸廣、河野直美、松野達夫、山上 和、若狭宗晴
 〈第2次〉

河西元彦、河野直美、清水千三、田中丹朗、原 義仁、保坂悌司、山上 和

事務局 柳本千恵子、横田杏子

43街区（丸の内一丁目 12-3 地点）

同地区においては、平成19年度に計画が具体化し、同年12月16日に甲府市長名で文化財保護法94条の通知が甲府市教育委員会に提出された（都發第2632号）。これを平成20(2008)年1月7日に甲府市教育委員会教育長名で山梨県教育委員会へ進呈し（教發第1464号）、その届出に対して平成20年1月17日付けで県から発掘調査が必要である旨の通知を受け（教学文第2285号）、調査に至った。今回の調査区については試掘調査が行われなかつたが、同街区においては平成14(2002)年に山梨県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の成果から判断し、本調査に至つたものである。

[調査期間および体制等]

業務契約日 平成20年2月15日

調査期間 平成20年3月3日～平成20年3月31日

調査主体 財団法人山梨文化財研究所（平成24(2012)年4月1日より、公益財団法人山梨文化財研究所）

調査担当者 入江俊行【元 財団法人山梨文化財研究所 調査員】

発掘調査参加者 伊井 寧、小沢正臣、窪田信一、茂田 達、早川栄蔵、深沢友子、藤巻敏弥、保坂 忠
事務局 柳本千恵子、横田杏子

第2節 調査の方法

調査では、各調査区でそれぞれ試掘および近隣調査の成果を基に進め、重機による表土の除去後、人力による遺構の精査・掘り下げを実施した。発見した遺構については、半裁して土層の観察記録と写真撮影、遺構断面図を作成し、光波測量による平面図記録または簡易図化システムによる写真測量、およびテクノプランニングによるポール撮影をあわせて実施した。

遺物については、光波測量による3次元測量と種別の記録を行い、状況に応じて出土状況の写真記録を行った。なお、調査で用いた測量機器および図化・記録システムは以下の通りである。

光波測量機器 / TOPCON GPS - III コンピュータ / Panasonic TOUGHBOOK

写真記録 / Pentax K10D 取り上げ・図化システム / CUBIC 社製 遺構くん

簡易図化システム（カメラ） / Canon 50D+EFレンズ 20mm

整理報告業務については、平成24(2012)年7月27日に業務

委託契約を締結し、望月が業務を担当して平成25年3月15
日に本書刊行に至った。

整理作業参加者

川口三和 植原ゆかり 佐野眞雪 末木美保 須田泰美

中川美千子 藤原五月 古郡 明 山下詩雅



第1図 甲府駅周辺整理区画位置図

第2章 遺跡の概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

山梨県甲府市に所在する甲府城下町遺跡は、甲府城の築城に伴って16世紀末から、17世紀初頭に造営された近世城下町である。同遺跡は甲府盆地北端部にあたる相川扇状地の扇端部から盆地中央の沖積低地あたりにまで展開し、東西約15km、南北約1.8km、標高は約270~290mを測る（第2図）。扇状地を形成した相川は奥秩父山塊に続く太良峠を源流とし、城下町の西側を南流して荒川に注いでいる。北東側には藤川が愛宕山の縁辺部を東流しており、相川とともに同地域の土地形成と発展に影響を与えてきたことが窺える。

同地域の開発は永正16(1519)年に武田信虎が甲府市東部の川田館から相川扇状地頂部へ館を移してきたことに起因する。武田氏館跡（現・武田神社）は甲府城の北2.5kmに位置しており、北方の山と相川・藤川によって形成された断崖などの自然地形に加え、外縁の山塊に城砦網を整備した堅固な構えとなっていた。この館を中心として扇状地形の緩やかな南傾斜地に形成されたのが中世段階の武田城下町であり、地名の甲府は「甲斐国府」の略に由来している。

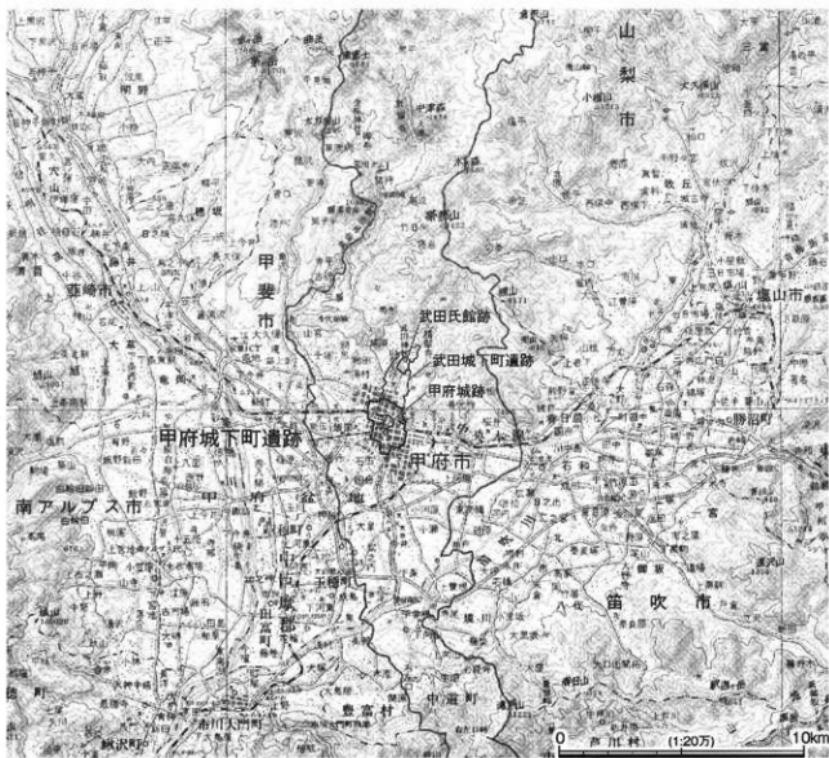
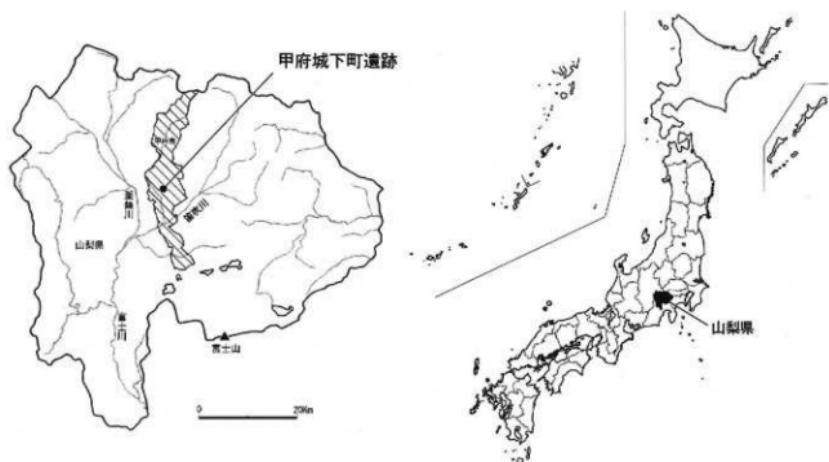
武田城下町は家臣屋敷から町人地の順で南に向かって形成され、現在の甲府駅南口周辺は寺院地およびその門前町が展開していたと推定されている。位置は明確ではないが、絵図等から甲府駅西側にあったと推定する柳沢権太夫屋敷周辺に蛇伏山長延寺が、一条小山に稻久山一蓮寺があったとされる。一条小山とは、甲府城が築城された標高304.8mを測る独立峰である。原地形は愛宕山から続く一連の尾根筋の端部で、扇状地化の進行により周囲が埋没して形成されたと考えられている。同章第2節でも述べるが、長延寺・一蓮寺は甲府城築城に伴って南方へ移転したとされている。

豊臣・徳川両要所として築城された甲府城は、一の堀（内堀）・二の堀・三の堀を設け、さらに東側では希少な石垣の近世城郭として整備された。天守台を築いた一の堀内側を内城、一の堀外側から二の堀までの範囲を内郭、二の堀の外側から三の堀までの範囲を外郭とし、その外側は郭外と称される。城郭の構造としては、一の堀に囲まれた内城を中心に、その北・西・南側に取り巻くように諸役所・倉庫・武家屋敷地などが置かれた内郭、武家屋敷地・町人地などからなる外郭が形成され、さらに三の堀外側の町人地・寺社地にあたる郭外へと同心円的な広がりをみせていた。

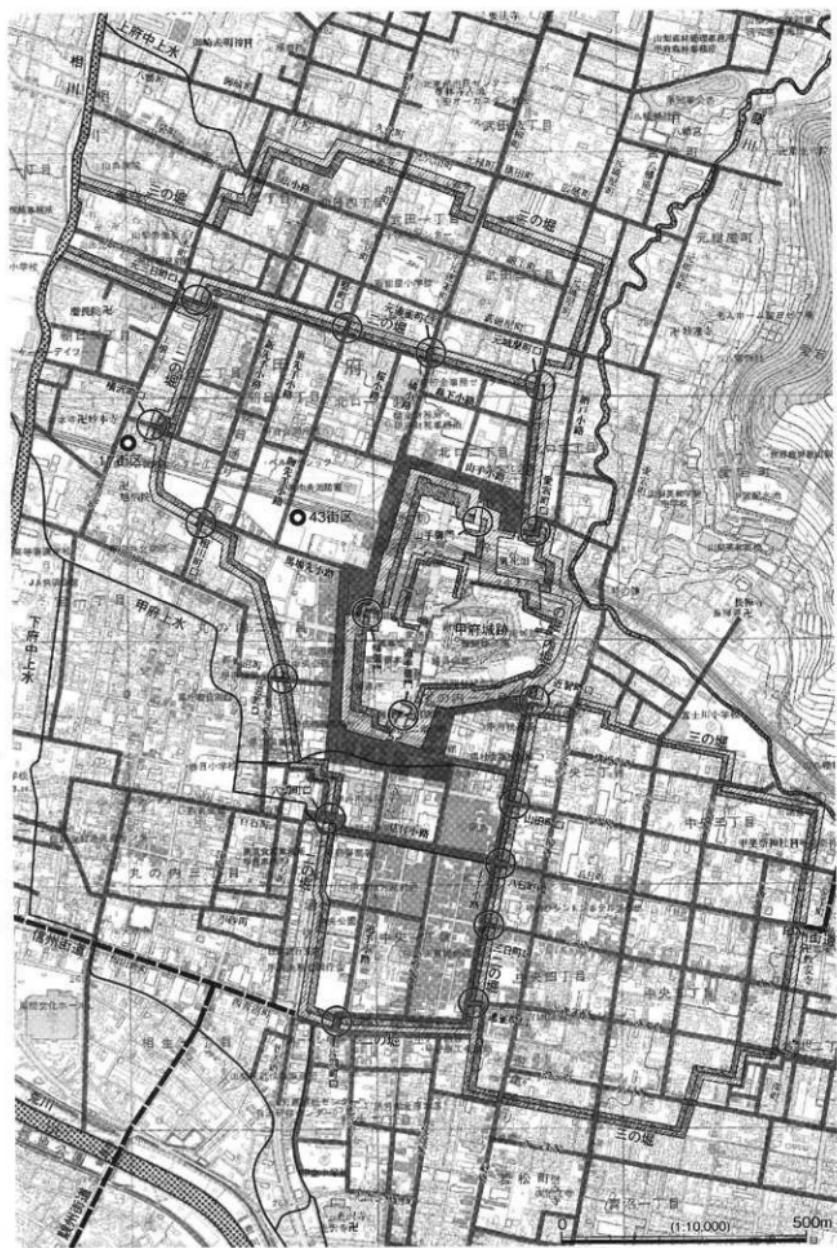
内城には南側に追手御門、西側に柳御門、北側に山手御門が設置されて内郭に通じていた。素掘りの堀と土塁に囲まれた内郭には、15口の見附があった。二の堀南西部から右回りに挙げると、二の堀西側には穴切町口・青沼町口・相川町口・横沢町口・元三日町口・北側には堅町口・元連雀町口・元城屋町口・北東側には愛宕町口・東側には近習町口・山田町口・八日町口・三日町口・速雀町口・追手門南側の二の堀南端には片羽町口が設置されていた（第3図）。二の堀の外側に形成された町人地については、北側に中世城下町を継承した上府中26町と、南東側に甲府城築城に伴って設置された下府中23町が整備された。また、城下町の北東部にあたる愛宕山裾野には、密教系の寺院が多く、鬼門鎮護を目的に配置されたと考えられている。

今回報告するのは、朝日二丁目20番外に位置する17街区と、丸の内一丁目12~3地点の43街区の2カ所で実施した発掘調査成果である。17街区については、甲府城の外郭（二の堀外側）の町人地にあたり、横沢町口の見附の西側に隣接している。また、調査区西側に横沢通りをはさんで妙本寺・南側にJR中央線の高架をはさんで旭宿院などの寺院が立地している。43街区については、内郭（二の堀内側）の武家屋敷地と推定される地域に立地し、平成14(2002)年に山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した調査区の北側に隣接しており、御先手小路に面した武家屋敷地にL字状に調査区を設定した格好となっている。

なお、用語としての「甲府城」は、内城・内郭・外郭を示すが、遺跡名としては内城を「甲府城跡」とし、さらにその一部は山梨県史跡に指定されている。「甲府城下町」については、二の堀を境とする内郭と外郭に加え、三の堀の外側にあたる「郭外」も部分的に含む近世都市の総称として用いられている。但し、文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲については、第4図に示したとおりであり、内郭・外郭に加え、北東側の愛宕山裾野部分及び二の堀南西外側の丸の内二丁目・三丁目を含んだ範囲に限られている。



第2図 遺跡の位置



第3図 調査地点と甲府城下町の街路名および町名

第2節 歴史的環境

第4図では甲府城下町遺跡・武田城下町遺跡の範囲に加え、周辺に所在している甲府市遺跡地図（甲府市教育委員会1992）に掲載される106遺跡を示した。第4図1～12は城館跡（城・館・砦等）、同13は寺院跡、14～16・45は集落跡、17～42は経塚・古墳、43・44・46～106は包蔵地・散布地とされている。ここでは甲府城・甲府城下町遺跡の周辺に分布する遺跡とともに、同地域の歴史的背景について概観しておきたい。

原始・古代

縄文時代から古代に至る時期の遺跡分布をみてみると、散布地と位置づけられている遺跡が多く、不明な点が多い。これは扇状地に立地するため集落遺跡が造営されにくかったことや、流路変移または中世における土地の改変によって消失してしまった可能性等が指摘されている。しかし、甲府城下町およびその周辺における発掘調査では、縄文時代～平安時代の遺物の出土が少なからず確認されており、未発見の集落が存在する可能性も窺える。

縄文時代の遺跡としては、荒川の南側で集落跡が確認された上石田遺跡（同15）のほか、武田氏館跡の南東部に位置する大手下遺跡（同106）や愛宕山裾野の八幡神社遺跡（同105）、善光寺周辺に分布をみることができる。甲府城跡や甲府城下町遺跡の調査では明確な構造は検出されていないが、縄文土器や石器などが出土している。弥生時代の遺跡は、朝氣遺跡（同16）・塙部遺跡（同45）で住居跡が検出されている他、相川流域の向田A遺跡（同56）などが散布地として周知されている。古墳時代の遺跡は、甲府城下町遺跡甲府裁判所地点の調査において、弥生時代末～古墳時代前期の遺物が伴う堅穴状遺構が検出されている。周辺地域では塙部遺跡で古墳時代前期の集落が確認されており、甲府盆地北部における一勢力圏を成していたと考えられ、城下町にも集落が広がっていた可能性が窺える。集落跡以外にも塙部遺跡・朝氣遺跡で方形周溝墓群が検出されている他、6世紀前半に築かれた万寿森古墳（同21）や、湯村山・愛宕山・善光寺周辺にも古墳・積石塚古墳が分布している。なお、朝氣遺跡では古墳時代後期の集落跡が検出されている他、木製品表1 周辺遺跡一覧

No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	甲府城下町遺跡	近	城館跡	38	地蔵原古墳	古	古墳	75	地蔵北造跡	古～平	散布地
2	（17街区調査地点）	近	城館跡	39	経塚古墳	古	古墳	76	亥ノ兔遺跡	平～	散布地
3	（43街区調査地点）	近	城館跡	40	北原無名古墳	古	古墳	77	大六天遺跡	平～	散布地
4	平原城跡	近	城館跡	41	善光寺無名古墳	古	古墳	78	猪の脇A遺跡	縄・平～	散布地
5	武田城下町遺跡	中	城館跡	42	ポンボコ塚	古	古墳	79	善光寺真置跡	縄・平～	散布地
6	武田氏館跡	中	城館跡	43	民間遺跡	中	包蔵地	80	南善光寺遺跡	古～平	散布地
7	善光寺跡	中	城館跡	44	7号遺跡	奈・平・中	包蔵地	81	南善光寺遺跡	平～	散布地
8	鶴舎山遺跡	中	城館跡	45	塙部遺跡	第～平	散石跡	82	殿屋敷遺跡	平～	散布地
9	糸井山城跡	中	城館跡	46	山梨大学遺跡	奈・平	包蔵地	83	宮の脇B遺跡	縄・平～	散布地
10	十星教遺跡	中	城館跡	47	宝町遺跡	縄・平	包蔵地	84	吉良遺跡	平～	散布地
11	御園・蛭子跡	中	城館跡	48	寺町遺跡	古	包蔵地	85	銀杏之木遺跡	平～近	散布地
12	新堂寺火炎	中	城館跡	49	古沼遺跡	古	包蔵地	86	上郷遺跡	平～	散布地
13	峰本山遺跡	近	寺院跡	50	本郷造跡	縄・古～	包蔵地	87	東光寺遺跡	平～	散布地
14	北原遺跡	純・平	集落跡	51	日影田遺跡	古	散布地	88	河の岸遺跡	縄	散布地
15	上石田遺跡	純	集落跡	52	緑ヶ丘二丁目遺跡	古	散布地	89	本郷B造跡	平～	散布地
16	朝氣遺跡	純～平	集落跡	53	十一天遺跡	甲	散布地	90	本郷C造跡	古～中	散布地
17	ノ森経塚遺跡群	中	経塚	54	水井遺跡	古・平	散布地	91	酒折縄文遺跡	縄	散布地
18	飛石古墳	古	古墳	55	村之内遺跡	古～平	散布地	92	内林遺跡	近	散布地
19	湯村山1号墳	古	古墳	56	向田A遺跡	古～	散布地	93	大鶴遺跡	中	散布地
20	湯村山15号墳	古	古墳	57	向田B遺跡	古	散布地	94	小坪遺跡	古	散布地
21	万寿森古墳	古	古墳	58	山路遺跡	古	散布地	95	家之前遺跡	平	散布地
22	湯村山4号墳	古	古墳	59	西前田A遺跡	中・近	散布地	96	里吉天神遺跡	古～平	散布地
23	湯村山3号墳	古	古墳	60	西南田遺跡	古	散布地	97	石川B遺跡	平	散布地
24	湯村山1号墳	古	古墳	61	御馬屋小路A遺跡	中	散布地	98	大北河原遺跡	平	散布地
25	湯村山11号墳	古	古墳	62	不動遺跡	近～	散布地	99	久保北河原遺跡	平	散布地
26	二光寺山遺跡	古	古墳	63	御馬屋小路B遺跡	古	散布地	100	宮北遺跡	縄・平	散布地
27	和田無名塙	古	古墳	64	峰本山B遺跡	近	散布地	101	丁松院遺跡	中～	散布地
28	綾ヶ丘二丁目遺跡	古～平	古墳	65	日影遺跡	古	散布地	102	太田町遺跡	古～	散布地
29	お塙原・古井	古	古墳	66	岩井C遺跡	古	散布地	103	湯田一丁目遺跡	古	散布地
30	コツケ古墳	古	古墳	67	中道東遺跡	近	散布地	104	青沼一丁目遺跡	中～	散布地
31	二ツ塚1号墳	古	古墳	68	中道西遺跡	古	散布地	105	八幡神社遺跡	縄	散布地
32	二ツ塚2号墳	古	古墳	69	新附城小学校遺跡	近	散布地	106	手下遺跡	縄	散布地
33	二ツ塚3号墳	古	古墳	70	茶条遺跡	平	散布地				
34	一ツ塚古墳	古	古墳	71	人笠山古墳の元遺跡	古～	散布地				
35	善光寺山2号墳	古	古墳	72	北光院先人遺跡	平～	散布地				
36	善光寺山1号墳	古	古墳	73	越上遺跡	平～	散布地				
37	三日月古墳	古	古墳	74	奥下A遺跡	平～	散布地				

【時代】 漢代：縄・、弥生：古～、春秋：古、平安：平、中世：中世、近世：近世
※表1および第4図は、甲府市教育委員会平成4（1992）年に発行した「甲府市遺跡地図」を基に作成した。



第4図 甲府城下町遺跡の範囲と周辺の遺跡

の出土や、奈良時代の堅穴住居、さらに平安時代には再び集落が営まれたこと等が確認されている。

律令時代の甲斐は山梨・八代・巨麻・都留の4郡が置かれ、市域には巨麻郡青沼郷の遺称とする青沼、山梨郡上戸郷の遺称とする和戸などの地名が残る。郷城ははっきりしないが、近世になると東青沼・西青沼に分かれ、西青沼の東部が甲府城下町に組み入れられた。甲府城下町遺跡では古代の集落を示す痕跡は明確ではないが、土師器・須恵器等が溝などの遺構に伴って出土する事例が報告されている。

中世（甲府城築城以前）

甲府城が築かれた一条小山は、平安時代末に武田信義の嫡男である忠頼が一条郷を領し、一条を称して居館を置いたことに由来する。寿永3(1184)年、忠頼が源頼朝に誅殺された後、忠頼夫人によって菩提の尼寺が建立された。これを後に遊行二世他阿真教に帰依した一条時信によって、正和元(1312)年に時宗寺院として改められたのが福久山一条道場一蓮寺である。

永正16(1519)年、武田信虎は甲府市東部の川田館から相川扇状地頂部へ館を移した。この館が戦国期の武田氏（信虎・信玄・勝頼）の本拠となった武田氏館跡（同6）であり、半島状に突出した鄒闕ヶ崎に接して造営されたことから鄒闕ヶ崎館と呼ばれた。『高白齋記』によると、信虎は大永3(1523)年に湯村山に山城（同9）を普請し、翌大永4(1524)年には一条小山の普請をはじめ、大永6(1526)年には一蓮寺を小山原へ移して新道場が建設されたとしている。普請規模は明確ではないが、館周辺の防衛拠点整備の一環と推定され、湯村山同様に一条小山の山頂も明け渡したことが推定されている。なお、小山原については、甲府城南側で堀に接する平場の鍛冶曲輪が想定されている。発掘調査では築城期以前の非戸跡などを検出しており、秋山敏氏の一蓮寺門前町の考察では小山原を楽屋曲輪付近とし、大永4年の普請の時に山頂から移された一蓮寺の御塗は、一条小山の南西部の平地にかけて広がっていたと推定されている（秋山1998）。

近世（甲府城築城期～甲府勤番期）

天正10(1582)年の武田氏滅亡後、甲斐は織田信長による支配となり、信長臣僚川尻秀隆が領有した。本能寺の変で信長が誅殺されると、甲斐は天正壬午の乱を経た後から天正18(1590)年まで徳川家康の支配となつた。甲府城の築城を最初に計画したのは家康であり、天正17(1589)年に重臣であった平岩親吉に対し、甲斐・信濃の地侍に命じて一条小山の地囲めの普請の実施を通達し、さらに石垣積職人を近く派遣すると述べた書状を発給している。その後、小田原の役を境に家康が関東へ移封されると甲斐は豊臣領となり、羽柴秀勝、加藤光泰、浅野長政・幸長父子など豊臣家重臣による支配地となつた。甲府城の築城は関東の徳川の牽制を目的に進めたと考えられており、豊臣系城郭の特徴とされる野面積み石垣や発掘調査で朱や金箔を施した豊臣家の家紋瓦の出土は、その証左となっている。

一条小山にあった一蓮寺は、天正19(1591)年頃に加藤光泰によって南方へ移転されたと伝わる。甲府城の発掘調査では、石垣の裏裏石から五輪塔などの石造物や石臼等が多量に出土しており、守院に関連した遺物と判断されている。同じく築城に伴い移転した長延寺については、柳沢権太夫屋敷付近にあったとするが、同寺を断定できる遺構・遺物はこれまで確認されていない。なお、長延寺は武田氏滅亡の際に堂宇を消失しているが、二世の顯了道快が家康から同所に守領を得て再興したとみられ、文禄年間に移転したとされている。

甲府城の築城年代に関する文禄・慶長年間の史料は極端に少ないが、浅野長政・幸長父子の在城期に基本構造が整ったとする説が有力で、各山輪からは浅野家の家紋瓦が多量に出土している。この時期には城下町の整備も進められ、これまでの武田城下町を城郭南東へ移し、追手門南側部分を武家地として二の堀で、また新たに町人地とした南東部分は三の堀で囲繞した。武田城下町を継承した山手門北西部については、26町に区画して上府中と称した。移設した新しい町人地については、東西に甲州街道が抜けており、南北4条、東西6条に町割して23町を整備し、下府中と称した。

開ヶ原の戦い後、甲斐は再び徳川方の領有となり、城代には平岩親吉が再任された。この時期に浅野父子から引き継いだ甲府城の築城を完成させ、城下町についても慶長検地などからこの段階に完成していたと推定されている。江戸幕府開府後、甲府城は義直をはじめとする徳川家直系が城主となる位置づけになつたが、

どの城主も在城せず、城代や武田氏の旧臣である武川十二騎等が城番として置かれた。

慶安4(1651)年には徳川綱重が甲斐を押領し、甲府藩が成立する。寛文4(1664)年には幕府より2万両を得て大規模修復が行われている。綱重の子綱豊は、延宝6(1678)年に城主となるがやはり在城せず、江戸城桜田門外で甲府家をたてた。

宝永元(1704)年からの約20年間、柳沢吉保・吉里が甲府藩主となり、甲府城の大規模な改修および城下町の再整備を実施し、甲府城下町は最盛期を迎える。甲府城唯一の在城城主となったのが吉里であり、甲斐在国に伴って移ってきた家臣とその家族は、3,230人を超える規模であったとされている。柳沢氏による再整備は武家地の内部だけに留まらず、町人地であった外郭にも拡張された。また、武家地拡張とともに町人地も三の堀の内側に移設されており、甲府城下町の新たな町割りが進められた、大規模な整備であったことがわかる。なお、移設元の町には「元」、移設した町には「新」を付して称されるようになり、「元辯屋町」や「新辯屋」といった地名・呼称が今日まで残っている(第3図)。

柳沢氏の大和郡山移封後から幕末に至るまでの約140年間は、幕府直轄領として勤番支配のもとに管理された。享保年間には建物の老朽化に加え、本丸御殿などを焼く大火があり、度々修復の申請があったものの、大規模な修復は実施されなかった。

幕末・近代

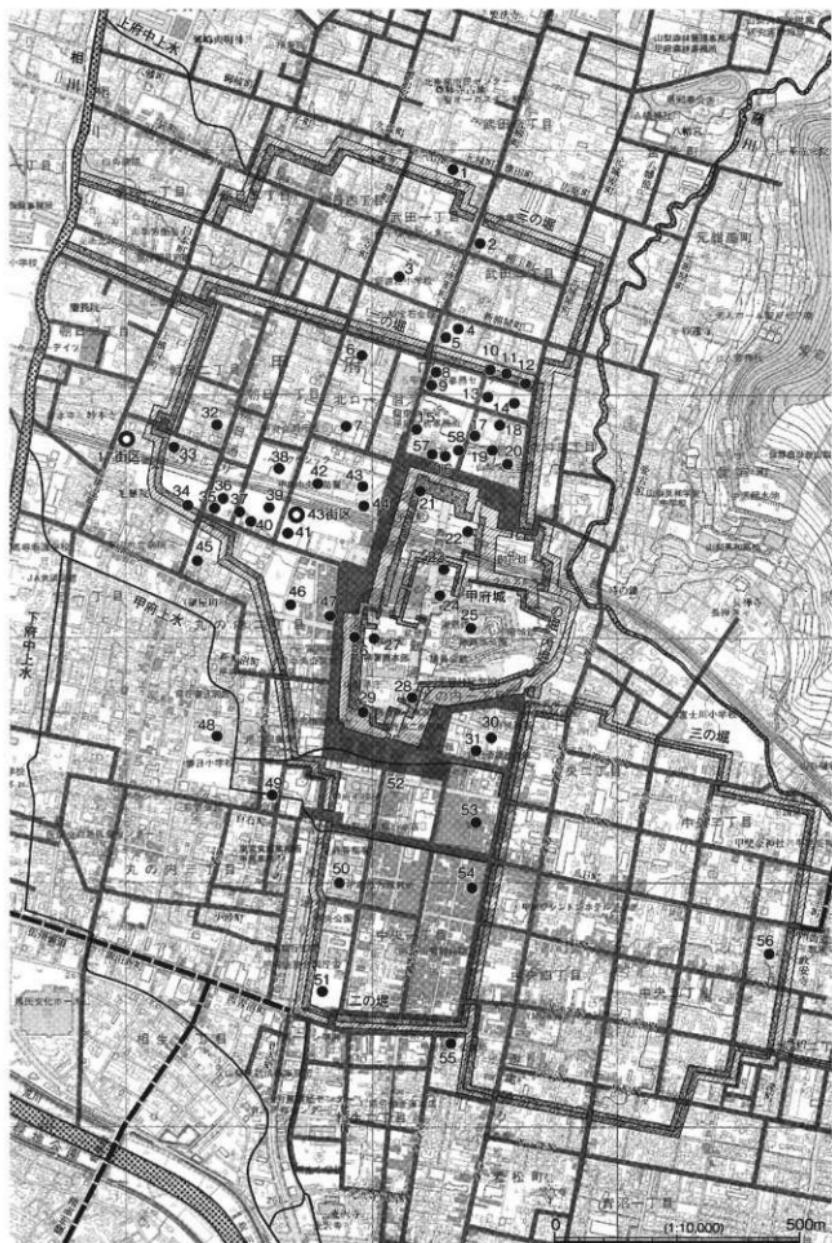
慶応2(1866)年に勤番を廃して甲府城代が設置されたが、慶応3(1867)年の大政奉還の後、翌年の明治元(慶応4年・1868)年3月に板垣退助率いる官軍が入城して開城となった。同年6月に城代を廃止して「甲斐鎮撫府」が置かれた。その後「甲斐府」「甲府県」と名称を変えて明治4(1871)年の廃藩置県により「山梨県」に改められ、甲府城は維新政府によって兵部省、続いて陸軍省の管轄におかれた。明治7(1874)年の太政官布告によって甲府城は廃城となり、前年に山梨県令に着任した藤村紫朗の施策によって内城以外の取り壊しと二の堀・三の堀のほとんどが埋立て払い下げとなり市街地化が進んでいった。

廃城後の内城では、国の施策であった殖産興業の一環を担う場として、楽屋曲輪の御殿内では養蚕の実施、さらに内城の空き地では製糸工場建設のための煉瓦石製造が行われた。明治9(1876)年には勤業試験場として城内全城で葡萄などを栽培し、ワインの醸造が実施された。明治29(1896)年には清水曲輪が鉄道院に割譲され、明治36(1903)年に甲府停車場の開業によって清水曲輪と花畠は消失した。甲府城の一部を破壊して開通した中央線と甲府駅の設置は、本県の産業や都市開発の起点になった一方で、甲府城下町を南北に分断することになり、その後の市街地の形成にも大きな影響を与えたといえる。

第3節 周辺における発掘調査について

甲府城および甲府城下町遺跡における本格的な調査は、昭和42(1967)年に実施した甲府城総合学術調査にはじまったといえる。山梨県教育委員会の文化財緊急調査事業として、山梨県文化財調査委員会を主体として編成された甲府城跡総合学術調査団が実施したもので、甲府城の歴史・建築・自然地形などをまとめ、城跡の保護と史跡指定の実現を目的に進められた。翌年に甲府城は県史跡に指定され、昭和44(1969)年に『甲府城総合調査報告書』を刊行している。

平成2(1990)年より石垣の改修工事や園路・広場整備、歴史的建造物復元を中心とした舞鶴公園整備事業を県土木部が着手し、これに連動して発掘調査・石垣解体調査を実施している。平成16(2004)年までに実施した山梨県埋蔵文化財センターによる発掘調査(第5回23~27)では、天守台・本丸・人質曲輪・天守曲輪・帶曲輪・稻荷曲輪・数奇屋曲輪・二の丸・銀治曲輪・屋形曲輪・堀を対象に進められた。同調査では江戸時代の遺構は広範囲にわたって搅乱を受けていることが判明したものの、各曲輪からは多量の瓦や土師質土器・陶磁器類の出土に加え、稻荷曲輪櫓台では輪宝などの遺物も検出している。その他、銀治曲輪で検出された鎌倉・室町時代の井戸跡や、石垣の裏栗石から多数出土した五輪塔をはじめとする石造物や石臼等の一蓮寺に関連する遺物など、築城以前の様相を示す遺構・遺物も確認された。この成果は平成17(2005)年に刊行した発掘調査報告書でまとめられ、同書では石垣の構築技術から推定した各曲輪の成立年代、出土



第5図 甲府城下町遺跡周辺主要調査地点

瓦の分類などが行われている。

甲府城下町遺跡においては、平成7(1995)年以降、甲府駅周辺の新都市拠点整備事業に伴う発掘調査を断続的に実施してきた。以下、その概要について述べていくが、調査は整備事業計画に沿って実施したため、時系列ではなく、地域・地点ごとにまとめていく。

甲府駅北口周辺

この編と森下小路周辺の調査(第5図4・5・8~20)を甲府市教育委員会・山梨県埋蔵文化財センターが実施している。同地域の調査では、武家地の区画溝などを検出しており、さらに甲府城築城以前の武田城下町に関連する16世紀代の遺構や遺物を検出している(同2・4・8~10・13)。

甲府駅西側

18世紀前半には柳沢吉保の家老屋敷、幕府領の時代となる18世紀中葉以降には山手御役宅が置かれた地点にある。JR中央線北側の甲府市教育委員会が実施した調査(同42・44)では、柳沢氏の家紋瓦や肥前系の磁器などを多量に検出している。また、JR中央線南側の一帯は、一蓮寺と同様に甲府城築城に伴って南方へ移転した長延寺の推定地とされており、中世武田城下町の南端と甲府城下町が重複する地域にある。今回報告する43街区地点(KJ1-12)に隣接する43街区労働局地点(KJ43・同41)では、調査時より長延寺の存在に留意して進められ、寺院の存在を示すまでには至らなかったが、16世紀代の井戸跡や区画溝、同時代の所蔵である灰釉皿が出土した土坑、北宋銭を伴う墓磚などを検出している。甲府城御御門の西側にあたる丸の内二丁目3地点(同47)においても16世紀代の遺構を確認しており、中世段階の武田城下町が極めて広範囲に及んでいた証左となっている。なお、同調査地点では17世紀の早い段階に設置された馬場の痕跡や、明治期の監獄署に係る施設の一部として甲府上水に関する遺構を検出している。その他、丸の内二丁目109地点(同45)では錫型や錫物片が廃棄された土坑を検出している。隣接する新青沼町には錫物師町があつたと『表見寒話』(宝曆2(1752)年)に記載があり、終戦頃まで鍋屋町と呼ばれていたとしており、鉄鍋製作に関連した工房の存在を示す資料として注目されている。

その他、甲府城二の堀南辺部では、甲府市教育委員会が平成17年に集会所建設工事に伴う調査(同51)を実施しており、武家屋敷と明治期の県病院に関する甲府上水遺構などを検出している。また、現在整理中の43街区地点周辺の調査区や試掘調査の成果では、屋敷地や道路状遺構などの土地区画に関する遺構が確認されており、甲府城および甲府城下町の全貌を解明するための貴重な事例といえる。

表2 甲府城下町遺跡周辺主要調査地点一覧

番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	甲府城二の堀跡	30	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目13(市道))
2	甲府城下町遺跡(武田二丁目10~100地点)	31	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目13~9地点)
3	甲府城下町遺跡(新宿中学校跡周辺)	32	甲府城下町遺跡(朝日二丁目214)
4	甲府城下町遺跡(武田二丁目82~3)	33	甲府城下町遺跡(横川口)
5	甲府城下町遺跡(武田二丁目(いちやまマート駐車場跡))	34	甲府城下町遺跡
6	甲府城下町遺跡(朝日二丁目99號地)	35	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目8~8地点)
7	甲府城下町遺跡(北二丁目50~1地点)	36	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目2~3地地点)
8	甲府城下町遺跡(北二丁目17~18~21地点)	37	甲府城下町遺跡(丸の内二丁目(真先手小路跡))
9	甲府城下町遺跡(北二丁目12~1地点)	38	甲府城下町遺跡(B西面)
10	甲府城下町遺跡(横川口跡)	39	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目1~3地地点)
11	甲府城下町遺跡(北二丁目12(二の割跡))	40	甲府城下町遺跡(丸の内二丁目138地点)
12	甲府城下町遺跡(北二丁目14~9地点)	41	甲府城下町遺跡(43街区労働局地点)
13	甲府城下町遺跡(長ノルク跡A区)	42	甲府城下町遺跡(B区)
14	甲府城下町遺跡(日向町通跡第1地点)	43	北口一丁目~5(山手御役宅跡)
15	甲府城下町遺跡(武田駅脇沿い)	44	甲府城下町遺跡(A区)
16	甲府城下町遺跡(北二丁目、1丁目(獨立園舎施設地點))	45	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目109地点)
17	甲府城下町遺跡(北二丁目通跡第2地点)	46	甲府城下町遺跡(丸の内二丁目31~9地点)
18	甲府城下町遺跡(北二丁目1日94地点)	47	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目3地地点)
19	甲府城下町遺跡(新田元景敷跡)	48	甲府城下町遺跡(舞鶴小学校)
20	甲府城下町遺跡(北二丁目101(納戸小路武家敷地跡))	49	甲府城下町遺跡(丸の内二丁目623(百石町武家敷地跡))
21	甲府城築城(赤木曲輪)	50	甲府城下町遺跡(甲府地方裁判所地點)
22	甲府城(30町区)	51	甲府城下町遺跡(集会所跡地)
23	甲府城屋形曲輪(駒船場)	52	甲府城下町遺跡(駒船地区再開発)
24	甲府城屋形曲輪(駒車場)	53	甲府城下町遺跡(丸の内一丁目505~1他地地点)
25	忠臣蔵跡	54	甲府城下町遺跡(中央一丁目15地地点)
26	甲府城(忠臣蔵ローソン地点)	55	甲府城下町遺跡(相生一丁目4地点)
27	甲府城跡(柳御門跡)	56	甲府城下町遺跡(城東二丁目9)
28	甲府城跡(追手門)	57	甲府城下町遺跡(舞鶴城公園通り脇北・南区)
29	甲府城下町遺跡(追手門)	58	甲府城下町遺跡(舞鶴城公園通り脇北・南区)

第3章 17街区（KJ17）の調査

第1節 調査区について

調査区は、JR中央線横沢通りガードの北東に位置する。本地点は相川扇状地のは先端部にあたり、甲府城二の堀まで緩やかに東傾斜する河岸堆積地にあたる。調査は整備計画に沿って2次期に分けて実施しており、新設する道路および排水溝部分を対象に、第1次に99m²、第2次に110m²を調査した。なお、各調査範囲については、電柱や近隣住民との共有スペースを避けるなど、甲府市教育委員会と現地協議を行った上で決定した。

第2節 調査経過について

（第1次）

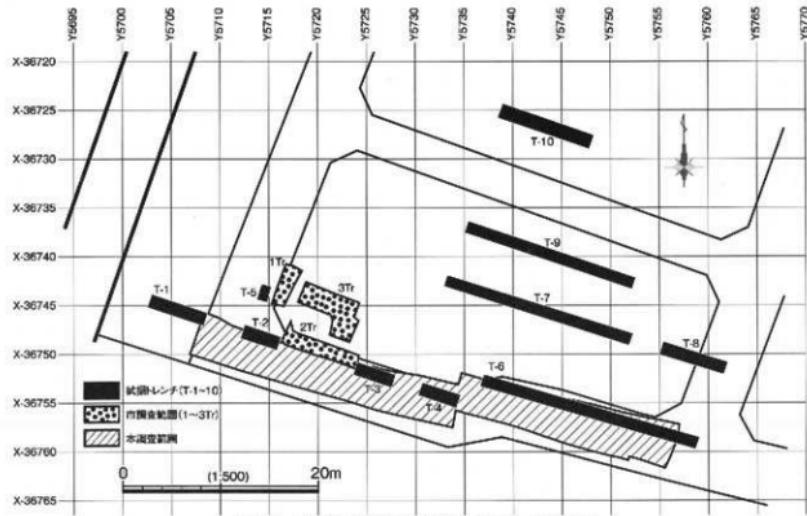
第1次調査は平成22(2010)年3月10日より開始し（事前準備として、3月9日にレンタカーの搬入と機材準備を行った）、11日までの2日間で重機による表土剥ぎ作業を行った。掘り下げは、甲府市教育委員会が実施した試掘調査の調査成果と試掘坑を目安とし、土層を確認しながら行った。

表土剥ぎ後、人力によって調査区の整形と遺構精査を3月13日まで実施した。精査の結果、近代のゴミが埋め立てられていた井戸跡（SE4）と、これに伴うピット2基を検出したが、その他人為的な痕跡は確認できず、河川堆積と考えられる礫層の落ち込みを確認した。その後、サブトレ等を設置して堆積状況の確認と、東側の礫と遺物が混在する層を掘り下げていく作業を行い、同月19日にポールによる測量撮影を実施し、23日までに手実測の作業を終了した。

現場の撤収作業は22日より順次行い、24日にプレハブ等の返却、25・26日に重機による埋め戻しを実施して調査終了とした。なお、基礎整理として、遺物整理と記録図面・測量データの処理を25・26日に実施した。

（第2次）

調査は平成22(2010)年8月30日より開始し、調査区測り出しとプレハブ等搬入を行った。8月31日・9月1日の2日間で重機による表土剥ぎ作業を行った。掘削に関しては、第1次と同様に、市教委が実施した試掘坑を目安に土層確認しながら行った。表土剥ぎ後は、人力により調査区の整形と遺構精査を実施した。



第6図 17街区調査区および試掘トレンチ配置図

第1次調査日誌

月日	曜日	作業内容	重機等
2010/03/09	火	調査区設定。	
2010/03/10	水	調査開始。表土剥ぎ、プレハブ等搬入。	0.25
2010/03/11	木	表土剥ぎ、溝企画整形。	0.25
2010/03/12	金	精査。	
2010/03/13	土	精査、状況写真撮影（全景）	
2010/03/15	月	擾乱掘り下げ、実測。	
2010/03/16	火	精査、東側掘り下げ。SE4（調査時はSE1）設定。調査区東側（SX1）掘り下げ。	
2010/03/17	水	東側流路掘り下げ。サブトレ設定。	
2010/03/18	木	東側流路掘り下げ。中央部にサブトレ設定。	
2010/03/19	金	完掘。写真測量（ポール撮影）、実測。	
2010/03/22	月	サブトレ掘削、土層確認、北壁セクション実測。機材撤収開始。	
2010/03/23	火	トイレ汲取。調査区セクション観察記録。	
2010/03/24	水	プレハブ等返却。作業は雨天中止。	
2010/03/25	木	SEAの重機による断ち切り、埋め戻し。 機材整備・基礎整理（遺物整理・図面確認）。	0.25
2010/03/26	金	埋め戻し。基礎整理（遺物整理、測量データ処理）。	0.25

第2次調査日誌

月日	曜日	作業内容	重機
2010/08/30	月	測り出し、調査範囲確認、プレハブ等搬入。	
2010/08/31	火	表土剥ぎ、現場整備。精査、遺構確認。	0.15、4tダンプ
2010/09/01	水	表土剥ぎ、精査、掘り下げ。Pit1・2、SE1設定。	0.15、4tダンプ
2010/09/02	木	調査区整形完了。精査、遺構掘り下げ、記録。	
2010/09/03	金	精査、遺構掘り下げ、記録。一部深掘、上層確認。	
2010/09/06	月	精査、遺構掘り下げ、記録。ピット・大骨検出。	
2010/09/07	火	精査、遺構掘り下げ、記録。SE2（調査時はSK1）設定。	
2010/09/08	水	雨天中止。	
2010/09/09	木	精査、遺構掘り下げ、記録。	
2010/09/10	金	精査、遺構掘り下げ、記録。サブトレ掘り下げ。SD1設定。	
2010/09/13	月	サブトレセクション実測。全景写真撮影、遺構掘り下げ、記録。	
2010/09/14	火	重機掘り下げ。	
2010/09/15	水	精査・遺構掘り下げ。SD2設定。	
2010/09/16	木	雨天のため休み。	
2010/09/17	金	水抜き、掘り下げ、記録。	
2010/09/18	土	掘り下げ、記録。SD2完掘。	
2010/09/21	火	掘り下げ、記録。SE1完掘、SE3設定。	
2010/09/22	水	掘り下げ、記録。SE3実測。写真測量（ポール撮影）。	
2010/09/24	金	撤収、埋め戻し。	0.15、4tダンプ
2010/09/25	土	撤収、埋め戻し。プレハブ撤収。	0.15
2010/09/27	月	機材片付け、基礎整理（遺物整理、図面確認）。	
2010/09/28	火	基礎整理（遺物洗浄・測量データ処理）。	

発見した各遺構の観察・記録を順次進め、9月13日までにピットの掘り上げと記録を実施した。その後、下層遺構の確認のため再び重機を用いて掘り下げを実施した。結果、SD2の確認面よりも下層からは遺構・遺物は検出できず、自然堆積層（地山）であると判断した。

調査区全体の記録は、ポールによる測量撮影と全景撮影を13日と22日に実施した。また、22日に全ての調査記録作業を終了し、24・25日に重機による埋め戻しとプレハブ等の返却、機材類の引き上げ作業を行い、現場作業を終了とした。なお、基礎整理作業として9月27~29日に実施し、遺物の整理と測量データ処理を行った。

第3節 周辺環境と基本層序

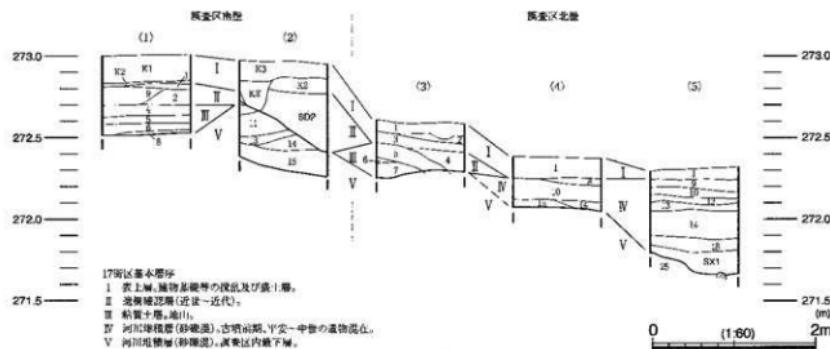
対象地は、JR中央本線北側に位置し、民地の端部にある。西から東へ緩やかに傾斜する土地で、調査区域の比高差は東西で約1.2mを測った。土層観察では礫層を含む河岸堆積層が確認でき、元々、二の堀構築以前の流路によって形成されたことが窺える。

調査以前は宅地と道路であり、調査区内にも建物基礎による搅乱の他、犬が埋葬されていた痕なども確認した。また、かつてこの場所に住んでいた方からの聞き取りでは、調査区北側には飲料を生産していた工場があったことや、洋服屋（仕立屋）が数件があったことなど、同地区の以前の様子を知ることができた。その他、同地点は線路沿いの土地のため、調査区の南側（線路側）に設置された側溝の一部や、アンカーを埋めた跡など、鉄道との関連が窺える痕跡もみられた。

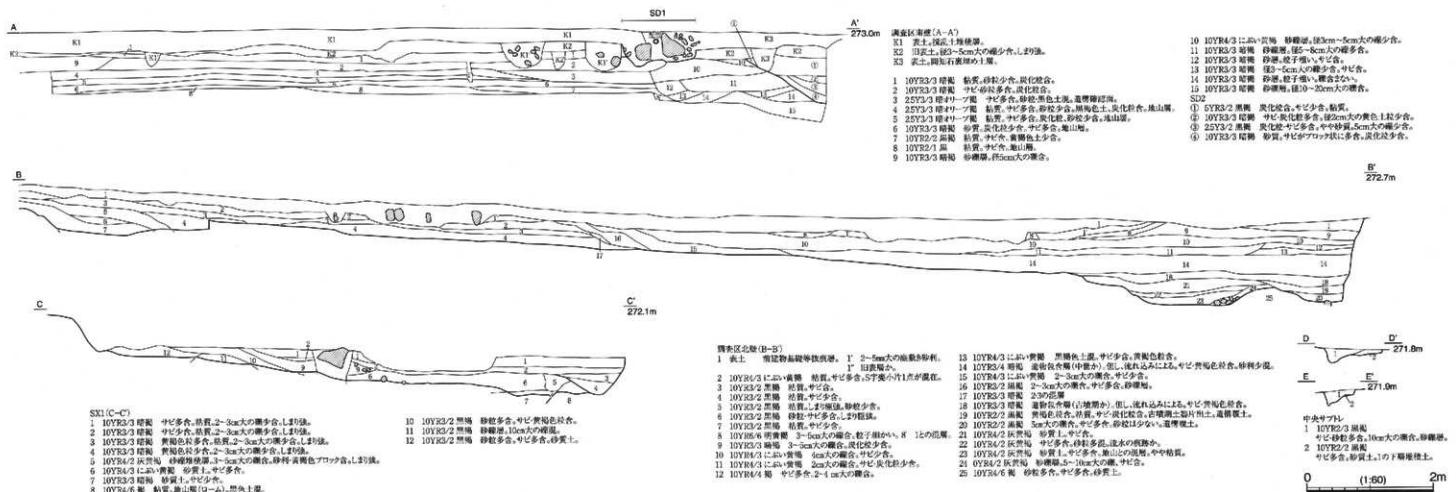
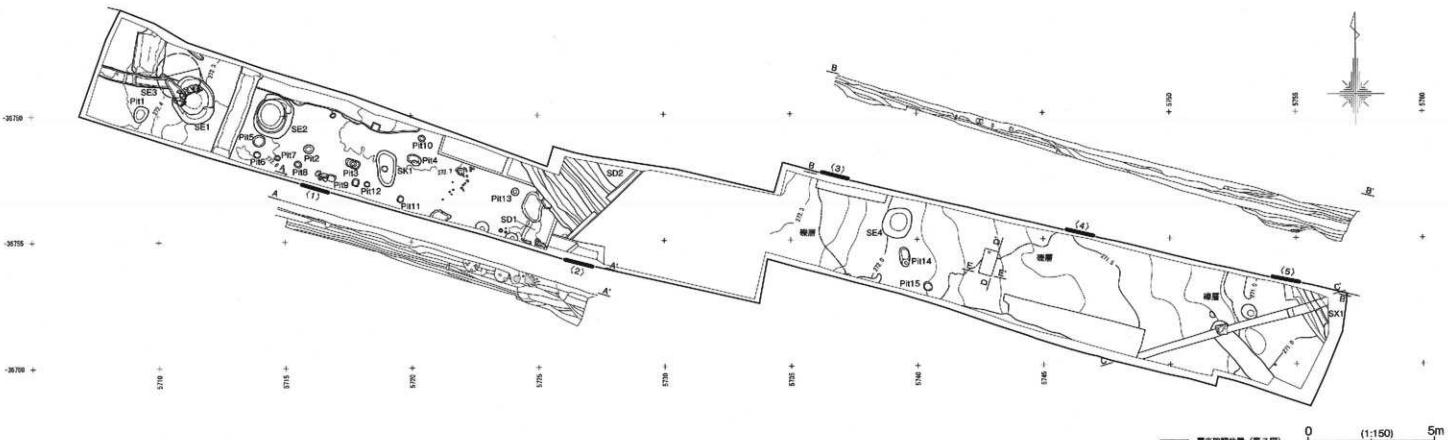
基本層序については、同地点では2次にわたって調査を実施したことに加え、前述のとおり緩やかに傾斜する地形のため堆積状況が異なったことから、整理作業の段階で検討を行い、対応する層としてI~V層に大別した（第7・8図）。

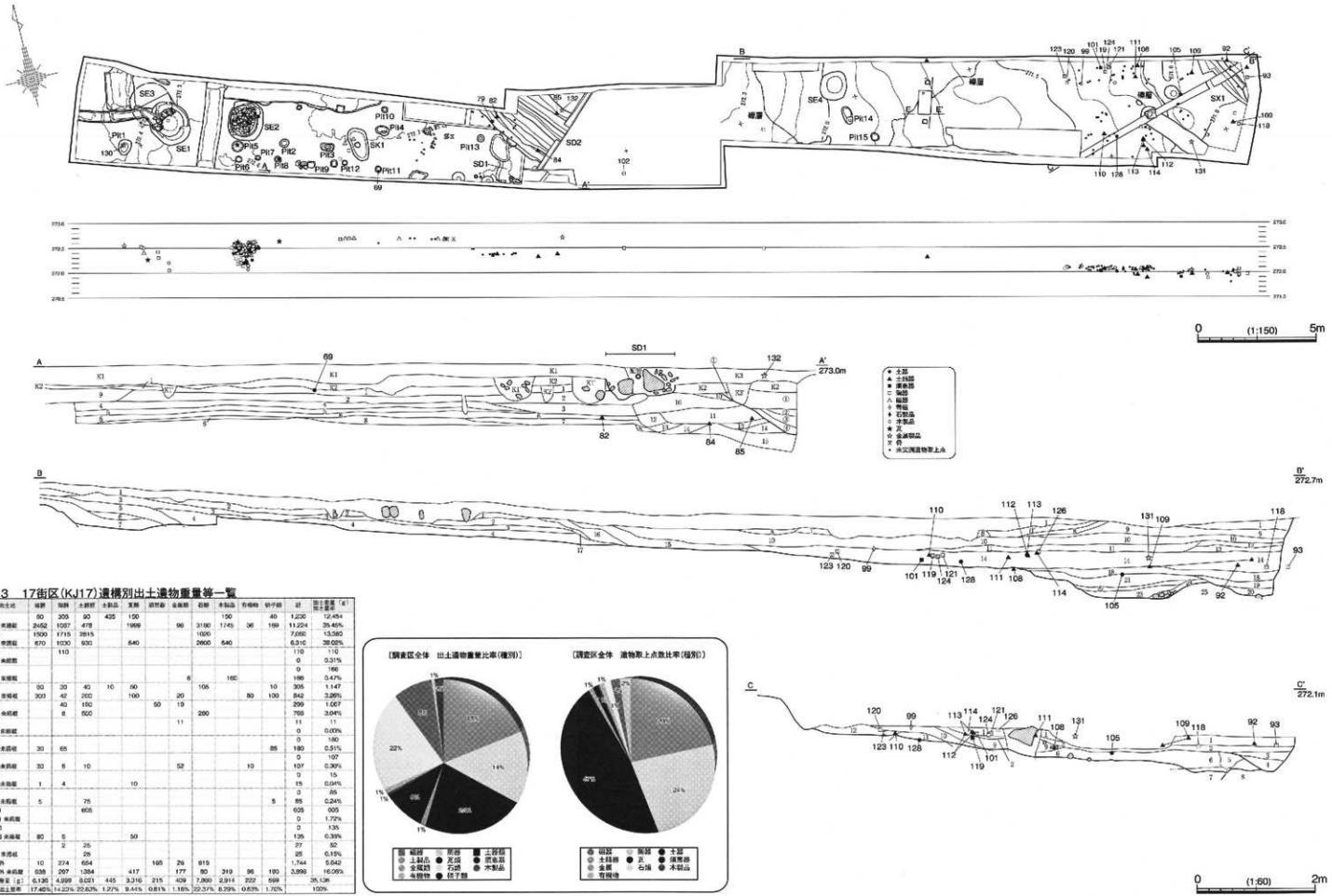
遺構確認面については試掘段階で確認された約0.5~1mの深さであった。層序に関しては、時代ごとの面的な埋没状況は把握できず、確認できた遺構は少ないものの、調査区北側ではほぼ同一面で古墳時代から近世までの遺構・遺物を検出した。一方、調査区東側については、礫を多く含む河川堆積層であったためか、上層の部分は地震を整えられた可能性もあり、近世段階の遺構は確認できなかった。

遺物の出土状況についても、調査区西側で検出した井戸や溝といった遺構内からの出土が主であった。遺物が混在したIV層については、調査区内で最も低い東端部で出土遺物のまとまりがみられるものの、中世~平安・古墳時代前期・繩文時代中期の土器片が混在しており、表面も劣化したものが多いことから、大半が河川の作用で流れ込んできたものと推定した。



第7図 17街区(KJ17)基本層序柱状図





第9図 17街区(KJ17)遺物出土状況図

第4節 発見した遺構と遺物

第1項 井戸跡 (SE)

SE1・3 [遺構：第10・12図／遺物：第16図／写真：図版2・3・9]

調査区西端で重複する2基の井戸跡を検出し、それぞれSE1、SE3とした。ここでは調査の経過と遺構の構造を説明するため、まとめて報告しておく。

SE1については試掘調査段階で確認されていた遺構である。確認面における遺構の形状は不均整で、遺構の周辺は調査前まであった達物の基礎がかかるており、その構築時または撤去時の搅乱を受けている。覆土のしまりは弱く、上層部分には近代の廃棄物が混在していた。確認面より約30cm掘り下げたところで石積みを確認し、井戸跡と断定した。円形の井戸で、規模は長径1.95m、短径1.65mを測った。確認面からの深さ約2mから湧水はじめ、深さ2.3mまで掘り下げたが底面の確認はできなかった。

SE1の特徴としては、周辺調査で確認している石組の井戸と異なり、石積みは一部（一辺）のみでその他の部分は素堀であった。石積みに用いられた石材については、幅25cm、長さ40cmほどのやや細長いものであり、割石は少なく、ほぼ自然の円礫が積まれていた。石積みは上面から約1.5mの深さで胴木が用いられており、さらに下方へ3段以上続いているが、湧水のためそれ以上の掘り下げは断念した。

平面と断面の測量後にこの石積みを外したところ、もう一基別の井戸跡（SE3）が重複していたことが判明した。石積みの遺存状況と覆土の観察から、SE3を壊してSE1を構築したため、石積みで重複部の井戸跡面を補修もしくは修築（土留め）したものと推定した。

SE3についても、上部に建物のコンクリート基礎が残っており、遺構内すべてを掘り下げるのは危険と判断し、全掘はしなかった。推定径では約1.75m、深さは2.2mまで下げたところで礫の堆積層となった。なお、(1・2)はSE3上面の落ち込み付近（井戸枠周辺）。但し、枠自体を示す痕跡は確認できなかった）から出土しており、石積みの裏込め部を外した後、堆積土中で熔結片の出土も確認した。(3)はSE1内から出土したが、同遺構の上部からは木材や瓦片とともに、明治・大正期から昭和前半頃にあたる陶磁器・土器の小片、瓦器類・ガラス瓶などが出土している。

近代の遺物では、甲府停車場の近隣のためか、汽車土瓶〔5～8〕などの鉄道に関連する遺物の出土や、素焼きの磁器でおろし金と包丁を烈押成形した玩具〔10・11〕などのミニチュア製品の出土もみられた。また、木製の軸留めと推定する部材〔68〕なども出土している。

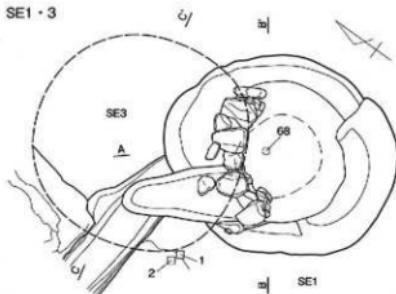
出土遺物が少なく、遺構の構築年代については断定できないが、石組みの裏込め土から近代の陶磁器片が少量混在していたことから、SE1は近代、SE3は江戸後期段階の遺構と位置付けておきたい。

SE2 [遺構：第11・12図／遺物：第16～20図／写真：図版3・9～11]

調査区西側、SE1より約3m東で検出した。検出状況については、覆土のしまりが弱かったSE1と異なり、おそらくは建物建築前の整地の影響を受けて硬く締まっていたため、遺構確認の段階では土坑としていた遺構である。上部には陶磁器や礫、貝などが混入していたことから、井戸上部は廃棄坑もしくは整地のために掘り返され、廃棄物とともに再度埋め立てられた可能性が窺えた。形態については素掘りの井戸であり、壁面の観察でも石組や木枠の痕跡はなく、深さ約3mで砂層となった。底面には達しなかったが、下部の壁面では井戸構築の際につけられた工具鉤（鍬か）をみることができた。

本調査区において最も多くの遺物が出土した遺構であるが、遺物の出土状況は覆土上部と下部で明確に異なった。前述のとおり遺構の埋没状況に起因するものと考え、覆土上部では陶磁器類を多く包含し、磁器〔17～33〕・陶器〔34～50〕・土器〔51～64〕など主に17世紀前葉～19世紀前葉までの遺物が出土している。一方、遺構の下部では陶磁器類の出土は少なく、礫や木片などが多く混在しており、一度に埋め立てられて

SE1・3



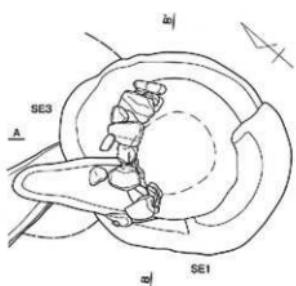
272.5m

E'

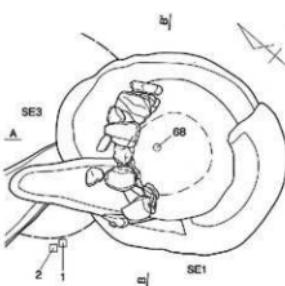
E

二輪器
○木製品

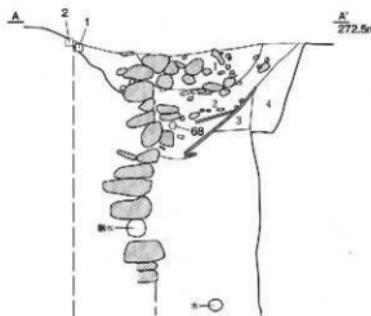
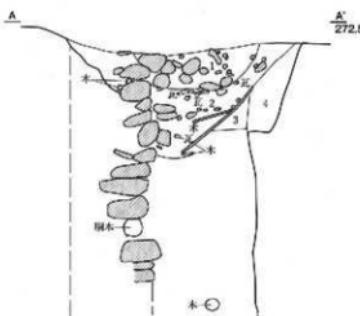
SE1



A'

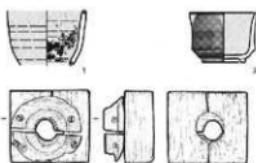


A'



SE1

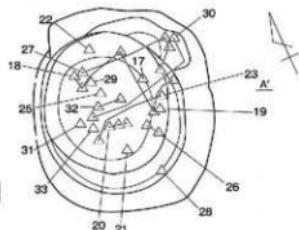
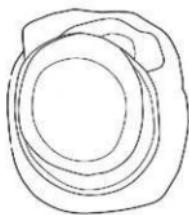
- 1 10YR3/2 黒褐色 深、ガラス瓶、瓦、砕石等、有機物を含む堆積土。
- 2 25Y3/2 黒褐色 砂礫層、鉄分多含、部分的に黃色化。
- 3 10YR3/3 黄褐色 砂色、サビ多含、有機物堆積土。やや粘質。
- 4 10YR2/1 黑 費質、L力強、黄褐色土少混、堆山。



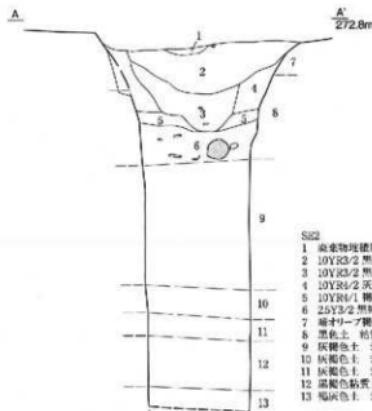
0 (1:40) 2m

第10図 17街区 SE(1)

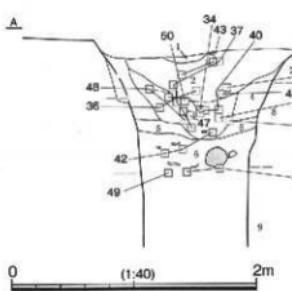
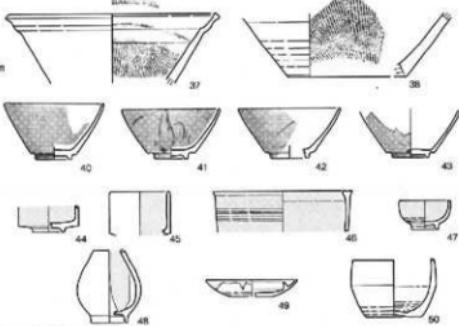
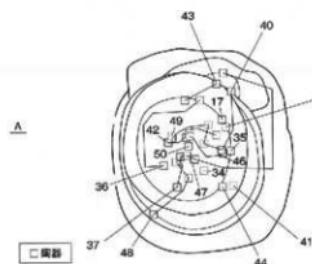
SE2



△ 鉛錠



S-2
 1 案内物理地質層
貝(螺)・ガラス等混在。ゴミ灰、埋空隙。
 2 LY3Y-2 黒褐色
炭化軟化。径5cm大粒含。ゴミ灰、埋立層。
 3 LY3Y-2 黑褐色
炭化軟化。径5cm大粒含。ゴミ灰、埋立層。
 4 LY3Y-2 黑褐色
炭化軟化。径5cm大粒含。ゴミ灰、
 5 LY3Y-2 黑褐色
炭化軟化。砂質土。径5-5cm大粒の埋少含。
 6 ZSY3-2 黑褐色
人頭大的含。炭化軟化。粘土質。
 7 黒褐色土
粘質。サビ含。
 8 黒色土
粘質。サビ含。
 9 灰褐色土
シトト。砂泥。サビ含。黒色土質。
 10 灰褐色土
シトト。サビ多含。黑色土質。
 11 灰褐色土
シトト。サビ多含。
 12 黑褐色粘質土
粘子細かく。
 13 黑褐色土
シトト。粘子細かく。



第11図 17街区 SE(2)

いた事が窺えた。なお、確認できた範囲においては、深さ2mほどのところで焰烙の小片が出上している。

出土遺物の時期については、古くは15世紀後半~16世紀前半頃の土器（香炉）〔51〕や、17世紀代に位置付けられる陶器片（皿〔34〕、香炉〔35〕、擂鉢〔36〕）が混在した。しかし、出土遺物の主体はおおよそ江戸時代後半、概ね18世紀後葉あたりに比定する肥前所産の磁器と、瀬戸・美濃所産の陶器であり、前者では皿〔20・29〕、碗〔19・21・22・24~28・30〕、御神酒濁利〔23・31~33〕、後者では擂鉢〔37〕、半廻甕〔46〕等が出土している。また、土器類では焰烙〔52~59〕、櫛焼〔60・61〕、火鉢〔63・64〕など、江戸時代後期に位置付けられるものが出土した。覆土内で最も上部からはひで鉢〔66〕や砥石〔67〕などもあり、同時期の様相を示す生活雑器がまとめて廃棄されていた状況が窺える。

なお、造構の年代であるが、井戸の構築および廃棄された時期は明確ではないが、SE1のような近現代の混入物はみられず、少なくとも19世紀半中頃までには廃棄・埋没し、整地されていたと考えている。

SE4〔遺構：第12図／写真：図版2〕

調査区中央やや東で検出した。近代のゴミが埋め立てられており、上部堆積物を約1.2mまで掘り下げても底面は確認できなかった。出土遺物はガラス瓶・近代陶器・プラスチックなどとともに、土器片・陶磁器片・瓦などが出土したが、小片のため図化しなかった。なお、調査区の埋め戻しの際に断ち割りを実施した結果、深さ約3.5mまで布や襷、生活雑貨等のゴミが堆積していた。底面までは掘り下げながらも、確認した範囲では桶や木材、石積等の構築材はみられず、素掘りの井戸であったと思われる。

同地区に住まわれていた方からの聞き取りでは、捕まえてきた魚をこの井戸内で飼っていたという話も伺え、近代まで利用していた遺構と考えられる。

第2項 土坑（SK）

SK1〔遺構：第12図／写真：図版4〕

調査区西側で検出し、不整円形で長径142cm、短径73cm、深さ15cmを測る。調査時はSK2としていた遺構である。遺物の出土ではなく、中央付近に約30cm人の踝があった。年代、性格については不明である。

第3項 ピット（Pit）

15基を確認した。今回の調査区は二の堀外側に位置し、町屋が形成されたと推定される地域にあたることから、当初より注視して調査を進めた。しかし、鉄道との関連が窺える東西方向に並ぶ杭跡はみられたものの、近世段階の建物の痕跡は確認できなかった。調査状況から、町屋建物自体が礎石立ちであった可能性や、井戸跡を検出していることから、調査範囲自体が建物の範囲外にあたっている可能性も考えられた。

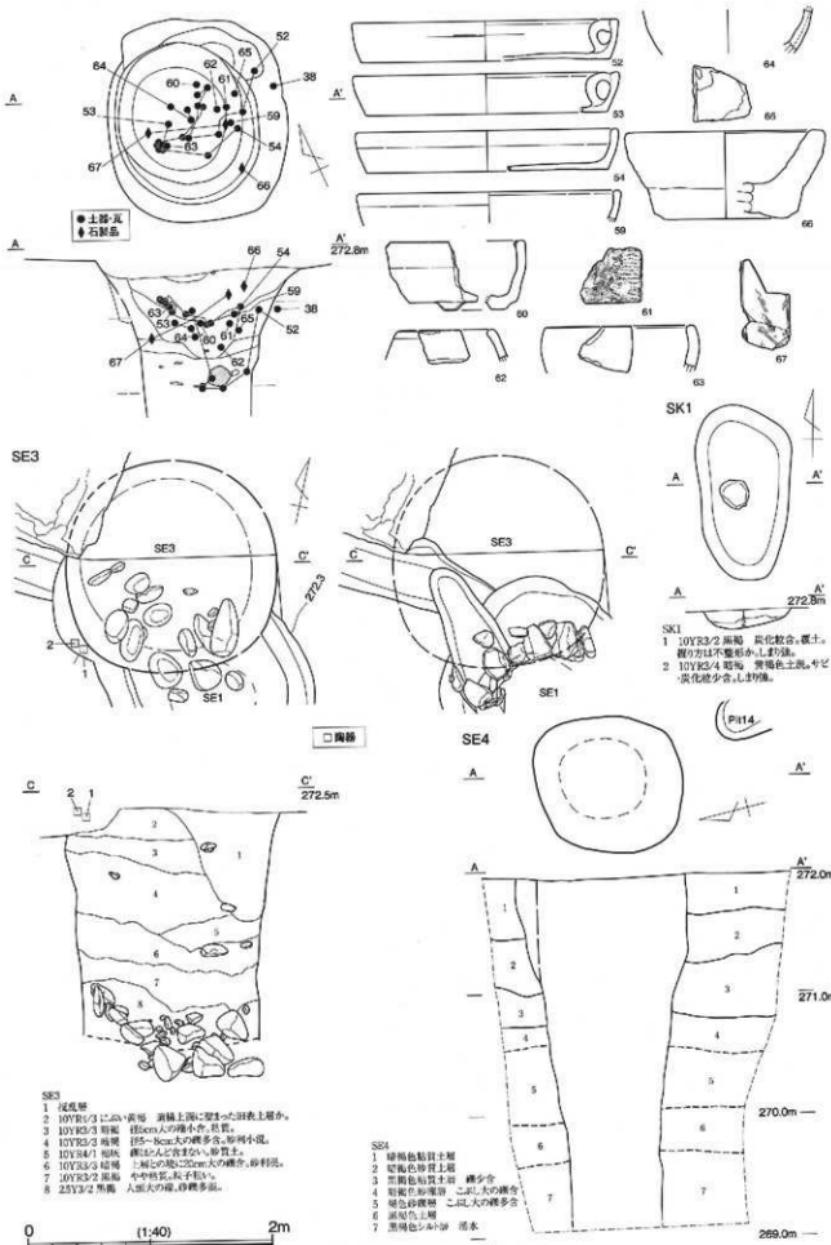
以下、特徴的な遺構について述べ、その他は表4にまとめた。

Pit1〔遺構：第13図／遺物：第22図／写真：巻頭図版3-5、図版5・14〕

調査区西端で検出した。遺構精査の段階で上部に銅椀〔130〕の出土を確認した。銅椀は検出時には既に土圧で細かく破損していたものの、正位で出土した状況を確認している。また、覆土観察からは柱を抜取した後に銅椀を納めたような状況が窺え、なんらかの祭祀・地鎮行為の痕跡であったとも考えられる。

銅椀については仏具のひとつと考えられ、関連する遺物としては、周辺ではSE2から御神酒濁利等も出土している。但し、他に同遺構から伴出した遺物はないため、時期・性格ともに明確ではない。また、県内においては銅椀の出土事例自体が希少で、今回の出土品については非常に薄く、取上げ時にはバラバラになってしまっていた。接合・復元により底部は付け高台となっていることが分かったが、年代については不明である。

なお、県内の事例では北杜市（旧明野村）に所在する深山田遺跡で13~14世紀にあたる六器の出土が報告されている。甲斐市（旧敷島町）に所在する山宮地遺跡では、堅穴遺構から銅製品が出土しており、鑄造ま



第12図 17街区 SE(3)・SK

表4 17街区(KJ17) ピット一覧

遺構名	形態	法量(cm)			調査時 遺構名	調査次数	観察所見
		長軸	短軸	深さ			
Pit1	楕円形	66	52	33	Pit1	第2次	銅鏡(130)出土。江戸期の遺構か。
Pit2	楕円形	40	36	10	Pit2	第2次	羅多含。陶磁器片が混在。
Pit3	不正形	58	33	18	Pit3	第2次	羅多含。底面中央に凹みあり。陶磁器・土器・金属小片が混在。
Pit4	不正確円形	57	39	20	Pit4	第2次	小砾少含。陶磁器・土器・瓦小片が混在。
Pit5	円形	50	46	11	Pit5	第2次	ほほ確認面から近代瓦片出土。
Pit6	円形	28	26	13	Pit6	第2次	鉄道開通の遺構(枕絆)か。
Pit7	円形	23	20	4	Pit7	第2次	小砾少含。江戸期の遺構か。
Pit8	楕円形	29	25	8	Pit8	第2次	鉄道開通の遺構(枕絆)か。
Pit9	方形	29	27	20	Pit9	第2次	鉄道開通の遺構(枕絆)か。磁器・瓦片が混在。
Pit10	円形	27	25	7	Pit10	第2次	小砾少含。江戸期の遺構か。
Pit11	方形	27	25	13	Pit11	第2次	底面に土器片(69)、鐵板か。羅多含。
Pit12	円形	22	21	6	Pit12	第2次	小砾少含。江戸期の遺構か。
Pit13	円形	30	29	17	Pit13	第2次	羅多含。タイル・瓦等。近代の遺物片が混在。
Pit14	楕円形	77	40	14	Pit14	第1次	井戸(SE4)に伴う遺構か。
Pit15	不正円形	38	33	20	Pit15	第1次	井戸(SE4)に伴う遺構か。

たはなんらかの儀礼行為との関連が指摘されている。甲府城下町内においても銅製品の検出事例は少なく、関連性も希薄ではあるが、甲府城船荷櫓の調査では地鎮具として17世紀代の銅製の輪宝が出土している。また、武田城下町においても建物範囲の下またはその周辺において、かわらけと銅錢・刀子などを埋納する事例が報告されている今回の銅鏡の出土事例も、地鎮に関連する資料のひとつとなる可能性も窺える。なお、調査地は周辺にいくつかの寺院が立地する環境にあるが、同遺構に結び付くような情報は得られなかった。

Pit11 [遺構: 第13図/遺物: 第20図/写真: 図版6・12]

調査区西端、SK1の南で検出した。覆土中には砾を多含し、底面に土器片[69]を礎板に用いた柱痕を検出した。遺構年代は明確ではないが、近代に位置づけられるものと考える。

Pit14・15 [遺構: 第13図/写真: 図版6]

いずれもSE4の周辺で確認し、近代の井戸に伴う痕跡と考えられる。Pit14は上面にセメントがあり、柱の基礎もしくは井戸から排水を受ける水落ち部分などと考えられる。Pit15からは近代の化粧品容器が出土した。両遺構とも確認面からの深さは浅く、柱痕等は確認できなかった。

第4項 溝跡(SD)

SD1 [遺構: 第14図/遺物: 第20図/写真: 図版4・12]

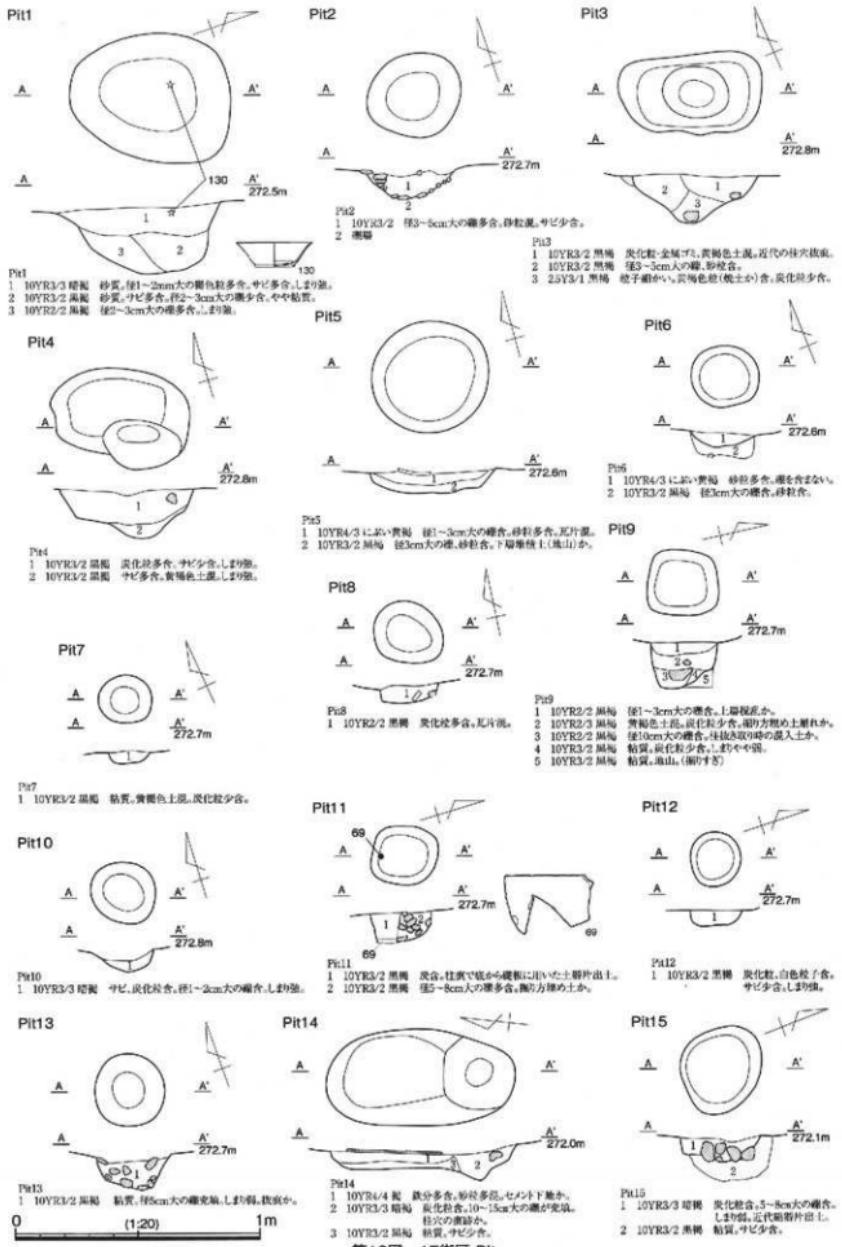
調査区の中央よりやや西側で検出し、検出範囲においては長さ約3.4m、幅約1.1m、主軸方向はN-20°-Eを測った。西側を面とする間知石に、約30cmほど間を開けた対面に自然石を二段ほど積み、その間に側溝としていた痕跡である。但し、石材は調査区壁面で確認したのみであり、間知石及び石積みの裏込めまでを遺構範囲として同化している。なお、甲府城下町、とくに甲府駅周辺の地域では、他にもこのような間知石との間に石を積んで側溝を構築する事例がみられ、鉄道開設後に排水施設として整備したものである可能性がある。

出土遺物は近代のものが主で同化はしなかったが、陶磁器・瓦片の他、水晶なども出土した。また、下層のSD2と一部重複していることから、古墳時代の遺物が少量混在した。

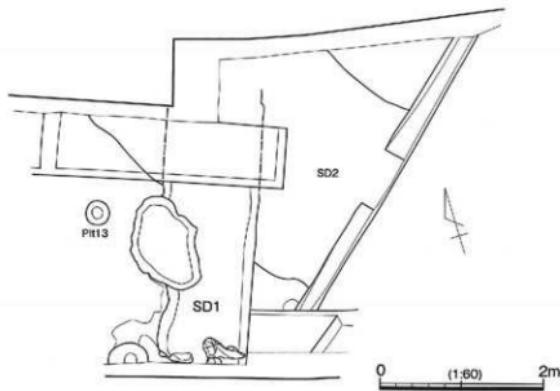
SD2 [遺構: 第14・15図/遺物: 第21図/写真: 図版4・12]

調査区の中央よりやや西側で検出し、検出範囲においては長さ3.5m、幅2.6m、主軸方向はN-37°-Wを測った。甲府市教育委員会が実施した調査で検出した遺構の延長部分に位置し、断面形状等の特徴からも同一の遺構と考えられ、推定17m以上の溝跡となる。

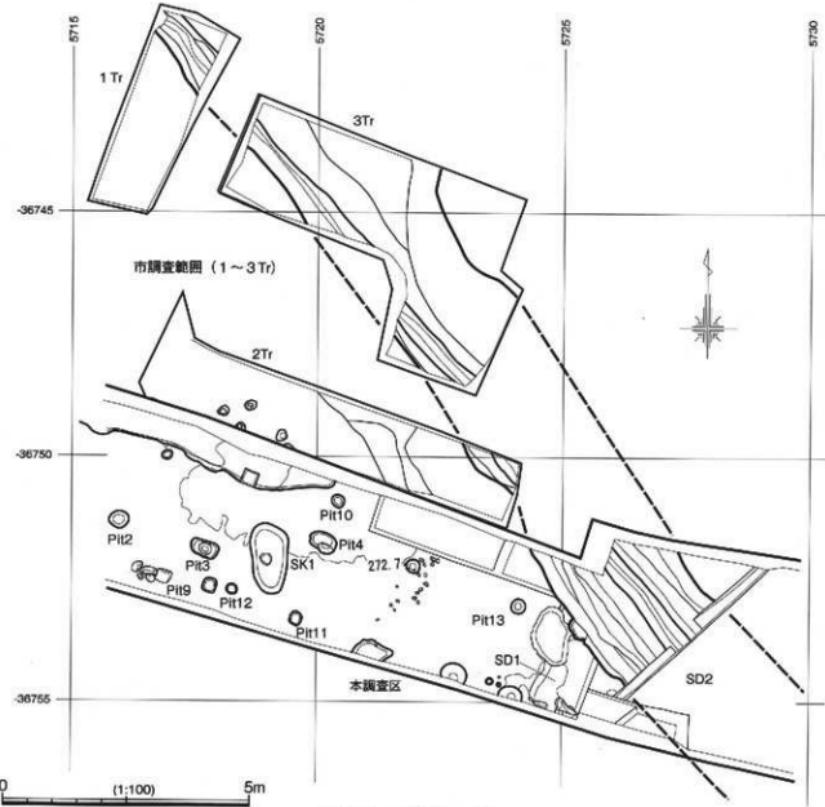
覆土中には砾が多く、流れ込み等により自然堆積したものと推定する。但し、この遺構の特徴は溝底の中



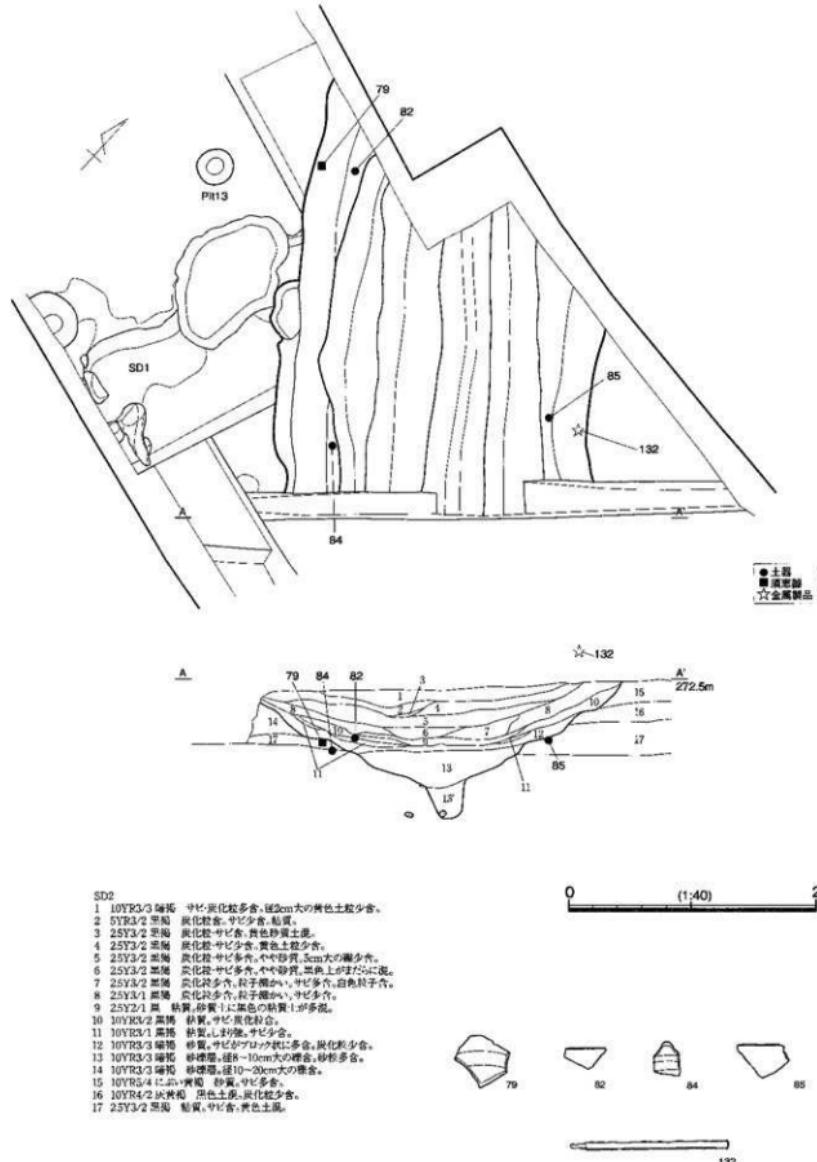
SD1



SD2 検出状況



第14図 17街区 SD(1)



第15図 17街区 SD(2)

央部分が脇状を呈していることであり、自然の流路跡ではなく、明らかに人為的に造られた溝であることがわかる。なお、脇状部分については疊の光填がみられるが、覆土上部と同じく自然堆積したものなのか、またはあらかじめ人為的に入れられていたもののかは明確ではない。また、今回検出した範囲内においては脇状の部分および疊堆積からの遺物の出土はみられず、構築された時期および埋没の時期ともに不明である。

出土遺物については、前述のとおり疊層よりも上の砂質土から検出したものが大半で、古墳時代～平安時代の土器片、灰釉陶器片などが混在して出土した。その他、SD2の上部に設けたサブトレ内からは、かんざし状の金属製品〔132〕も出土している。

規模的には古墳時代の方形周溝墓等の遺構の一部である可能性も考えられるが、ここまで調査成果からは、遺構の性格や年代の特定は困難である。今後の調査と市教育委員会の調査成果報告に期待し、あらためて検討することにしたい。

第5項 不明遺構（SX）等

SX1（遺構：第8図／写真：図版7・13）

調査区の東端で確認した遺構で、地山を掘り込んだ肩部分のみ検出した。覆土より古墳時代の土器片が出土しており、同時期の溝や住居跡などの遺構である可能性も窺えたが、調査区外へ広がっていたため、性格不明遺構とした。出土遺物については、小片のため図化しなかったが、覆土中に古墳時代の土器片が混在した。

第21図には、調査時にはSX1出土の遺物として取上げていた古墳時代の台付壺脚部〔92〕と、陶器で大窯の皿片〔93〕を掲載したが、出土位置のレベルから上層の包含層（遺構外）の遺物であることが判明した。よってSX1から出土した遺物は図化したものはないが、覆土中から古墳時代前期の土器片が出土している。

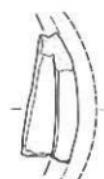
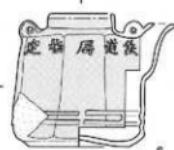
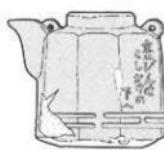
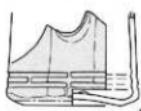
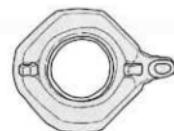
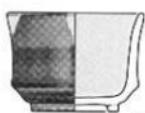
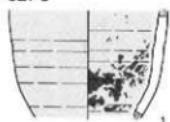
河川堆積層（遺構外）（遺構：第8図／遺物：第21・22図／写真：図版7・13・14）

SX1の上層面で、調査時は調査区東側流路として調査し、自然堆積層内からの遺物の出土を確認した。同範囲において遺構の有無を精査しながら掘り進め、最終的には調査区東端で地表から約1.3mほどの深さまで掘り下げ、堆積状況の確認と遺物の取上げを行った。

東側に向かって緩やかに下る地形に沿った堆積であったが、今回地山とした面（SE4周辺など）では疊層・砂質土層が部分的に堆積している状況がみられ、水流（河川）の影響を受けた堆積であることが窺えた。

出土遺物は縄文時代中期末の曾利式の土器片〔128〕、古墳時代ではS字状口縁付壺や、高坏の脚部など、平安時代では土器脚部・壺・須恵器・灰釉陶器、中世では18世紀前半の青磁片〔99〕等が出土している他、小片のため図化しなかったが陶磁器・土器の小片等が混在した。遺物の年代ごとの堆積状況についても検討を試みたが、特別な傾向等はなく、土器表面の磨滅状況からも流れ込みによって堆積した遺物であったといえる。

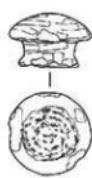
SE1-3



13



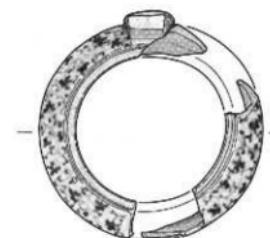
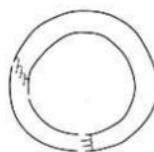
14



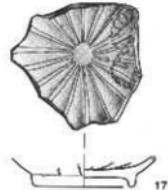
15



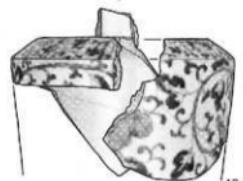
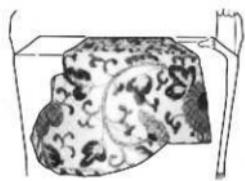
16



SE2



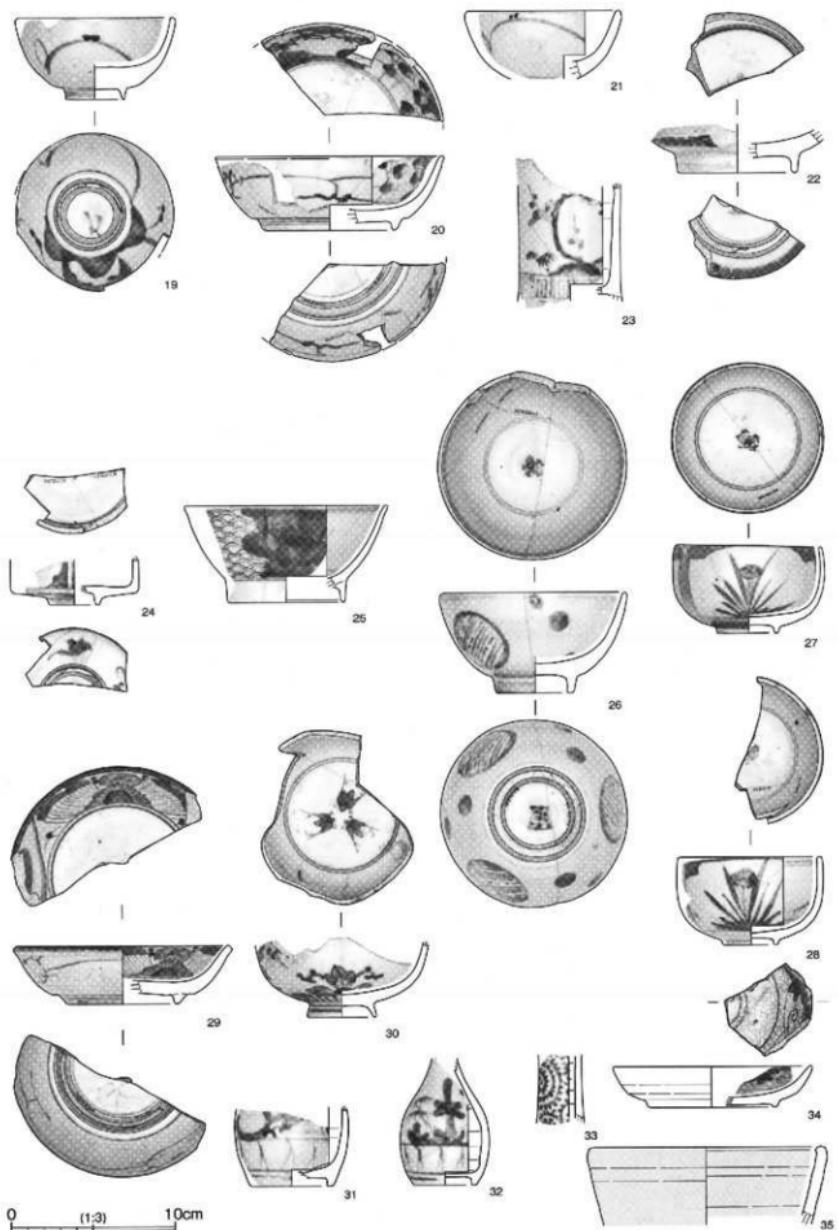
17



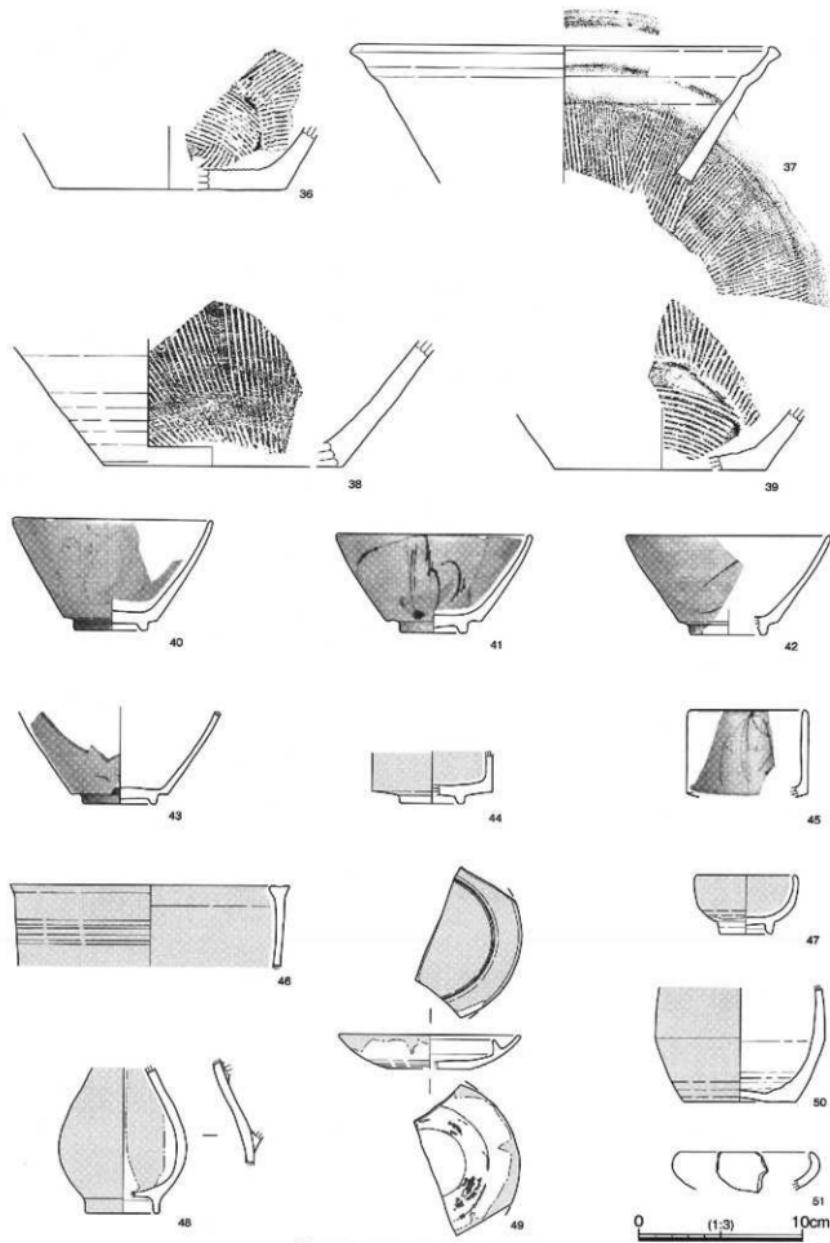
18

0 (1:3) 10cm

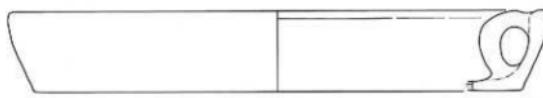
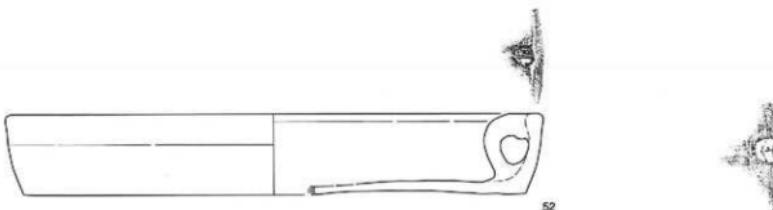
第16図 17街区出土遺物 [SE①]



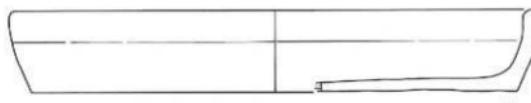
第17図 17街区出土遺物 [SE②]



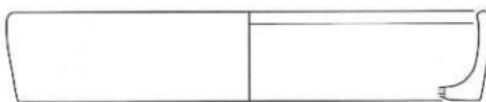
第18図 17街区出土遺物 [SE(3)]



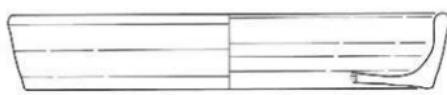
53



54



55



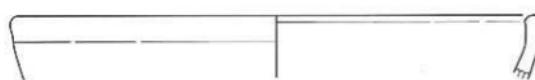
56



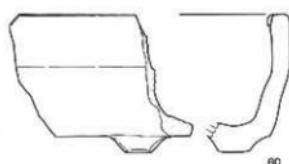
57



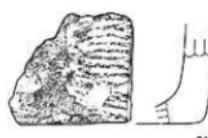
58



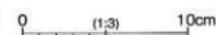
59



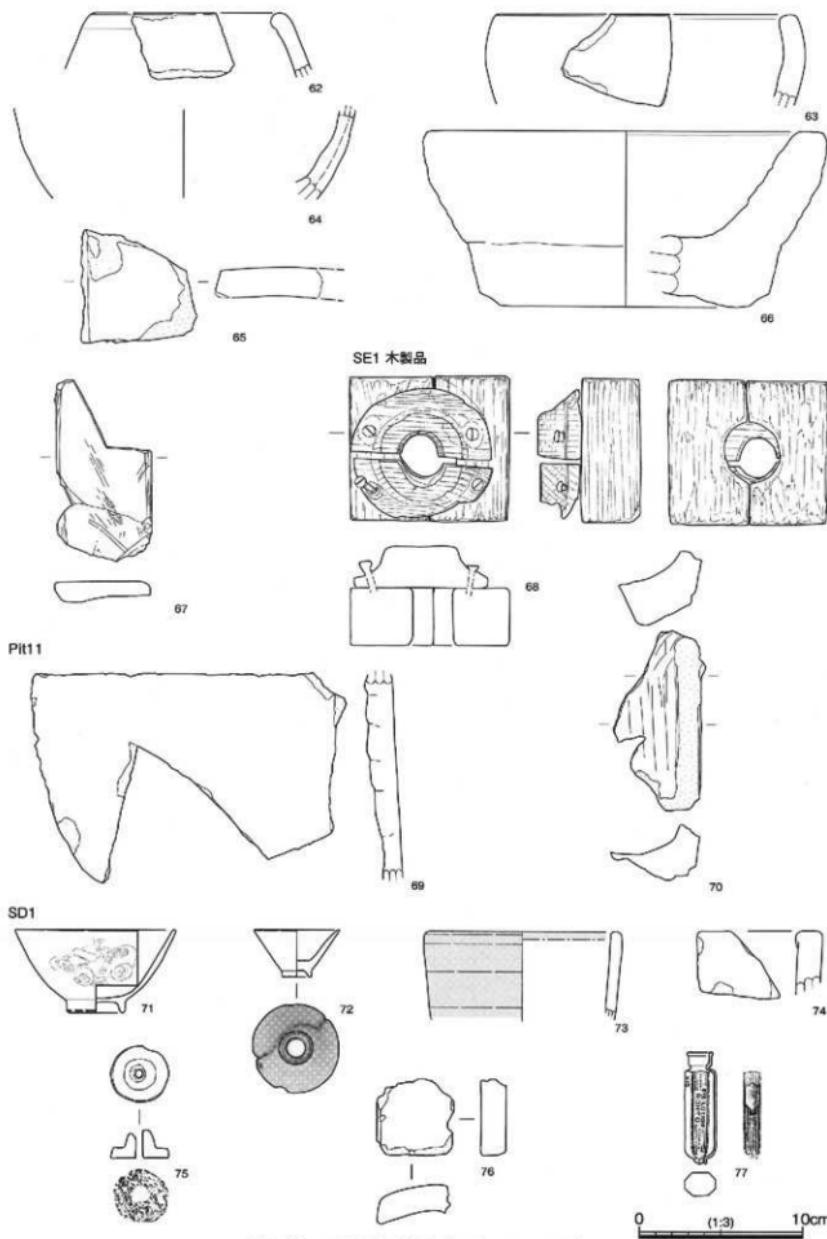
60



61

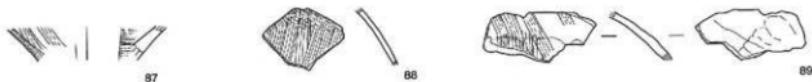
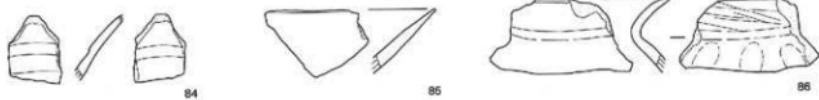
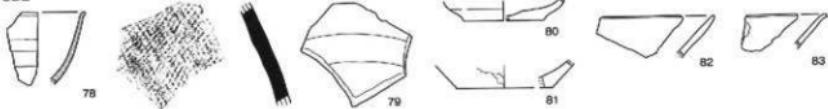


第19図 17街区出土遺物〔SE④〕

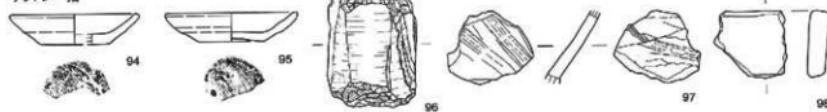


第20図 17街区出土遺物 [SE5・Pit・SD1]

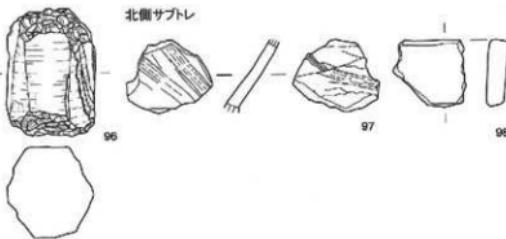
SD2



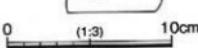
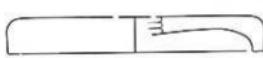
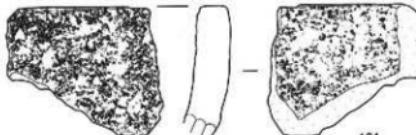
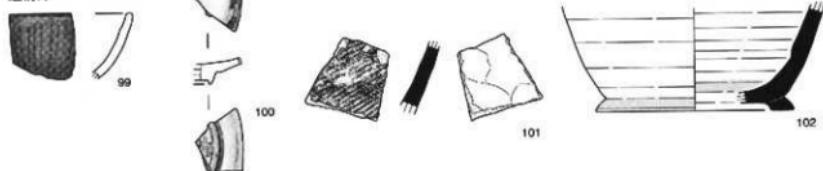
サブトレ一括



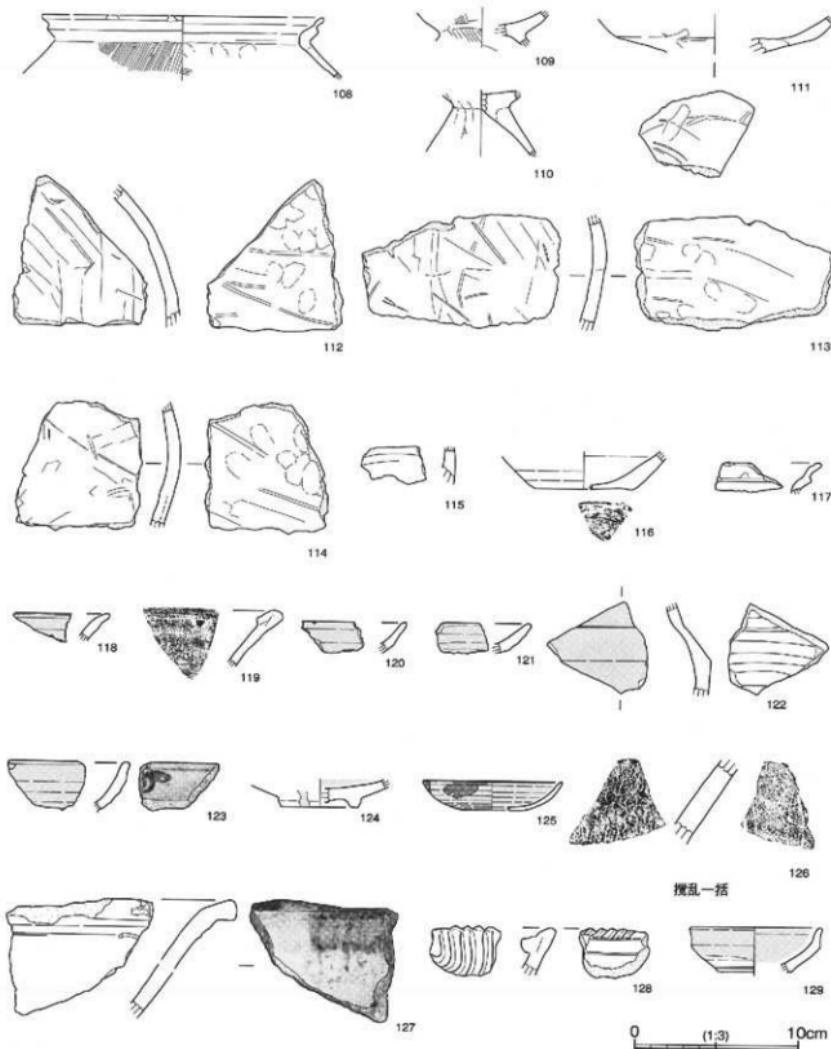
北側サブトレ



遺構外



第21図 17街区出土遺物〔SD2・遺構外①〕



金属製品

第22図 17街区出土遺物〔遺構外②・金属製品〕

第4章 43街区[丸の内一丁目12-3地点(KJ1-12)]の調査

第1節 調査区について

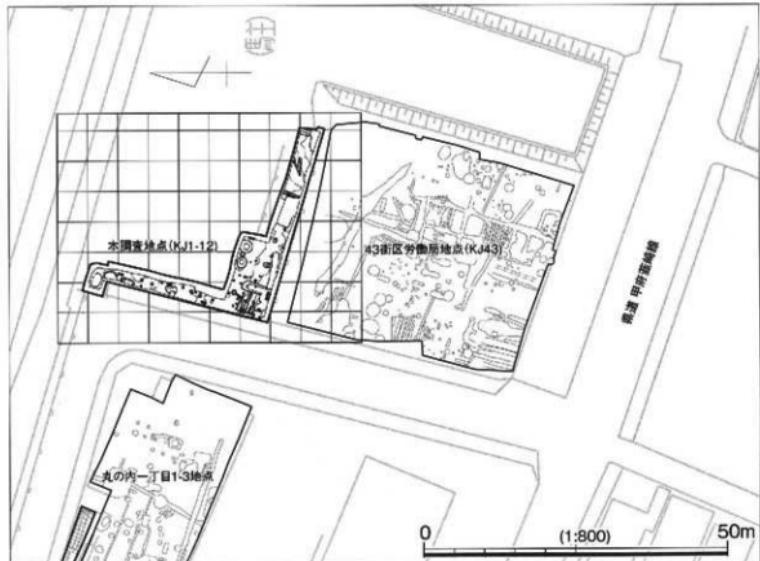
調査地点は、JR中央本線の南側、甲府駅南口より約190mに位置する。調査時は、甲府駅南口地点としていたが、整理段階において周辺の調査地点との区別を図るために、丸の内一丁目12-3（KJ1-12）地点とした。県道甲府蘿崎線に面して立地する労働局の北側に隣接しており、調査区は甲府駅ビル（名称・エクラン）の駐車場の南西隅部分であった。調査範囲は南北方向に約30m、東西方向に約32mのL字状を呈し、その面積は約227m²を測る（第24図）。駐車場部分は厚い盛土で覆われており、確認面（SK5付近）までの深さは285mを測った。しかし、すべての遺構が盛土によって保護されていたわけではなく、調査区の西端には側溝が敷設されており、その構築時に一部の遺構が削平されていた。

第1章でも述べたが、今回の調査区では試掘調査を実施しておらず、調査区に近接する平成14（2002）年に山梨県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った現在労働局が立地している敷地（以下、労働局地点と称す）の調査成果（山梨県教育委員会2004『甲府城下町跡』－甲府駅周辺土地区画整理事業地内43街区埋蔵文化財発掘調査報告書－）を基に進めた。なお、出土遺物の注記等に用いた略記の「KJ」については、同報告書の表記に準じて使用したものである。

また、今回の調査区は、御先手小路に面する西側部分と他の屋敷地に隣接する南側部分といった、近世の屋敷地に推定される範囲の外郭部分をL字状に調査した格好となつたことから、整理報告の段階においては調査区の御先手小路側を調査区の「南北トレンチ」、屋敷地側を「東西トレンチ」、両トレンチの接する部分を「調査区南西隅」と称し、検出した遺構の位置を示す際に使用しているので、御留意頂きたい（第24図）。

第2節 調査区周辺の環境

第2章でも触れたが、本調査区は二の堀内側の内郭にあたり、近世段階には御先手小路に面した武家屋敷地となっていた場所である。武家屋敷地が廃絶した後は畠地となり、さらに甲府停車場の開業に伴って、汽



第23図 43街区(KJ1-12)調査区位置図

車の引き込み線が設置された場所のため、厚い盛土で覆われていた地域であった。先述のとおり、労働局地点の北側に隣接しており、試掘データがない状況であったことから、調査時には同地点の報告書にまとめられたデータを基に調査を進めた。また、調査時に基本層序や遺構確認面の目安としただけでなく、今回の報告にあたっては、同地点の報告書で検討された内容を基盤として検出した遺構・遺物についての考察と検討を行った。その成果のひとつとしては、労働局地点で検出した地割に関する溝跡の延長上にあたる溝状遺構を確認したことがあり（第23・25図）、中近世から近代における地割を検討する上で貴重な事例になったといえる。

第3節 調査経過について

第1章でも触れたが、発掘調査は入江俊行（元山梨文化財研究所調査員）が担当し、平成20年3月3日～31にかけて実施した（機材搬入に関しては2月29日より実施）。まず、重機による表土剥ぎを3月3日～5日の3日間で実施した。掘り下げは労働局地点の調査報告に基づいて実施され、基本土層第V層上面で人力による遺構確認を行った。測量作業のための基準点設置については、（株）テクノプランニングに業務委託を行い、3月5日に実施している。

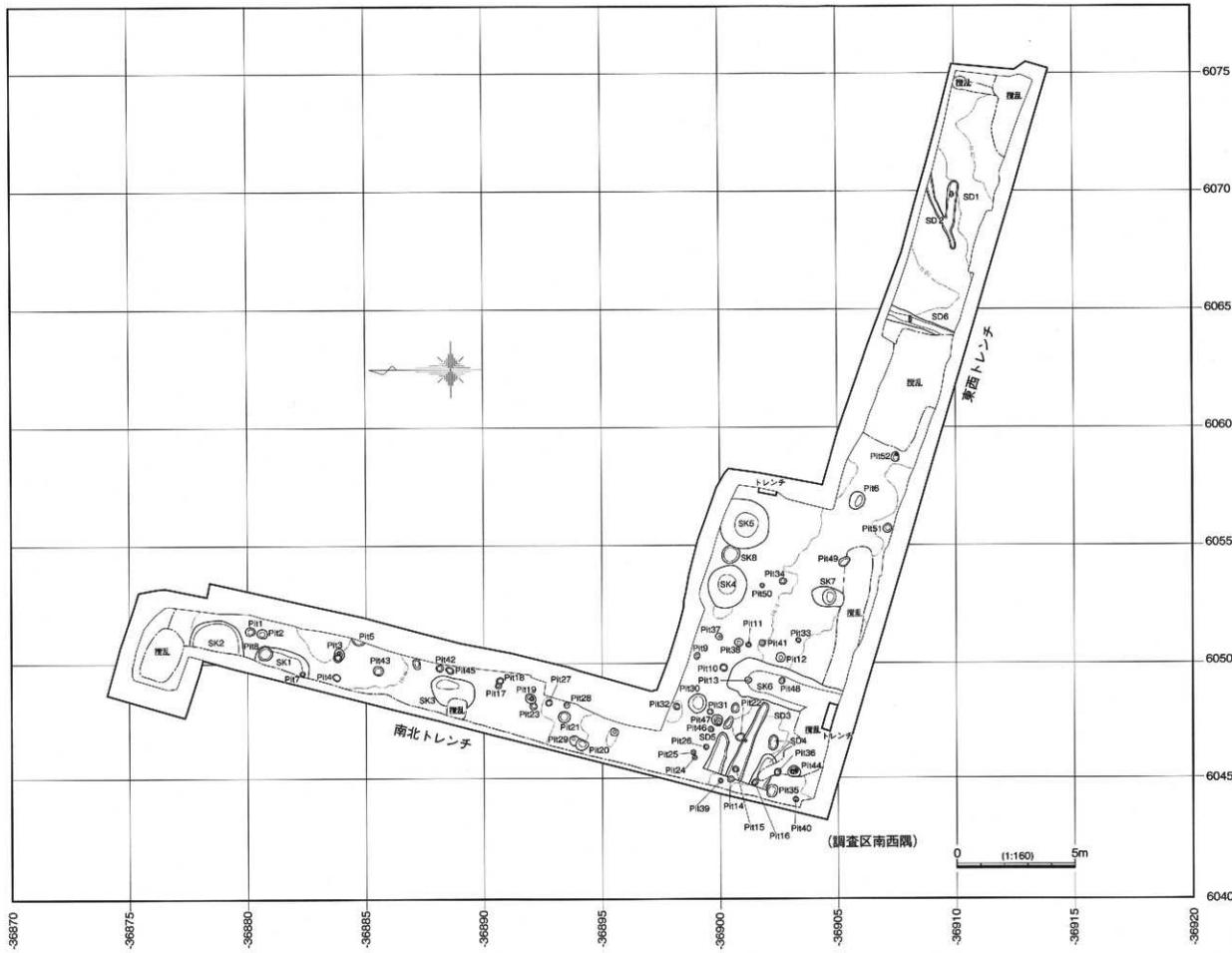
その後、遺構精査と検出掘り上げおよび記録作業を順次行い、3月27日にポール撮影による写真測量を実施した。遺構の記録観察および撤収作業・基礎整理作業を同年3月31日までに完了し、発掘調査業務をすべて終了した。

整理作業については、甲府市より委託を受けた平成24年9月から実施し、望月秀和（山梨文化財研究所調査員）が担当して平成25年3月に報告書の刊行に至った。なお、本報告の執筆に際しては、調査を担当した入江がまとめた調査概要報告と測量データ、および出土遺物の観察を基にして望月がまとめた。本書における文責はすべて望月が負うものである。

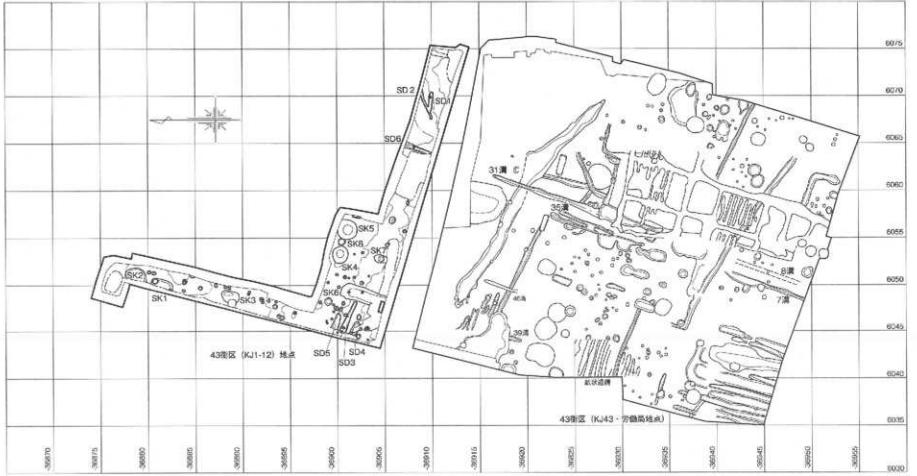
調査日誌

平成20(2008)年

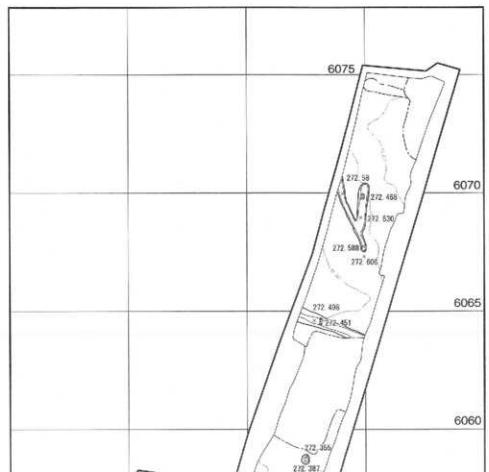
- 2月29日 機材搬入。
- 3月3日 重機・プレハブ・トイレ搬入、表土剥ぎ、遺構精査開始。
- 3月5日 表土剥ぎ完了。測量基準点設定。
- 3月27日 ポール撮影による写真測量。
- 3月31日 撤収・基礎整理作業完了。発掘調査終了。



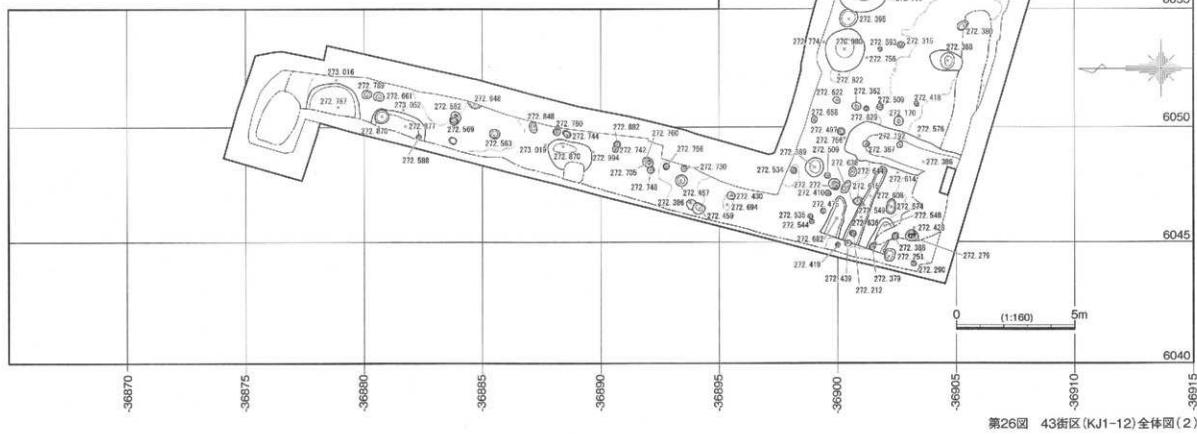
第24図 43街区(KJ1-12)全体図(1)



第25図 43街区 (KJ1-12)・労働局地点 遷構対応図



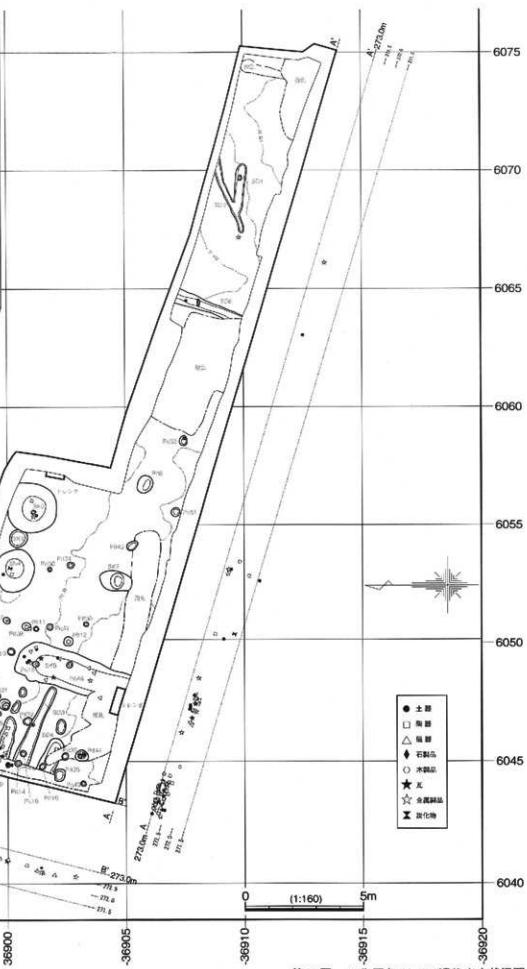
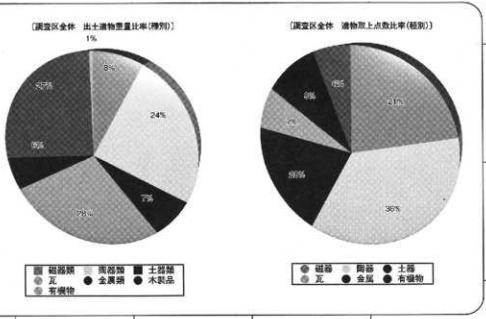
第25図 43街区 (KJ1-12)・労働局地点 遷構対応図



第26図 43街区 (KJ1-12) 全体図 (2)

表8 43街区(KJ1-12)遺構別出土遺物重量等一覧

出土地	遺構類	陶器類	土器類	瓦	金属類	木製品	有機物	計	出土重量(g)
SK1	15		15					15	0.99%
SK1 未掲載								15	0.99%
SK2	55							55	0.71%
SK2 未掲載								55	0.71%
SK3	710	25						735	1.40%
SK3 未掲載	40	55	245	330				670	18.04%
SK4	15							15	0.60%
SK4 未掲載								45	60 0.77%
SK5	100	75	15					190	2.44%
SK5 未掲載								671	1.74%
SK6	25	148	65	5	420	433		513	15.21%
SK6 未掲載	83							0	12
SD3	10	2						12	0.15%
SD4								25	0.35%
SD4 未掲載								2	0.36%
SD5	6	80	5					71	0.91%
SD6								0	1
SD6 未掲載								4	0.05%
P12								0	1.170
P12 未掲載								1.170	15.03%
P11B								0	2
P11B 未掲載								2	0.05%
P120	55							55	0.73%
P120 未掲載								2	0.35%
P121								0	695
P121 未掲載								695	8.93%
P122								0	0
P122 未掲載								15	0.19%
P123								0	4
P123 未掲載								4	0.05%
P129								0	4
P129 未掲載								4	0.05%
P130	1	3						0	0.05%
P130 未掲載								25	0.32%
P130 未掲載								0	25
P143								275	2.75%
P143 未掲載								0	3.53%
P144								205	2.05%
P144 未掲載								205	2.63%
P145								0	65
P145 未掲載								65	0.74%
道構内	274	366	65					668	2.22%
道構外 未掲載	135	245	14	1,175				1,569	28.62%
種別重量(g)	593	1,834	573	2,200	467	2,070	45	7,782	
種別出土量(件)	7.62%	23.57%	7.36%	28.27%	6.00%	26.60%	0.58%	100.00%	



第4節 発見した遺構と遺物

第1項 土坑（SK）・井戸跡（SE）

土坑は8基検出し、そのうち2基は井戸跡（SK4・SK5）と考えられる。いずれも遺物が少なく、性格については明確ではないが、武家屋敷地に伴う遺構と推定した。なお、遺構名については調査時に付したまま報告し、井戸跡については（ ）を付けて示している。

SK1【遺構：第28図／遺物：第32図／写真：図版16・23】

南北トレンチ内の北側に位置し、平面形態は橢円形状であるが、西側は搅乱で壊されており、長径2.385m、短径は検出範囲で0.838m、確認面からの深さは14.4cmを測った。Pit7・8と重複しているが、切り合い関係は不明である。

出土遺物は15世紀後葉～16世紀前葉の景德鎮の碗〔1〕の他、小片のため図化しなかったが、土器片・陶器片が出土した。

SK2【遺構：第28図／遺物：第32図／写真：図版16・23】

南北トレンチ内の北端に位置する遺構で、SK1同様に西側は搅乱で壊されており、長径2.327m、短径は検出範囲で1.31m、確認面からの深さは13.5cmを測った。

出土遺物については、陶器で18世紀後葉の瀬戸美濃所産の碗〔2〕や、19世紀後半の萬古窯の急須片〔3〕などが出土した。

SK3【遺構：第28図／遺物：第32図／写真：図版16・23】

南北トレンチ内の中央付近に位置する。平面形態は不正橢円形で、西側の一部を搅乱で壊されていたが、長径は1.928m、短径は1.213m、確認面からの深さは9.3cmを測った。覆土は二層で下層に遺物を包含する。

出土遺物は18世紀後葉～19世紀中葉にかけての瀬戸美濃所産の陶器が主で、擂鉢の小片〔4〕、植木鉢〔5〕、徳利〔6〕、鉢〔7〕、壺〔8〕、灯明皿〔9〕、土瓶〔10〕、火鉢〔11〕の他、図化しなかったが、磁器や瓦片も出土している。遺構の性格は明確ではないが、出土遺物から江戸時代後期頃に比定される遺構と考える。

SK4（SE1）【遺構：第29図／写真：図版17】

東西トレンチ内の中央よりやや西側、SK8・SK5と並んで調査区の北壁際で検出した井戸跡である。

平面形態はほぼ円形と推定し、長径1.87m、短径は検出範囲で1.646mを測った。素掘りの井戸で、遺構確認面から1.8mほど掘削したものの、底面に達することはできなかった。断面形態は漏斗状を呈し、段はないしていない。出土遺物は、土器片が出土したが、小片で少量のため図化しなかった。

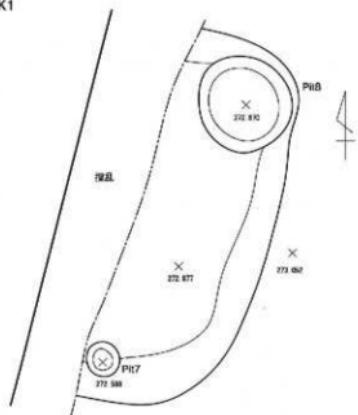
SK5（SE2）【遺構：第29図／遺物：第32・34図／写真：図版17・24・25】

東西トレンチ内の中央よりやや西側にあたり、SK4、SK8に並んで北壁際で検出した井戸跡である。遺構の一部は調査区外にかかっているが、平面形態はほぼ円形で長径2.233m、短径2.102mを測った。遺構確認面から1.6mほど掘り下げたところで人頭火の礫が主体となって堆積しており、状況から石組みを持った井戸跡であったと考えられる。

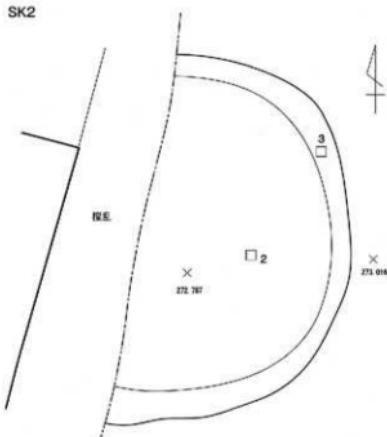
最終的に確認面から2.6mの地点まで掘削したが、依然として礫の堆積が続く状況であった。こうした礫の堆積が部分的なものではなく、一定の厚みをもつことが予測される点と、礫の大きさが比較的一定である点から、本來あった石組みが井戸内に崩落したものと考えられる。

出土遺物については、甲府城の築城期にあたる16世紀後半～17世紀初頭のかわらけ〔15・16〕と志戸呂の擂鉢片〔14〕、18世紀後半～19世紀前葉の擂鉢片〔13〕、古銭〔41・42・45・46・49〕が出土している。なお、遺物の出土状況は、一部新しい遺物が混在するが、古銭は遺構上部にまとまり、16・17世紀段階の遺物が下

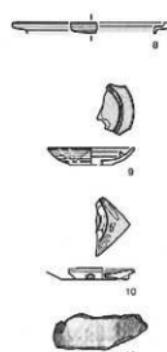
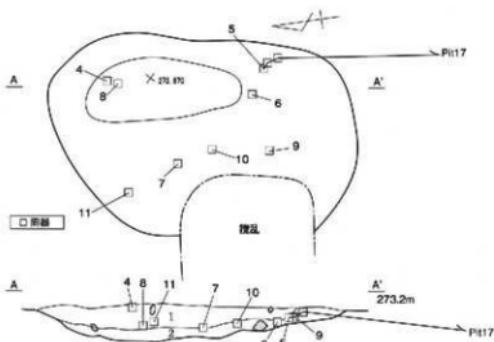
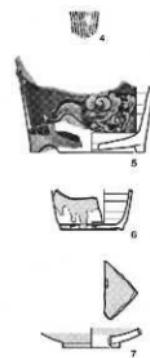
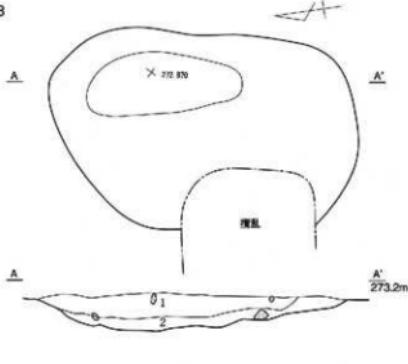
SK1



SK2



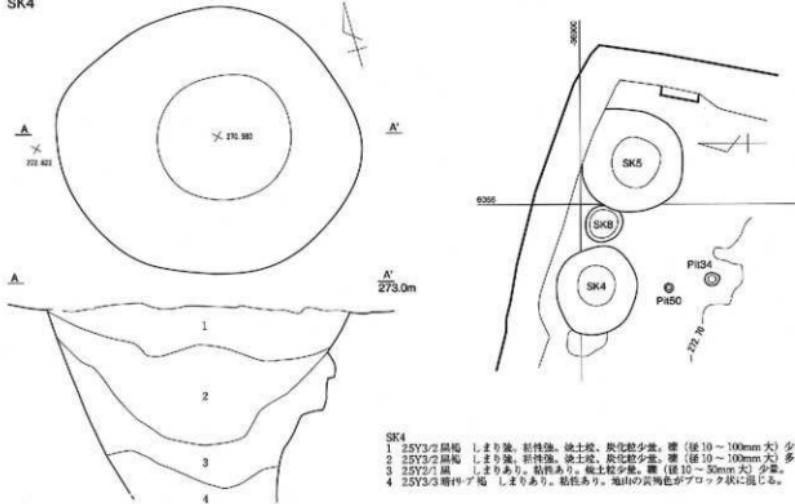
SK3



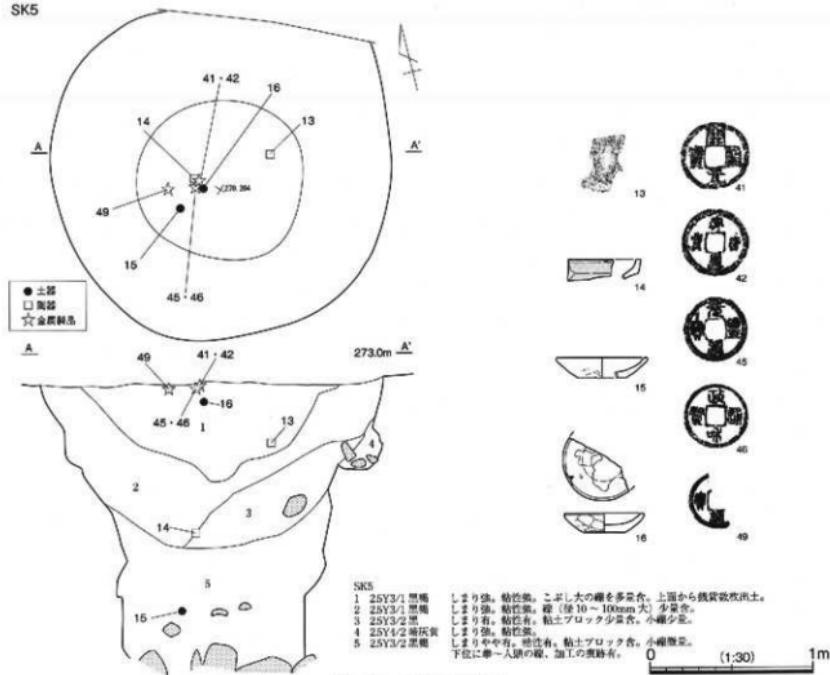
SK3
1 2SY3/1 断面 しまり強。粒性有。小繊少見。地土粒、炭化粒混在。
2 2SY2/1 断面 しまり、粒性強。小繊、透徳分少量。(陶、石、瓦、土器など)

第28図 43街区 SK(1)

SK4



SK5



第29図 43街区 SK(2)

層から出土している。これにより同遺構は築城期頃には埋め戻されていた可能性が窺える。

SK6 [遺構：第30図／遺物：第32～34図／写真：図版17・24・25]

調査区南西隅部分のやや東寄りに位置し、南側の一部は擾乱で壊されていた。長径2.385m、短径は検出範囲で0.838m、確認面からの深さは14.4cmを測った。やや幅広の溝である可能性もあり、軸方向では労働局地点の39溝の方向と沿っているが、形状や時期等から同一の性格であるという確証はない。

出土遺物については時期に差異がみられ、古いものでは17世紀中葉～18世紀前葉の瀬戸美濃所産の陶器皿〔17〕、18世紀前半～中葉にかけては肥前所産の猪口〔18〕・碗〔19〕、18世紀中葉以降に比定するかわらけ〔23〕、19世紀前半の瀬戸美濃所産の灯明皿〔20～22〕などの他、手斧と推定する金属製品〔38〕などがある。その他、小片のため図化していないが瓦片等も出土した。

なお、本遺構から出土した18世紀前半に比定する遺物には被燃の痕跡がみられ、本遺構の特徴のひとつにあげられる。しかし、出土遺物の時期や遺構の形状が明確ではなかったことから、性格や遺構年代についての断定は難しい。堆積の状況から、19世紀代には埋没した遺構と位置付けておきたい。

SK7 [遺構：第30図／写真：図版17]

SK4・8の近くに位置する遺構である。遺構の南側の一部は擾乱で壊されているが、長径は検出範囲で1.396m、短径0.857m、確認面からの深さは24.8cmを測った。中央には柱痕のような一段下がる部分がみられたが、出土遺物もなく、性格・遺構年代ともに不明である。

SK8 [遺構：第30図／写真：図版18]

東西トレンチ内の中央よりやや西側にあたり、SK4、SK5の間で検出した。SK5に接しており、断面観察では、SK5に壊されている。遺構の規模は長径0.8m、短径0.725m、確認面からの深さは30.7cmを測った。

出土遺物はなく、性格についても不明であるが、位置的には井戸に関連する施設の痕跡であった可能性も考えられる。

第2項 溝跡（SD）

溝は6条検出した。そのうち3条は幅や深さが均一で同方向に並行しており、畝状遺構と考えられる（SD3～5）。労働局地点において確認した畝状遺構もほぼ同じ方向のもので、また、甲府勤番支配期段階の屋敷地に伴う区画に関する遺構の延長上に位置する溝（SD6）を検出しており、南北方向に延びる区画が本調査区まで続くことを示す可能性が考えられる。その他、数条の溝跡を検出しているが、調査範囲が狭かったこともあり、地割や屋敷の範囲を示すような痕跡を見出すことは困難であった。以下、各遺構の詳細について述べておく。

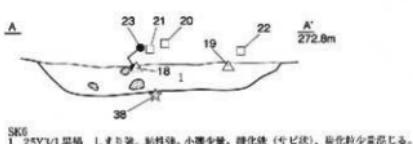
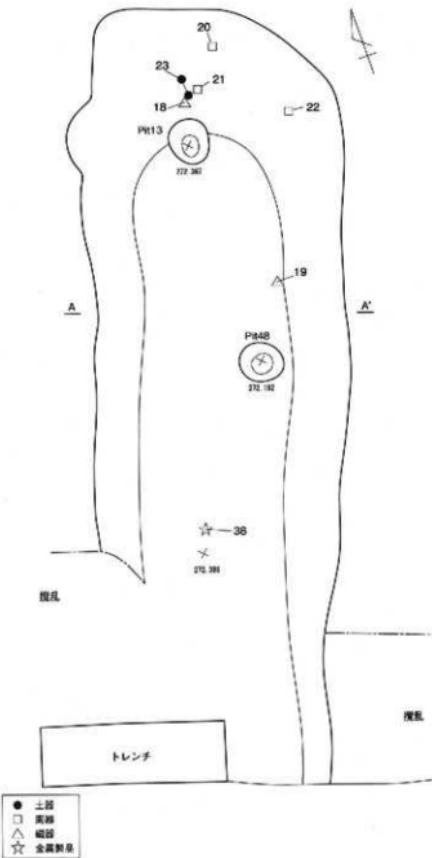
SD1 [遺構：第31図／写真：図版18]

東西トレンチ内の東側に位置し、検出した範囲では長さ2.1m、幅約50cmを測り、主軸の方向はN-83°-Wであった。断面の形状は浅い丸型で、黒褐色土の単層であった。SD2と接するかたちで検出したが、重複関係については不明である。出土遺物はなく、遺構年代は不明である。

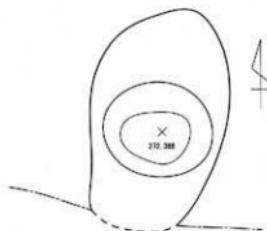
SD2 [遺構：第31図／写真：図版18]

東西トレンチ内の東側に位置し、検出した範囲では長さ3m、幅約40cmを測った。主軸の方向はN-69°-Eであった。SD1同様に断面の形状は浅い丸型で、黒褐色土の単層であった。SD2と接するかたちで検出したが、重複関係については不明である。出土遺物はなく、遺構年代も不明である。

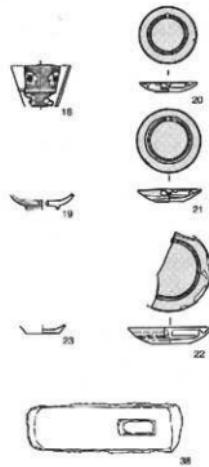
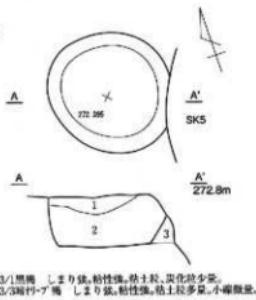
SK6



SK7



SK8



0 (1:30) 1m

第30図 43街区 SK(3)

SD3 [遺構：第31図／写真：図版18]

調査区南西隅に位置し、西端は搅乱により削平されていた。検出した範囲では長さ3.5m、幅約70cmを測り、主軸方向はN-66°-Eであった。断面形状は浅く平たい丸形で、SD4・5とともに、労働局地点で検出した畝状遺構と同様の遺構であると推定した。出土遺物は陶磁器片が混在したが、小片のため図化しなかった。

遺構の年代については明確ではないが、労働局地点の調査成果を鑑みて、武家屋敷が廃された後に畠地化し、明治期に廃絶された耕作の痕跡と位置付けておきたい。

SD4 [遺構：第31図／遺物：第33図／写真：図版18・24]

調査区南西隅に位置し、西端は搅乱により削平されていた。検出した範囲では長さ1.5m、幅約75cm、を測り、主軸方向はN-67°-Eであった。確認面からの深さは、計測地点では約20cmを測り、SD3・5とともに畝状遺構であると推定した。出土遺物は、18世紀後葉～19世紀前半頃に比定する灯明皿〔25〕1点をあげたが、耕作によって混入したものである可能性が高い。その他にも陶磁器片が出土しているが、小片のため図化しなかった。

遺構の性格・時期についてはSD3と同様である。

SD5 [遺構：第31図／写真：図版18]

調査区南西隅に位置し、西端は搅乱により削平されていた。検出した範囲では長さ1.7m、幅約70cmを測り、主軸方向はN-70°-Eであった。SD3・4とともに畝状遺構の一部と考える。出土遺物は陶磁器片が混在したが、小片のため図化しなかった。性格・時期についてはSD3と同様である。

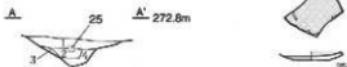
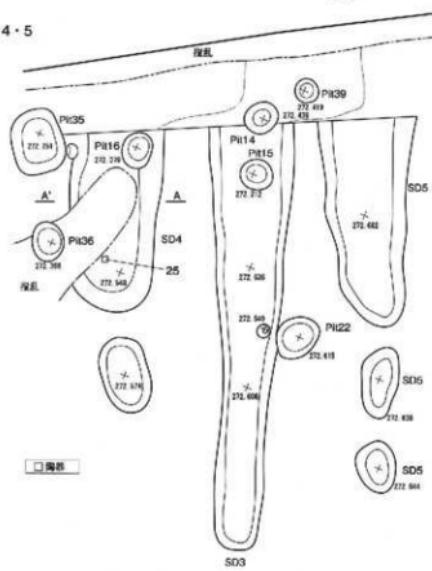
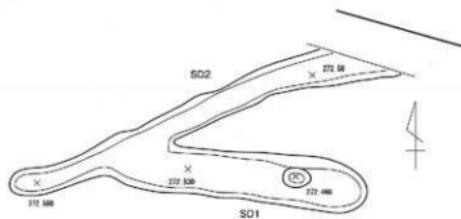
SD6 [遺構：第25・31図／遺物：第34図／写真：図版18・25]

東西トレチ内の中央よりやや東に位置し、検出した範囲では長さ2.9m、幅約60cm、確認面からの深さは30cmを測り、主軸方向はN-20°-Eであった。断面の形状は丸形で土器片が出土したが、小片のため図化しなかった。前述のとおり、労働局地点の31溝を延長した線上にある遺構で、武家屋敷地の区画に関わる遺構と考える。労働局地点では、31溝に平行する35溝、およびその延長上にあたる7溝と8溝を甲府勤番支配期に帰属する区画に関わる遺構と報告しているが、今回の調査についてはSD6の西側が搅乱で削平されており、対応する遺構は確認できなかった。

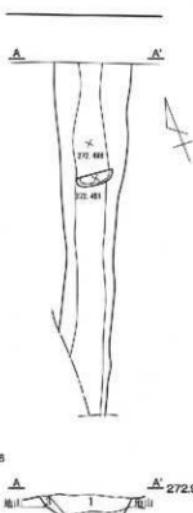
第3項 ピット(Pit) [遺構：第24・26図／遺物：第33図／写真：図版18～22]

ピットは53基検出された。調査範囲が狭小であったこともあって、調査時の所見においてはピットが規則的に配列する例は見出しがたく、櫛列や建物などの遺構を復元はできなかつたとしていた。しかし比較的新しい時期の所産ではあるが、杭が残存している例や杭（または柱）の根固めに使用したと考えられる礫を充填している例などがあったことから、調査区外へ続く遺構があった可能性を指摘している。

整理作業においても覆土の土層観察や確認面からの深度、底面のレベルなどから検討を行い、遺構の復元を試みた。しかし明確な建物基礎を推定することはできず、櫛列や境界を示す杭跡などがあった可能性を推定するに留まった。その他、検出したピットの規模および堆積状況等の詳細については、表9にまとめた。



- 1 2SY3/1 黒褐色 しまり有。粘性有。径 10mm 以下の小顆多量。
 2 2SY3/1 黒褐色 しまり有。粘性有。粘上粒、炭化液微量。
 3 2SY3/2 黒褐色 4 倍颗粒。
 4 2SY3/2 黒褐色 しまり強。粘性強。粘上粒多量。



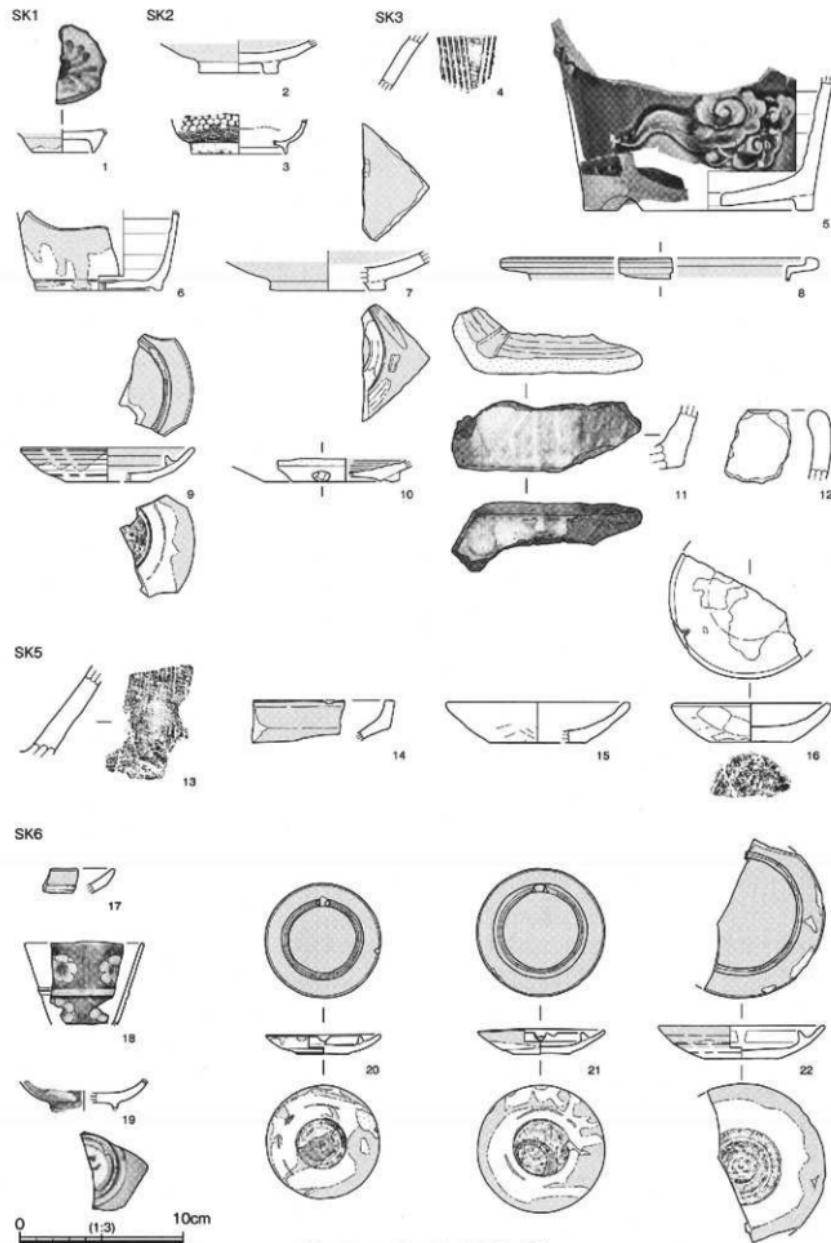
- 1 2SY3/1 黒褐色 しまり強。粘性有。炭化液合。
 2 2SY2/1 黑褐色 粘土粒合。
 3 2SY3/1 黑褐色 粘土粒合。

第31図 43街区 SD

0 (1:40) 2m

表9 43街区 (KJ1-12) ピット一覧

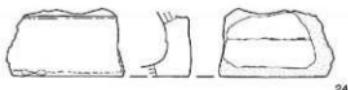
遺構名	形態	法量 (cm) 長径 短径 深さ	底面レベル (m)	土色	観察所見
Pit1	楕円形	41 36 20	272.789	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、難少
Pit2	楕円形	44 36 35	272.661	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、難少
Pit3	不整楕円形	57 45 46	272.569	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強
Pit4	楕円形	33 28 40	—	—	二層:燒土層、しまりあり、粘性ややあり 2炭化層 しまりあり、粘性やや強
Pit5	—	61 [23] 13	272.948	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、焼土・炭化物微量
Pit6	楕円形	76 63 6	—	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性あり、小礫少量
Pit7	円形	22 20 39	272.588	—	しまりあり、粘性強、粒子が細かい SK1と重複
Pit8	円形	60 56 12	272.870	2.5Y1/2黒	しまりあり、粘性強、粒子が細かい、炭化物・焼土粒微量 Pit7に類似
Pit9	楕円形	29 23 10	272.658	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、小礫少量
Pit10	楕円形	32 30 20	272.497	—	—
Pit11	円形	22 21 7	272.629	—	—
Pit12	円形	29 38 40	272.170	—	しまり強、粘性強、酸化鉄・小礫・炭化物微量
Pit13	楕円形	28 25 10	272.367	2.5Y2/1黒	しまり強、粘性強、粘土粒微量 SK6と重複
Pit14	楕円形	29 25 20	272.439	2.5Y2/1黒	しまり強、粘性強、粘土粒少量 SD3と重複
Pit15	円形	27 26 13	272.214	2.5Y2/1黒	しまり強、粘性強、粘土粒少量
Pit16	楕円形	30 24 12	272.379	2.5Y2/1黒	しまり強、粘性強
Pit17	円形	26 25 23	272.742	2.5Y3/2黒褐色	しまりあり、粘性強、小礫微量
Pit18	楕円形か	[25] 29 9	272.882	2.5Y4/2暗灰黃	しまり強、粘性あり、小礫少量、焼土粒・炭化物微量
Pit19	楕円形	47 39 18	272.705	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒・焼土粒少量、こぶし大の礫2点含
Pit20	不整楕円形	52 46 32	272.459	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、焼土粒・炭化物・粘土粒少量
Pit21	不整円形か	43 41 16	272.467	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、柱?2本がささった状態で出土
Pit22	楕円形	39 32 4	272.615	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり
Pit23	円形か	30 30 12	272.748	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、径50~100mm大の礫含む、焼土粒微量
Pit24	円形	20 19 28	272.544	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒少量
Pit25	円形	22 21 30	272.535	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒少量
Pit26	円形	23 22 35	272.474	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒少量
Pit27	楕円形	28 26 10	272.756	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、小礫少量、粘土粒少量
Pit28	円形	26 24 7	272.730	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、小礫少量、焼土粒・炭化物微量
Pit29	円形	50 48 36	272.386	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、小礫少量、粘土粒含
Pit30	不整円形	80 75 33	272.389	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、粘土粒・炭化物少量
Pit31	円形	25 25 18	272.508	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性あり、粘土粒少量
Pit32	円形	27 27 4	272.534	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、粘土粒微量
Pit33	円形	22 19 16	272.418	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、小礫微量
Pit34	不整楕円形	31 27 22	272.316	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、粘土粒少量、小礫微量
Pit35	不整楕円形	53 43 30	272.251	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり
Pit36	楕円形	32 26 13	272.388	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、径10mm大の礫少量 掘出か
Pit37	楕円形	32 26 7	272.626	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、粘土粒少量
Pit38	楕円形	38 30 24	272.362	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性あり、径20~50mm大の礫含
Pit39	円形	20 19 15	272.419	2.5Y2/1黒	しまり強、粘性強、粘土粒少量、焼土粒微量
Pit40	円形	24 22 17	272.251	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒少量
Pit41	円形	27 26 15	272.509	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、小礫微量
Pit42	円形	31 29 20	272.780	2.5Y2/1黒	しまり強、粘性強、粘土粒・小礫少量
Pit43	楕円形	44 39 37	272.563	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、小礫含、粘土粒少量
Pit44	不整楕円形	52 52 10	272.279	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒少量、搅乱か
Pit45	不整楕円形	37 27 22	272.744	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性強
Pit46	円形	25 22 30	272.410	2.5Y3/1黒褐色	しまりややあり、粘性強、角材が中心に埋まっており、半截できず
Pit47	円形	48 47 26	272.272	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒含、炭化物微量
Pit48	楕円形	28 24 13	272.192	2.5Y3/3暗褐色	しまり強、粘性強、粘土粒多量、炭化物微量 SK6と重複
Pit49	不整楕円形	50 34 21	272.380	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒微量
Pit50	円形	19 18 11	272.593	2.5Y3/1黒褐色	しまり強、粘性強、粘土粒含、焼土粒少量
Pit51	円形	39 36 32	272.212	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性あり、小礫少量
Pit52	楕円形	43 33 23	272.387	2.5Y3/2黒褐色	しまり強、粘性あり、こぶし大の礫2点、小礫少量



第32図 43街区出土遺物〔SK①〕

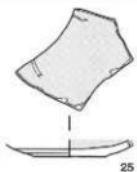


23



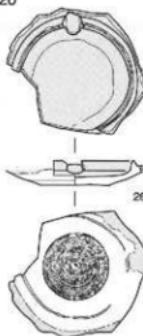
24

SD4



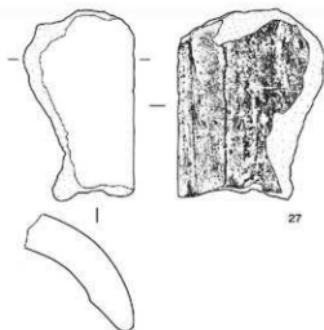
25

Pit20



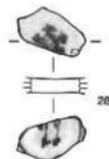
26

Pit43



27

遺構外



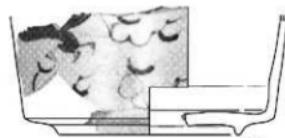
28



29



30



31



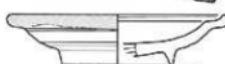
32



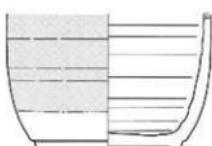
33



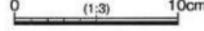
34



第33図 43街区出土遺物 [SK②・SD・Pit・遺構外]

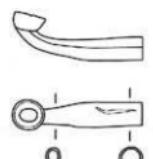
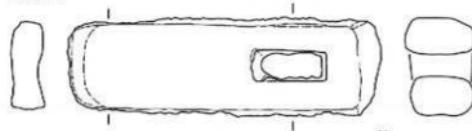


35

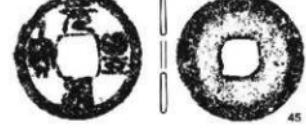
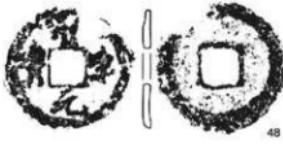
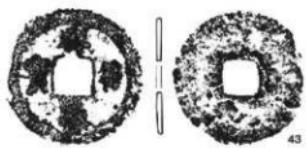
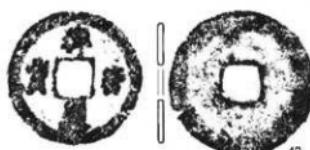


37

金属製品



0 (1:2) 4cm



0 (1:1) 2cm

第34図 43街区出土遺物〔金属製品〕

第5章 総括

第1節 遺構・遺物の年代と時代背景

ここまで甲府城下町遺跡地内において実施した、2箇所の発掘調査の成果をまとめてきた。調査面積は両地区的合計で436m²と小規模であったものの、17街区地点で井戸跡3基、土坑1基、溝状遺構2条、ピット15基、不明遺構1を、43街区地点では井戸跡2基、土坑6基、溝状遺構6条、ピット53基を検出し、甲府城下町遺跡の古代から近代までの歴史の一端を明らかにすることができた。

但し、後世の搅乱を受けて遺構の遺存状況が悪かった部分や、井戸跡など遺構の構築年代と埋没年代の位置づけが難しい遺構が多かったといえる。ここでは出土遺物の年代から推定する遺構と各時代背景についてまとめ、次節より両地区的遺構の変遷と土地利用について検討していくことにする。

【原始・古代・中世】

今回報告したなかで最も古い資料となったのが、17街区から出土した縄文時代中期末の菅原II式期の深鉢片〔128〕である。口縁部分の小片であり、遺構に伴うものではなく、調査区東側の河川堆積層内（以下、河川堆積内と称す）から出土した。表面の磨滅が著しく、流れ込みによるものと考えられる。

周辺では荒川流域に所在する上石田遺跡で集落跡が検出されているほか、甲府城下町遺跡の調査においても土器片の出土が確認されている。

次段階には同じく17街区で出土した古墳時代前期の土器片を検出した。S字状口縁台付甕や高環などの出土を確認したが、明確に遺構に伴って出土したものはわずかで、前段階と同じく河川堆積内からの出土が主であった。調査区に近く、甲府城下町遺跡の西に隣接する塙部遺跡では、古墳時代前期の集落跡が検出されている。甲府城下町遺跡甲府裁判所地点（甲府市中央一丁目）においても竪穴状遺構が検出されており、遺跡の分布が広範囲にわたっていることが窺える。この段階の遺構としては、17街区SD2、SX1があげられる。SD2に関しては、市教育委員会の調査部分では同時期の遺物の出土が確認されているが、今回の調査範囲においては下層の礫層部分から遺物の出土は認められず、覆土上層には平安時代の土師器壺や灰釉陶器壺片、須恵器片などの遺物が混在した。

その他、同段階の遺物は17街区河川堆積内からの出土が中心であり、平安時代の土師器壺片や須恵器壺片が、次段階の中世陶器とともに混在していた。

【中世】

遺物の出土量は希少であり、出土した遺物の比定年代的には16世紀半ばを境に2区分するかたちとなつた。また、16世紀後葉には近世城郭である甲府城の築城期となるが、今回報告した遺物の出土傾向が17世紀前半まで一区切りできることから、この段階に含めて報告しておく。なお、遺構の年代を比定する元となつた出土遺物のうち、陶磁器については第35・36回に出土遺物の編年位置付けを示したのであわせて参照されたい。

（1）15世紀後葉～16世紀前葉

甲斐を武田氏が統治する中世武田城下町の時期にあたる。17街区では、遺構からの同段階の陶磁器類の出土ではなく、SE2から出土した土器で香炉片〔51〕やSD2上層に設置したサブトレ内から出土したかわらけ〔94・95〕が出土しているのみであった。43街区でも遺物は希少で、SK1から景德镇の碗〔1〕が出土した他、17街区の河川堆積内から龍泉窯所産の碗〔99〕が出土した。

（2）16世紀後半～17世紀初頭

甲府城築城期にあたる同段階では、17街区では河川堆積内から大窯4段階の陶器皿片〔93〕、瀬戸美濃所産の陶器皿片〔121〕が出土した。他、16世紀代に位置付けられる瀬戸美濃所産の陶器〔118～120〕などが

出土している。43街区ではSK5（SE2）から出土したかわらけ〔15・16〕や造構外出土の瀬戸美濃所産の陶器碗〔32〕が出土している。出土量は少量であるが、調査区周辺において甲府城下町としての土地利用がはじまったことを示す資料といえる。

但し、造構に関してはこの段階に属するものと断定できる要素が少ない。17街区の造構に関しては、同時期の遺物がSE2で出土しているが、後世に構築された造構に混在したものである可能性が強く、中世段階の造構と認められるものはなかった。

一方、43街区のSK1については小片であったが、調査区内では他の造構から同時期の遺物が出土していない状況から、其伴関係があるものと考え、甲府城築城以前の造構である可能性が窺えた。SK5に関しては覆土上層から古銭や陶器片、かわらけなどが出土しており、井戸の魔絶後、その上層部でなんらかの儀礼行為の痕跡とも考えられる。井戸としての使用時期についてはさらに遡るものと推定するが、同時期にも甲府城築城に際して埋め立てられた可能性が窺えることから、この段階に位置付けておきたい。

なお、甲府城下町の歴史的背景について第2章第2節でも述べたが、中世の甲府の発展は永正16(1519)年に武田信虎が郡御ヶ崎に館を移したことにはじまり、武田城下町は館を起点として家臣屋敷・町人地の順に南方へと発展してきたとしている。この城下町の南限は明確ではないが、近年の調査成果から中世段階の遺構が検出される甲府城屋形曲輪付近や、当該期の井戸から宝篋印塔の塔身のみ8個体が出土し、長延寺との関連が窺える事例として報告されている清水曲輪の付近と推定されている。

43街区付近については、隣接する労働局地点の調査成果からも、武田城下町と近世の甲府城下町が重複する地域にあたると考えられる。一方、17街区に関しては今回の調査において当該期の遺物の出土は確認できたものの、大半が埋め土内や流れ込みによるものであり、武田城下町（町人地）の広がりを示すような痕跡はみられなかった。地理的にも近世に築かれた二の堀北西部分は、元々はその部分を流れていた河道を利用したと推定されており、中世段階の町人地が河道を超えた本調査区周辺まで至っていたのかは明確ではない。造構・遺物が希少であること自体が、調査地点周辺の中世武田城下町の様相を示す証左とも考えられるが、隣接する労働局地点においては16世紀末段階の造構は確認されていないこともあり、同時期の土地様相に関しては今後も検討を要するものと考えている。

【近世】

甲府城下町の成立後の土地様相が示される段階である。当然ながら両地点とも遺物の出土量が最も多い段階にあたる。出土した主な遺物としては、陶器類では17世紀前葉～18世紀前葉、18世紀中葉～19世紀前葉、19世紀後半までの3時期、土器類ではSE2などから江戸時代後半に比定する熔熔・火鉢等が出土している。

(1) 17世紀前葉～18世紀前葉

17街区ではSE3上部壁面付近から出土した陶器瓶〔1〕、SE2から肥前所産の磁器皿〔17〕、瀬戸美濃所産の陶器皿〔34〕、香炉片〔35〕、擂鉢〔36〕、河川堆積内から瀬戸美濃所産の陶器では水差し〔122〕、皿〔123〕、肥前所産の陶器〔124〕等が出土している。

43街区では、SK6および造構外から出土した瀬戸美濃所産の陶器皿〔17・33〕が出土した。

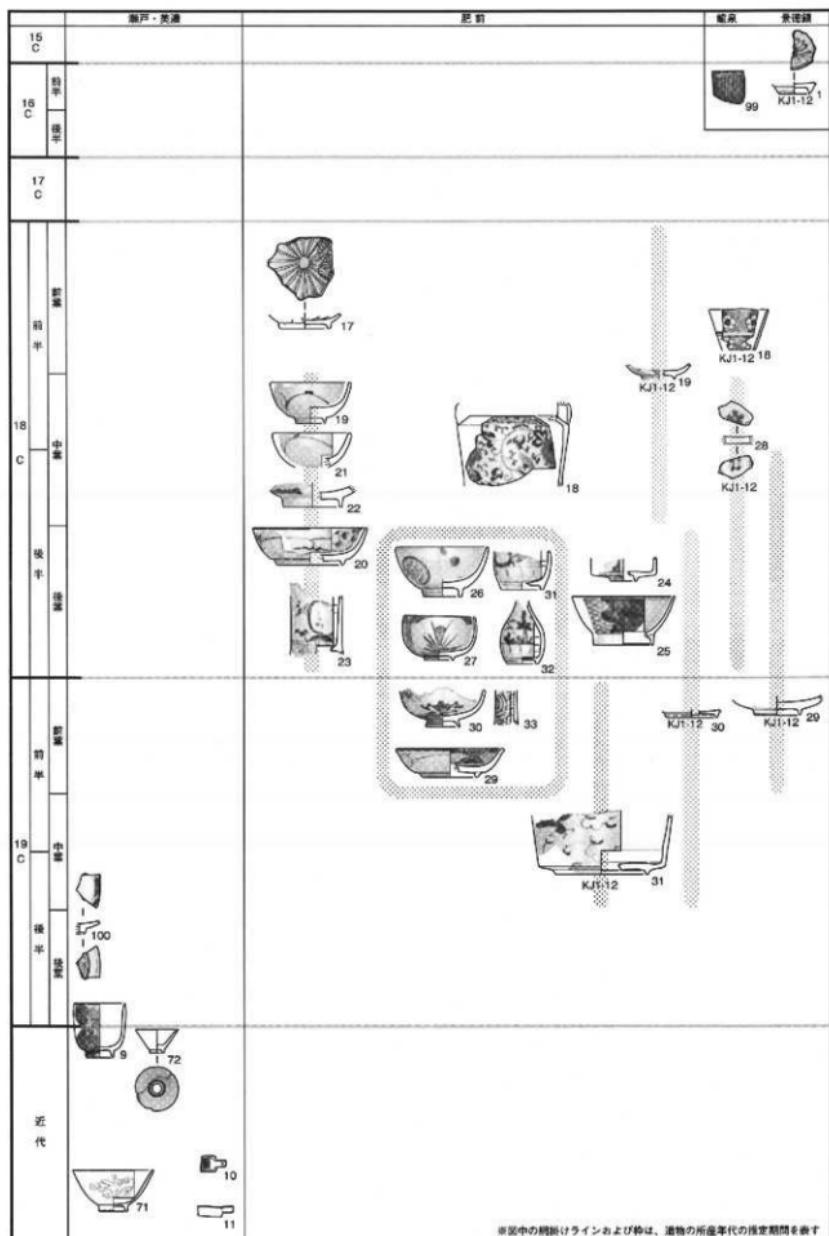
(2) 18世紀中葉～19世紀前葉

17街区ではSE1・3から京・信楽所産の陶器碗・合子〔2・3〕、SE2から肥前所産の磁器で皿〔20・29〕、鏡子〔18〕・碗〔19・21・22・24～28・30〕、御神酒徳利〔31～33〕、瀬戸美濃所産の陶器で擂鉢〔37～39〕、碗〔40～45〕、半胴甕〔46〕、坏〔47〕などが出土している。

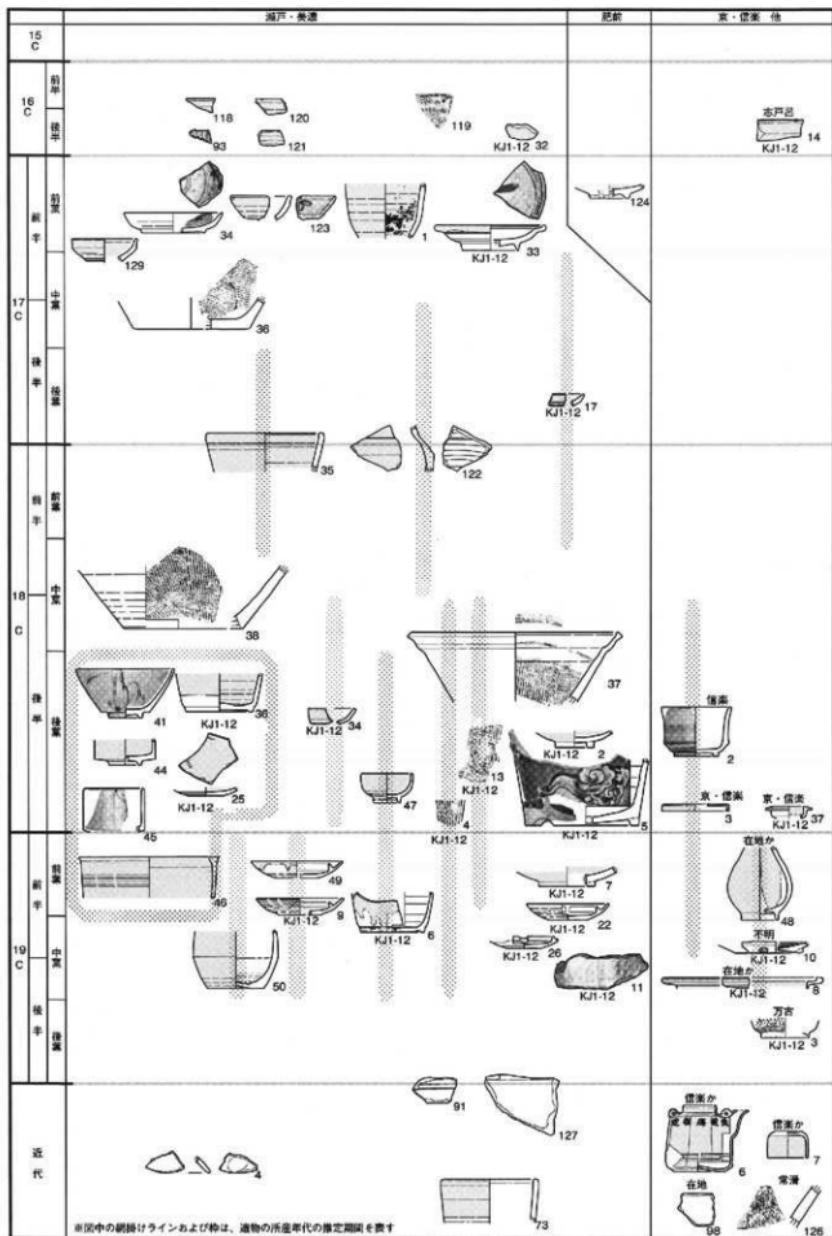
43街区ではSK2から瀬戸美濃所産の陶器で碗〔2〕、SK3から同所産の陶器で擂鉢〔4〕、植木鉢〔5〕、徳利〔6〕、SK6からは肥前所産の磁器で猪口〔18〕・碗〔19〕などの他、かわらけ〔23〕も出土している。

(3) 19世紀後半まで

17街区ではSE2から瀬戸美濃所産の陶器で灯明皿〔49〕と徳利〔50〕、在地所産と推定する陶器で灯明具〔48〕が出土している。



第35図 出土遺物編年の位置付け(磁器)



第36図 出土遺物編年の位置付け(陶器)

43街区ではS K 2から萬古窯所産の急須〔3〕、S K 3から瀬戸美濃所産と推定する陶器で鉢〔7〕、灯明皿〔9〕、土瓶〔10〕、在地所産と推定する場〔8〕、S K 6から瀬戸美濃所産の灯明皿〔20～22〕、Pit20から瀬戸美濃所産の陶器で灯明皿〔26〕が出土した。

近世の遺構については、17街区S E 2が18世紀末葉、43街区S K 6が18世紀前半～19世紀前半、S K 2が18世紀末～19世紀中葉頃、S K 3が19世紀前半、Pit20は19世紀代に位置付けた。またS K 3出土の瀬戸美濃所産の植木鉢〔5〕は、Pit17からも破片が出土し、接合関係にあったことから同段階に比定した。さらに遺物は出土しなかったが、Pit17と覆土堆積状況および底面のレベルが類似するPit27・42も、直線状に位置する同一の性格の遺構と捉えてこの段階に比定している。

同段階の出土遺物について特筆しておく点は、S K 6から出土した18世紀前半の遺物が被熱したもののが多數みられたことである。記録によると、享保12(1727)年に甲府城で大火があり、裏先手小路大久保内蔵助屋敷より出火して甲府城本丸・屋形曲輪・清水曲輪をはじめ、勤番屋敷64軒、町方13町を焼失する被害が生じている。今回の調査では、覆土に炭化粒・焼土粒を含むビットが複数検出されたものの、大火があったことを示す痕跡とは断定できない。43街区地点が直接この災害を被った場所にあたるのかははっきりしないが、調査区周辺は火元となった裏先手小路大久保屋敷より南東側に位置し、大火の後も武家屋敷地として利用されてきたため、その痕跡が片付けられて残存していない可能性もある。同地域から出土した同段階の被熱した遺物は、必ずしも大火との関連を否定することはできないと考え、この点についても今後の調査における視点の一つとして指摘しておきたい。

【近代】

明治以降の段階とする。陶磁器類では前段階の19世紀後葉の出土遺物と明確に区別するのは困難あるが、この時期には武家屋敷が廃絶して新たな土地利用がなされ、さらに明治36年に甲府停車場の開業によって上地区画は大きく変容していった段階である。検出された遺構・遺物は限られており、17街区ではS E 1から瀬戸美濃所産の陶器で皿〔4〕、同じく磁器で碗〔9〕、玩具〔10・11〕、大正期の信楽所産の陶器で汽車土瓶〔5～8〕、S D 1から瀬戸美濃所産の碗〔71〕、壺〔72〕、鉢〔73〕などが出土した。S E 1とともに、廃棄坑となっていたS E 4が、同段階の遺構と位置付けられた。その他、Pit6・8・9・11は覆土の堆積状況とほぼ等間隔で並ぶ位置から、同一の性格の遺構と推定し、南側の線路に沿って延びていることから、鉄道に関連する杭跡と推定した。

43街区については、前述のとおり甲府停車場が開業した時期には盛土造成されていた範囲にあたり、武家屋敷廃絶後に畠地化した痕跡と考えられる畠状造構（S D 3～5）が埋没した時期も、この段階に位置付けておく。

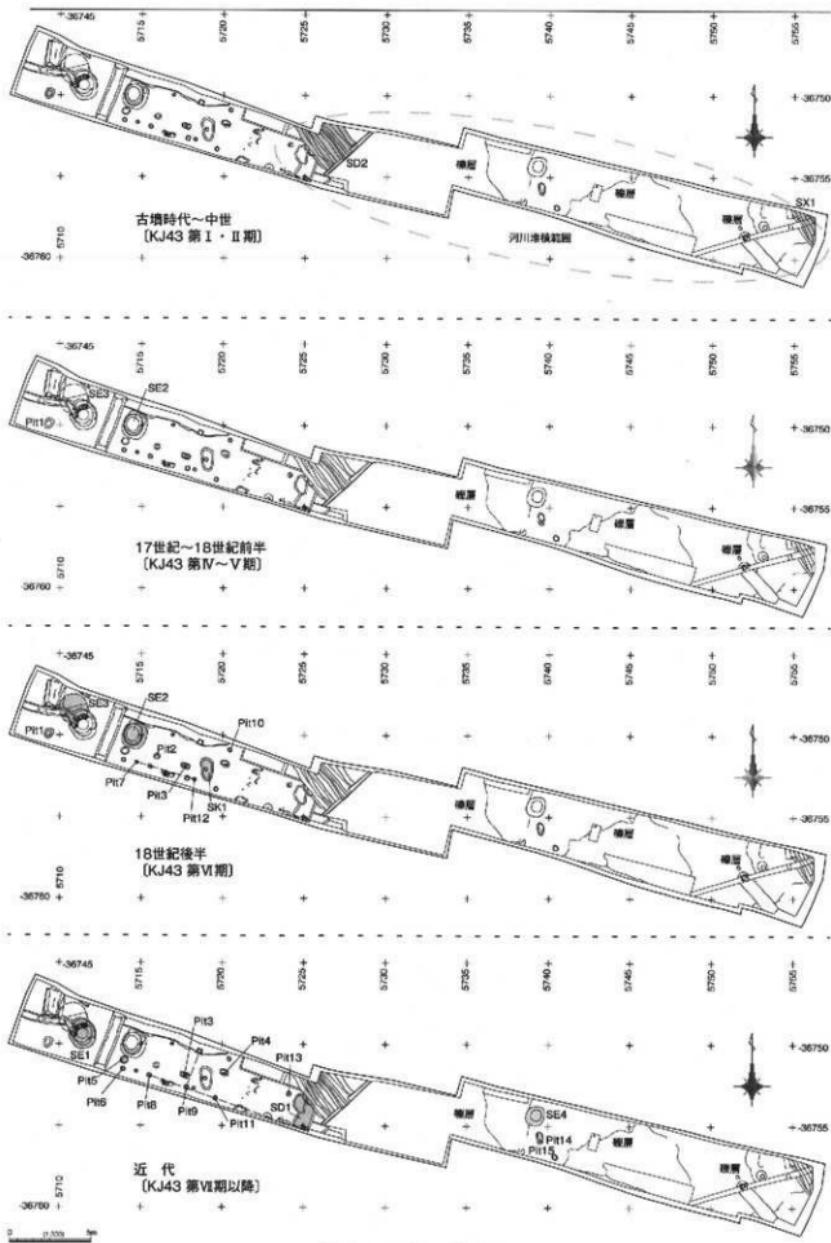
第2節 遺構の変遷について

前節では出土した陶磁器類の所産時期から遺構の年代について検討した。ここでは各調査区ごとにその変遷をまとめ、第37～40図に示した。なお、今回調査した43街区地点（KJ1-12）に隣接する労働局地点（KJ43）の報告では、同地点における時期区分として第I～Ⅳ期に大別し、さらに各期を小区分して（同報告書から表12に転載）、検出した遺構と文献・絵図史料等から詳細な分析・検討を実施し、対象地の土地利用変遷をまとめられている。この調査成果との照合（〔KJ43第～期〕と表記する）を含め、ここでは各調査地点ごとに遺構の変遷と所見についてまとめておく。

【17街区】

古墳時代～中世〔KJ43第I・Ⅱ期〕

S D 2、S X 1を検出した。前者はN-37°-W、後者は不明遺構であるが立ち上がり部分ではほぼ同じ方向に主軸をもつ遺構で、自然地形に沿って構築されている可能性が窺えた。性格については不明であるが、近接する塩部遺跡で集落や方形周溝墓等の遺構が検出されており、本調査区もその分布域にかかっている可



第37図 17街区遺構変遷図

能性が考えられる。その他、範囲狭小のために同時期の遺構を検出できなかった可能性もあるが、近世に至るまで年代を特定できる遺構はなかった。出土遺物についても河川堆積内に遺物が混在するのみであり、中世段階の武田城下町の様相を確認することはできなかった。同地点における中世・近世城下町の重複関係についても、検討課題のひとつとして、今後の周辺調査に期待したい。

江戸時代

建物跡などの明確な遺構は確認できなかったが、その周辺に構築されたと考える井戸跡を検出している。但し、時期が明確な遺構は希少で、SE 2 が埋め立てられた時期を18世紀末葉 [KJ43 第VI - 1・2 小期] を充てた。井戸自体の構築時期は明確ではなく、出土遺物の時期から推察して甲府城下町が形成された17世紀以降の外郭が整備される段階に位置付けられるものと考え、17世紀～18世紀前半 [KJ43 第IV・V 期] を比定した。同地点ではこの段階以降、井戸を作り替えている状況が確認でき、焙烙・鑄鉢・灯明具類等、生活に関わる遺物の出土から居住域として土地利用されてきたことがわかる。また、17世紀代の遺物が比較的少ない点も特徴のひとつで、柳沢期に同地点における屋敷地としての土地利用の始まりを示していることが考えられる。

近代 [KJ43 第VI - 3 期～第VII 期]

SE 1、SE 4、SD 1などから近代の遺物が検出された他、覆土の堆積状況が類似するピットが直線状に並んだ状況を確認しており、鉄道に沿ってつくられた杭の痕跡と推定した。

今回の調査で遺構としたものは、戦前までの痕跡であり、間知石に沿って構築された溝である SD 1 が最も新しい段階に位置付けられた。SE 1 については明治時代後半の陶磁器類や大正期の汽車土瓶等が発見されており、中央線開通後の大正時代前半頃までに埋め戻されたと考えられる。

なお、同調査区は横沢通りと中央線がほぼ直交する地点にあたり、中央線開設後も極端な地割の変更はされなかつたようである。近世甲府城下町の軸線はそのまま継承していたと考えられるものの、建物を示す痕跡は確認できず、検出した井戸上面の様相をみても、面的な整地（削平）が行われた可能性が窺えた。

【43街区】

15世紀後葉～16世紀前半 [KJ43 第II期：武田城下町期]

景徳鎮の碗を伴う SK1 を検出した。調査区では唯一の遺構であるが、労働局地点で長延寺との関連を検討された井戸や土坑と同じ時期にあたり、中世武田城下町の範囲を示す資料のひとつとなった。

16世紀後半～17世紀前半 [KJ43 第III期、第IV - 1 小期：甲府城築城期]

SK 5 (SE 2) が埋め戻された段階にあたり。井戸としての使用時期についてはさらに遡るものと推定される遺構で、前段階の SK 1 同様に甲府城築城に際して移転した長延寺との関連が窺える。なお、覆土上層から複数枚の古銭と陶器片・かわらけなどが集中して出土した点も特徴的で、なんらかの儀礼行為の痕跡であることも考えられる。

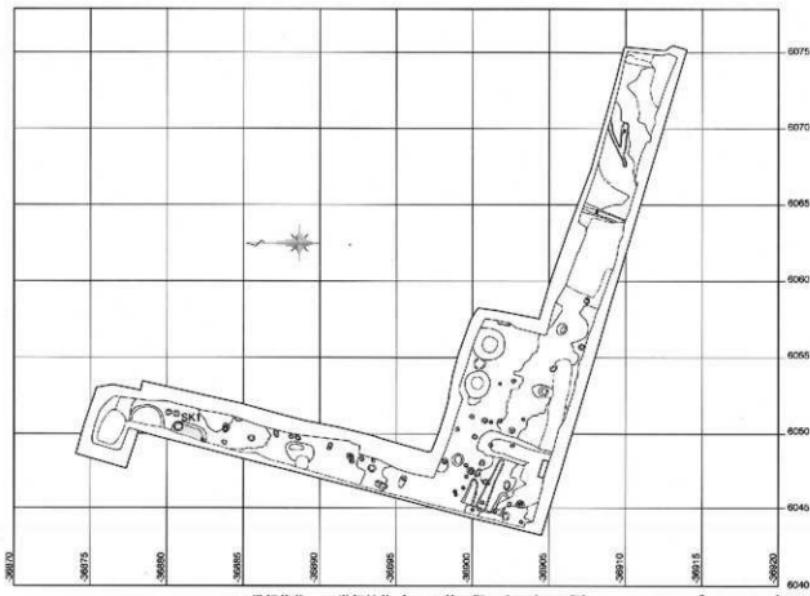
18世紀前半～19世紀前半 [KJ43 第V期～第VI期：柳沢期～甲府勤番支配期]

SK 6 が18世紀前半～19世紀前半、SK 2 が18世紀末～19世紀中葉頃、SK 3 が19世紀前半、Pit20は19世紀代に位置付けた。いずれも武家屋敷地内の遺構であり、Pit17・27・42の楕円状の痕跡も同段階の地割を成した可能性がある。

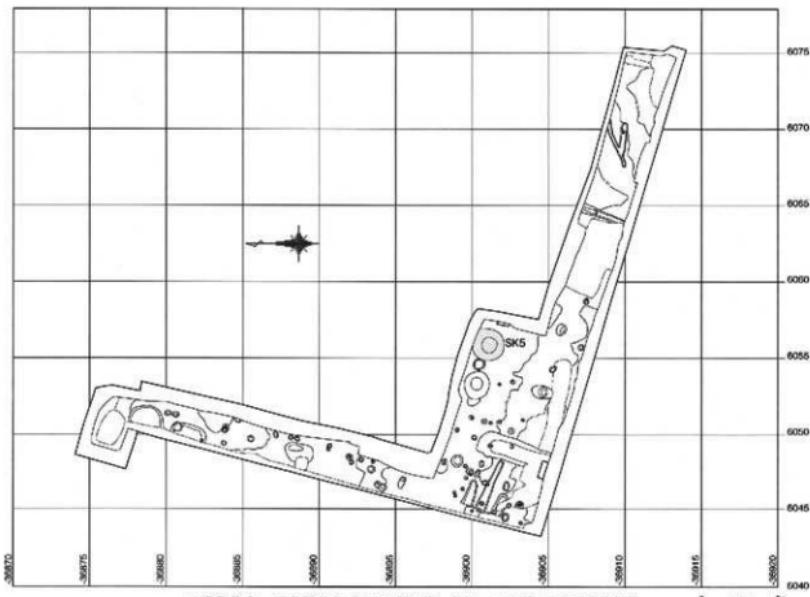
なお、本調査区で検出した SD 6 は、遺物が出土しなかったため年代は不明であったものの、労働局地点で検出した 31 号溝の延長上に位置し、断面形状等も類似することから、同一の性格の遺構と推定した。この溝状遺構は第VI - 1・2 小期段階の地割を示すもので、次節の絵図史料との検討においても、屋敷境を成していたものと考えられる。

近 代 [KJ43 第VII・VIII 期 明治以降]

武家屋敷地絶後、畠地化した痕跡と考えられる畝状遺構を検出している。出土遺物がなく、時期については明確ではないが、明治初年段階で勤番士の原敷が取り除かれ、明治 6 (1873) 年に県令に着任した藤村紫朗

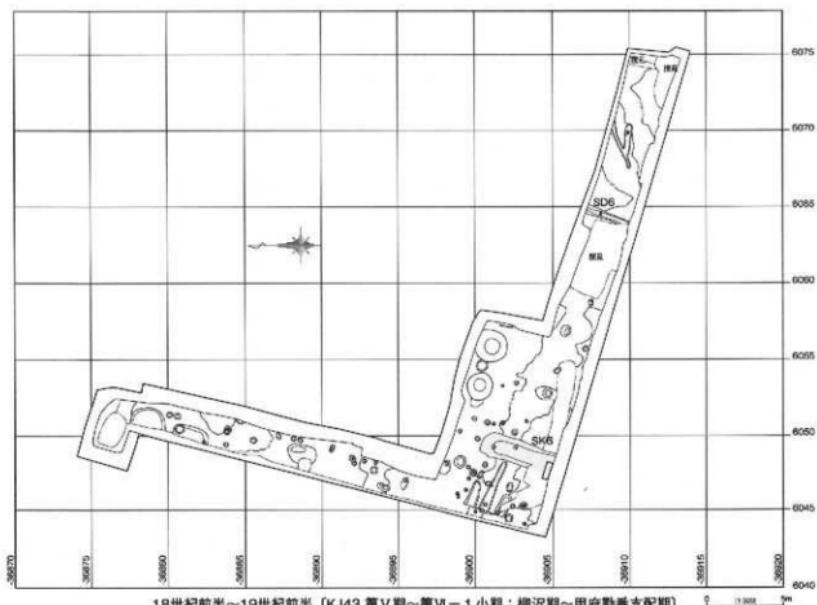


15世紀後葉～16世紀前葉 [KJ43 第Ⅱ期：武田城下町期]

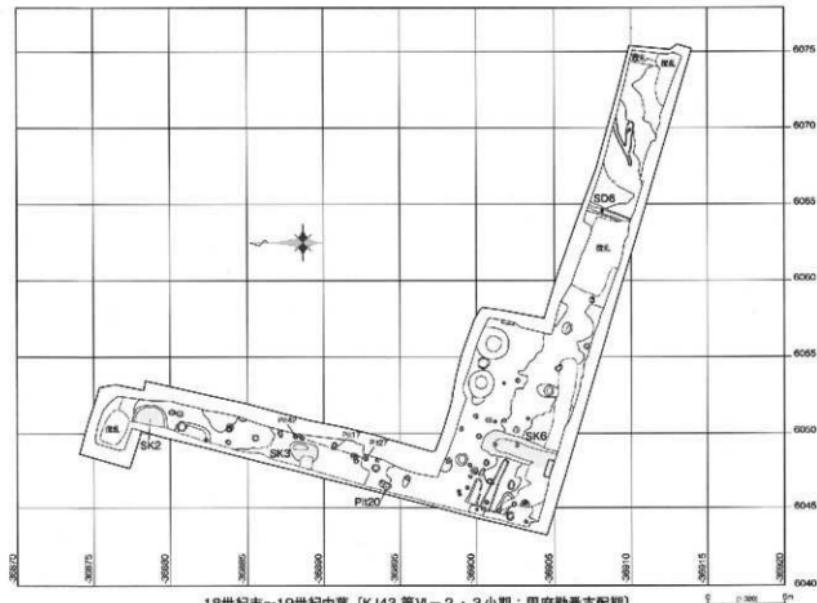


16世紀後半～17世紀前半 [KJ43 第Ⅲ期、第Ⅳ-1小期：甲府城築城期]

第38図 43街区 遺構変遷図(1)

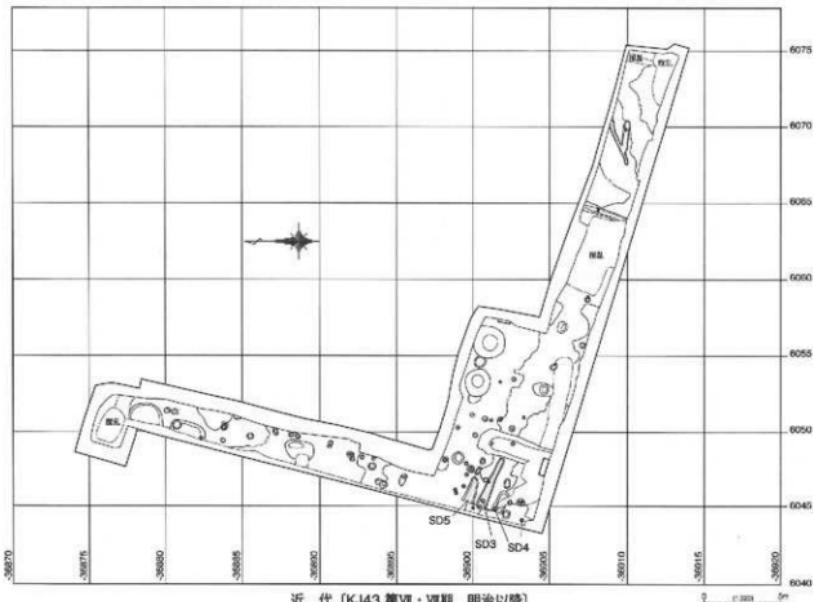


18世紀前半～19世紀前半 [KJ43 第V期～第VI-1小期：柳沢期～甲府勤番支配期]



18世紀末～19世紀中葉 [KJ43 第VI-2・3小期：甲府勤番支配期]

第39図 43街区 遺構変遷図(2)



近代 [KJ43 第VII・Ⅷ期 明治以降]

第40図 43街区 遺構変遷図(3)

表12 甲府城下町遺跡発掘局地点(KJ43)における時期区分

時代名	時代区分名	年代帯	小窓 〔 〕は主観者・主配体制	小窓の時代帯
源氏・宮代・中世	幕末・官代・中世	永正16年(1519)まで	武田信玄の作成移動までを指す	
中世	幕末期 武田城下町期	永正16年(1519)まで～天正10年(1582)	中世武田城下町が存在した時総を指す	
			■ 1-1小窓 〔武田信玄：城代、平岩親吉〕	天正10年(1582年)～天正18年(1590年)
			■ 1-2小窓 〔武田信玄：城代、平岩親吉〕	天正18年(1590年)～元和19年(1611年)
			■ 2-1小窓 〔加藤貞泰〕	天正19年(1591年)～文禄2年(1593年)
			■ 4-1小窓 〔高野政教・中景〕	文禄2年(1593年)～慶長5年(1600年)
			N-1-1小窓 〔徳川家康：城代、平岩親吉〕	慶長5年(1600年)～慶長8年(1603年)
			N-2-1小窓 〔徳川家康：城代、平岩親吉〕	慶長8年(1603年)～元和12年(1607年)
			N-3-1小窓 〔高野政教：武田十二代の城番〕	慶長12年(1607年)～元和2年(1616年)
			N-4-1小窓 〔徳川家康〕	元和2年(1616年)～寛永9年(1632年)
			N-5-1小窓 〔高野政教：甲府城番〕	寛永9年(1632年)～寛永元年(1632年)
			N-6-1小窓 〔高野政教：甲府城番〕	寛永元年(1632年)～寛永元年(1704年)
			V-1-1小窓 〔徳川家康〕	寛永元年(1704年)～寛永7年(1710年)
			V-2-1小窓 〔徳川家康〕	寛永7年(1710年)～寛永9年(1724年)
			V-1-2小窓 〔平井義政・主配〕	寛永9年(1724年)～寛永元年(1729年)
			V-2-2小窓 〔平井義政・主配〕	寛永元年(1729年)～寛永2年(1686年)
			V-3-1小窓 〔平井義政・主配；平井義代の相続以前〕	寛永2年(1686年)～寛永4年(1688年)
近代	第V期 明治期	明治元年(1868年)～明治36年(1903年)	明治初期から明治終盤まで	
近代～現代	第VI期 近現代期	明治36年(1903年)以後	明治後期以降から昭和初期まで	

(注) 甲府城下町遺跡 (KJ43) 発掘調査報告書面積「Tab.1 甲府城下町遺跡 (KJ43 地点) における時期区分」を転載したものである。同時期区分に関する詳細については、山梨県教育委員会 2002『甲府城下町遺跡 (KJ43) 発掘調査報告書』を参照されたい。

の施策によって民間への払い下げによる市街地化が進められた。これにより明治9年頃までには畠地化していたことが地図史料等から推察されている。その後、明治36年の甲府停車場開業時には埋め土造成により厚い盛土に覆われていたと考えられる。

第3節 資料にみられる土地利用の変遷

今回の調査および整理報告においては、労働局地点の報告書で検討された内容をもとに進めてきた経緯がある。同書では考察として文献・絵図史料などを基に対象地の土地利用および拝領者（居住者）の変遷についてまとめ、出土した遺構・遺物との関連性について詳細な検討が行われている。本書の総括においては労働局地点との調査成果を比較検討しておく必要があると考え、これまでに遺物の時期、遺構の変遷を調査地点ごとに概観してきた。そのまとめとして絵図史料を中心に17街区および43街区地点の変遷について検討しておくことにする。

検討する絵図については、2012年に刊行した『甲府城下町遺跡VI』において検討に用いた史料を参考に、各調査地点の土地利用の変遷をまとめた。本書では都合により参照元の絵図を掲載しないが、各絵図の詳細、引用・参考資料との対照は表13にまとめた。各引用元の報告書とともに参照されたい。

なお、労働局地点で最も土地利用および居住者の変遷を把握できる第IV期～第VI期について、同書に掲載された時期別の土地利用を示した図（fig.113～119）を基にトレース・加筆した土地利用の概要図（第41～44図）を作成した。この元図の詳細に関しても転載元の報告書を参照されたいが、作成した図にも転載（サンプリング）した図番号、およびその図を制作する際に元本とした絵図史料名を記した。また、作成した概要図は、調査区の空撮データおよび測量データから書き起こしたものであるが、絵図との照合は報告書の図面を基に行ったトレース作業の段階で元図との歪みを補正しきれなかったため、絵図と遺構の位置関係を厳密に示しているものではない。あらかじめ御留意いただきたい。

17街区

二の堀外側に位置するため、絵図史料においては拝領者を示す個人名の記載はない。絵図史料においては、「甲府郭内外邸第図」に町家と記載があり、二の堀から三の堀の間が町人地として利用されていたことを示している。町人地のため拝領者等の記載はないが、調査地点から横沢通りを挟んで西側に位置する妙本寺や、中央本線を挟んだ南側に位置する旭宿院などの寺名の表記は、先の「甲府郭内外邸第図」の他にも「柳沢時代ノ甲府郭内外図」、「懐家甲府絵図」「甲府絵図（嘉永2年頃）」「甲府御巡見」等にみられる。

なお、「甲府郭内外邸第図」には同地区に近い二の堀が東へ屈曲する部分を境に、北側に古府中村分、西青沼村分と記されているが、その他は同地点周辺について記したものではなく、様相については不明である。

43街区

作成した概要図をみると、対象地は御先手小路が馬場先手小路につながる東側の角地に付近に位置し、18世紀初頭には、現在の中央線までの範囲において3区画の屋敷地にまたがっていたことが想定される。

二の堀内側の武家屋敷地にあたる43街区地点では、労働局地点の報告で詳細な考察がされているため、43街区地点に該当する拝領者に関しては、今回は労働局地点の北側にあたる敷地についてのみ触ることにする。なお、17世紀後半以降の絵図史料では少なくとも拝領者名が5度変わり、15名の敷地に該当したものと考えられ、明治期の屋敷地の廃絶および甲府停車場開業に至るまで、継続的な居住が続いている場所といえる。

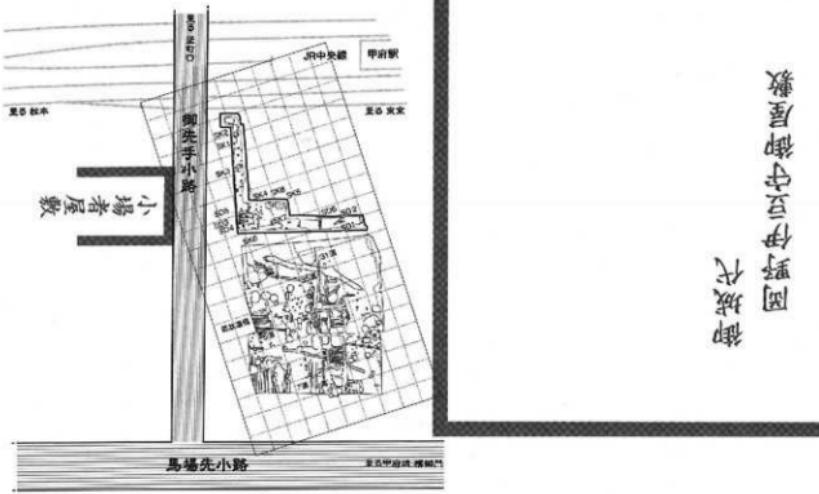
以下、第41～44図でみられた拝領者を年代順で並べていくことにすると、拝領者の名前がみられるのは柳沢吉保・吉里が甲府城主となった第V期（調査成果の照合をはかるため、以降労働局地点の時期区分で示す。年代については表12を参照されたい。）からであり、それ以前には絵図史料上同地区に記載はみられない。しかし、中世末の第II期末段階の遺物が出土したSK1や、第III期の甲府城築城期に埋め戻されたと考えられる。

えるSK5などを検出した。築城期以前の地割に関係する遺構は確認していないが、労働局地点においては、16世紀所産の灰釉皿や北宋銭を伴った墓壙と考えられる遺構や、第Ⅱ期に所産時期を求める可能性がある遺物が伴った井戸跡などが検出されている。

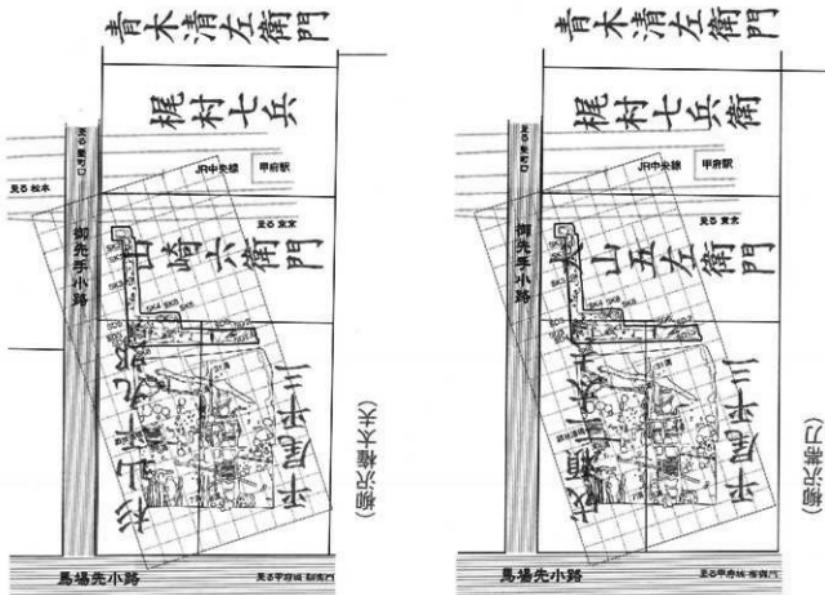
当該地において最初にみられる押領者としては、第V-1小期の柳沢吉保期に「山崎六衛門」、「杉山平九郎」、「平尾平三」であり、当該地の東に「柳沢権太夫」の名が記されている。杉山・平尾両名は、柳沢家の分限帳で家臣163名の人名が記されている「松平美濃守様御家中党」に登場する人物である。その両名が押領された土地に隣接する山崎六衛門についても、同じく柳沢家臣で御番頭となった山崎六右衛門と推定する。いずれも宝永元(1704)年に川越藩主であった柳沢吉保の入城に伴って移転してきたものと考えられる。調査成果において、これ以前の17世紀の遺物が希少であった状況から、当該地においては、武家屋敷地としての

表13 甲府城・甲府城下町に関する絵図史料一覧

No.	題名	繪圖年代	推定年代・時期	所蔵	KJ43時期	KJ43	甲VI
1	『甲州府中町之図』	17C代	元和9(1623)年 ～寛永18(1641)年	公益財団法人 三井文庫			
2	『甲府城並近辺之絵図』	17C代	寛永13(1636)年 ～寛安3(1660)年	京都大学工学部図書室			
3	『種姓圖面城図』	17C代		松江城山公園管理事務所			
4	41 『甲府城内裏敷図』	17C代	(御臺・御雪堀) 元禄2(1689)年 ～宝永元(1704)年 柳沢入部御前 同野伊豆守御役履歴の記載。 城代: 柳澤元代 元禄2(1689)年 ～宝永2(1705)年	柳沢文庫	第IV-6小期	Fig.113	151-1
5	『甲府城輪郭図』	18C前葉	(柳沢湖)	大和郡山市教育委員会			151-2
6	41 『柳沢時代・甲府ノ内裏外裏図』	18C前葉	(柳沢湖) 宝永元(1704)年 ～享保9(1724)年	山梨県立博物館	第V-1小期	Fig.114	151-3
7	『甲府城下輪郭図』	18C前葉	(柳沢湖) 寛政(1793)年以降、 文政10(1827)年までに完成	大和郡山市教育委員会			151-4
8	『御家中忠絵図』	18C前葉	(柳沢湖) (柳沢湖)	柳沢文庫			
9	41 『甲府城下絵図』	18C前葉	宝永元(1704)年 ～享保9(1724)年 『忠只堂年譜』 (柳沢湖)	柳沢文庫所蔵	第V-2小期	Fig.114	151-5
10	42 『甲府城下絵図』	18C前葉	宝永元(1704)年 ～享保9(1724)年	柳沢文庫	第V-2小期	Fig.115	
11	『甲府城内裏町割図』	18C前葉	(柳沢湖)	山梨県立博物館			151-6
12	文政7年甲府城内外番附聚敵役監査帳	18C前葉	文政7(1824)年(に寄せた) 正徳5(1715) ～享保9(1724)年頃	山梨県立博物館			
13	42 『元文三年甲府城下町輪郭図』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期) 元文3(1738)年	坂田邦夫氏所蔵	第VI-1小期	Fig.116	152-1
14	『御宝甲府輪郭(第一版)』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期) 寛永2(1649)年刊行	山梨県立博物館			152-2
15	43 『甲府輪郭図』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期) 文久2(1862)年刊行	東北大学付属図書室	第VI-2小期	Fig.117	
16	『御巡檢付甲府城内外番上書図』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期)	山梨県立博物館			152-4
17	43 『甲府内外都鄙図』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期) 文政年中(1818～1830年)	山梨県立博物館			Fig.117
18	『甲府輪郭全図』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期)	山梨県立博物館			
19	44 『櫻宝甲府輪郭(第二版)』	18C中葉～ 19C中葉	(御番期) 寛永2(1649)年以後刊行	山梨県立博物館	第VI-2小期	Fig.118	152-3
20	『城下輪郭図』	18C中葉～ 20C中葉	(御番期)	京都大学工学部工学研究 科蔵書室所蔵			
21	『櫻宝甲府輪郭図』	明治	明治4(1871)年	山梨県立博物館			152-5
22	『山梨県下中町之図』	明治	明治9(1876)年	山梨県立博物館			152-6
23	44 『明治30年写甲府公圖』(仮称)	明治	明治30(1897)年	甲府市立図書館	第V期	Fig.119	
24	『改正甲府市街図』	明治	明治37(1904)年	山梨県立博物館			153-1
25	『甲府市全図』	明治	明治39(1905)年	第3回 甲府市統計書			153-2
26	『甲府市全図』	大正	大正7(1918)年				
27	『續訂 甲府市明細全図』	大正	大正8(1919)年	山梨県立博物館			153-3
28	『甲府市街明細地図』	大正	大正9(1920)年	山梨県立博物館			
29	『甲府市全図』	大正	大正10(1921)年 ～15(1926)年 大正12(1923)年 1/1800の概観地図	山梨県立博物館			
30	『甲府市地図』	大正					
31	『甲府市全図』	昭和初期～ 戰前	昭和4(1929)年	第23回 甲府市統計書			153-4
32	『甲府市内地図』	昭和初期～ 戰前	昭和3・4年(1928・1929)頃	山梨県立博物館			153-5
33	『甲府市全図』	第二次世界 大戦以降	昭和24(1949)年頃	甲府市制60年誌			153-6



第V-6小期(甲府家期) [Fig.113] : 甲府城内屋敷図(元禄2(1689)年~宝永元(1704)年)



第V-1小期(柳沢吉保期) [Fig.114]
: 柳沢時代/郭内郭外図(宝永元(1704)年~享保9(1724)年)

第V-2小期(柳沢吉里期) [Fig.114]
: 甲府城下絵図(宝永元(1704)年~享保9(1724)年)

第41図 43街区 時期別土地利用状況図(1)

土地利用が開始された初段階にあたるものと推定した。

吉保を継いだ吉里の時期である第V - 2 小期の当該地は、「甲府御城下絵図」では山崎・平尾はかわらず、杉山平九郎の拝領地に名倉源衛門の名が記され（第42図上）、「甲府城下絵図」では「山崎六衛門」から「大山五左衛門」、「杉山平九郎」から「成瀬二太夫」（第41図下）の名が記されている。大山は享保4（1719）の「松平甲斐守様御家中御役人付」に大目付衆・三百石と記される人物である。吉里は宝永7（1710）年に甲府に入城しており、その際に3230人を超える家臣団の移住により城下町の改変が行われた時期にあたる。但し、この段階に検出した遺構・遺物は少なく、内郭に位置する当該地では拝領者の入れ換程度で、屋敷地の現状変更は少なかったと考える。

第VI期は柳沢吉里が大和郡山へ転じた後の幕府直轄領となる甲府勤番支配期にあたる。この時期の絵図史料では、第VI - 1 小期の概略図で「九十一 中村松之助」、「浅井 明地」、「九十四 秋田主馬」（第42図下）、第VI - 2 小期の概略図では「九十一 本間」・「九十三 實方」・「九十四（無記名）」（第43図上）、「ホリエ」（第43図下）、「九十一 本間」・「九十三（無記名）」・「九十四 依田」（第44図上）の拝領者名をみることができる。

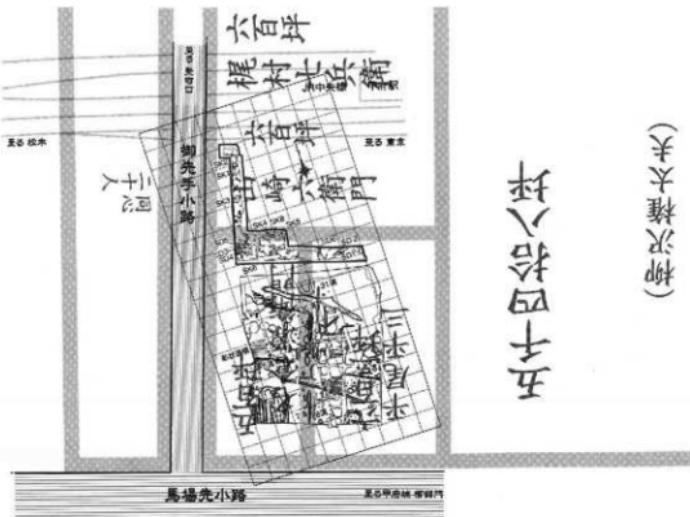
土地区画の変化については、今回の調査区においては直接変更が認められる部分はなかったが、文久2（1862）年の「甲府絵図」（第43図下）において、前段階の「甲府郭内外邸第図」で「九十三 實方」と記されていた区画が南北2区画に隔てられ、調査区がかかる範囲の拝領者は無記名となっている。

この時期に係る遺構としてはSD6があり、労働局地点で検出した31号溝の延長状に位置しており、当該地を南北に延びる溝状遺構である。絵図史料上にみられる屋敷境に伴う遺構と考えられるが、東西に分割する屋敷境は既に柳沢期よりみられる。本調査区では出土遺物がなかったため、明確な時期を断定できなかつたが、労働局地点の報告においては出土遺物から第VI - 1 ~ 2 小期に帰属する遺構としており、さらに実際の屋敷境については31号溝と35号溝の間の空間と推察しており、堀や受け垣などに付随する溝である可能性を指摘している。なお、当該地では、勤番士の転出に伴い、遺物が一括廃棄される痕跡が認められる。労働局地点では14号溝において、19世紀前半に使用された生活資材が19世紀中葉に廃棄された状況が報告されている。本調査区においても、出土量は少ないが、14号溝に類似するSK6から19世紀前半の遺物が出土している。

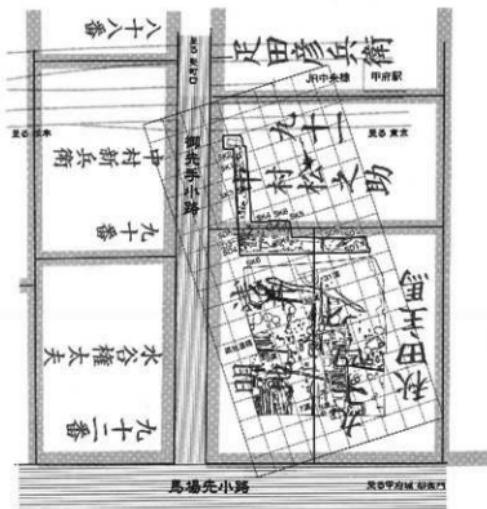
第VII期以降については、「七番（無記名）」・「八番 櫻田忠雄」・「九番 秋山鶴右衛門」と表記されている（第44図下）。同図の前段階については、労働局地点の報告で「山梨縣甲府市及若名市町村圖（明治22（1889）年～明治36（1903）年）」に、当該地南側の街路に面して建物の表記があることをあげている。遺構としては、歟状遺構を検出している。勤番士の転出以降、すべての屋敷地が廃絶したかは不明であるが、盛土造成される甲府停車場開業に至るまでの期間に、畠として利用していたことが窺えた。

以上、17街区および43街区における土地利用の変遷と調査成果の照合を行った。この結果として、築城期以前の遺構が検出できたこと、17世紀段階の出土遺物が少なく、同地点における屋敷地としての土地利用開始時期が柳沢期に求められる可能性があること、勤番士転出時の遺物廃棄の状況などを捉える事が出来た。但し、今回の調査においても、武家屋敷の建物に関わる明確な痕跡を確認することはできなかった。なお、土地区画については、労働局地点の報告では同地区における土地区画の方向が、明治時代に至ってもほぼ変わらない状況から、少なくとも18世紀初頭から20世紀初頭までの約200年間にわたって維持されてきたことを指摘した。これについては、馬場先小路・御先手小路の屋敷外周に面した土地区画であったことが要因と考えることができる。同調査区周辺および同様の街路に沿った地域においても、同様の傾向がみられる可能性があるものと考えられる。今後課題とすべき点は多いが、これから調査および整理報告において留意しながら検討を続けていくことにしたい。

(東洋大業)

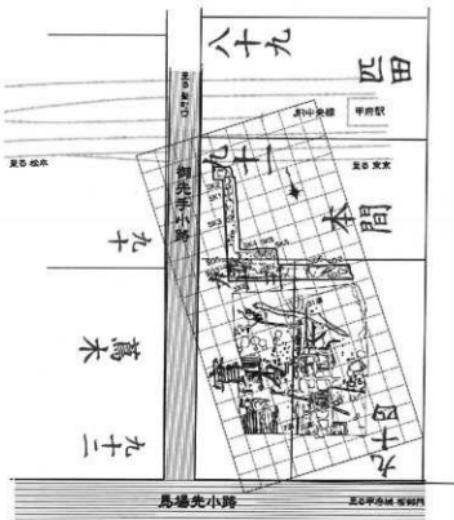


第V-2小期(柳沢吉里期) [Fig.115] : 甲府御城下繪図(宝永元(1704)年~享保9(1724)年)

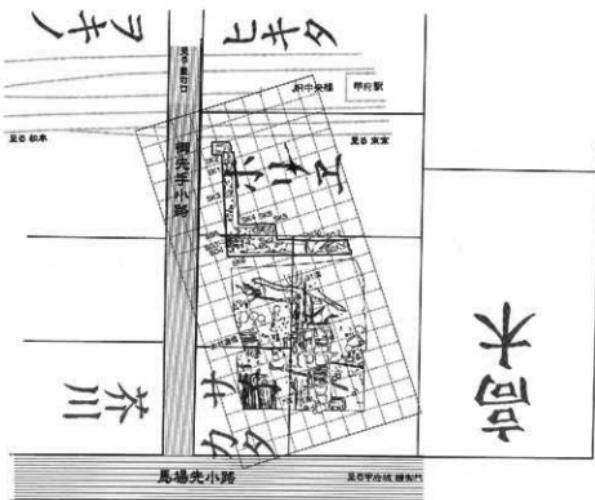


第VI-1小期(甲府勘査支配期) [Fig.116] : 元文三年甲府城下繪図(元文3(1738)年)

第42図 43街区 時期別土地利用状況図(2)

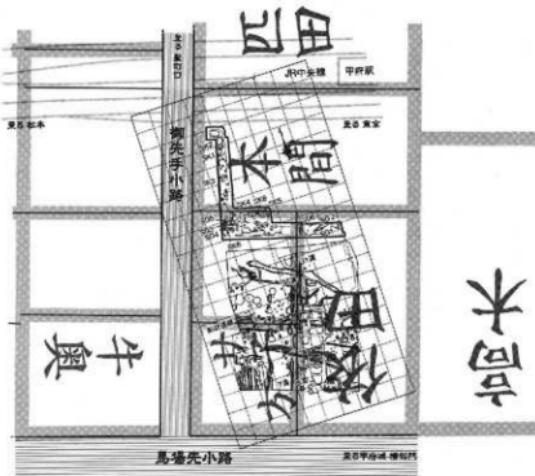


第VI-2小期(甲府勝手小巷設置期) [Fig.117] : 甲府郭内外邸第図(文政年中(1818~1830年)

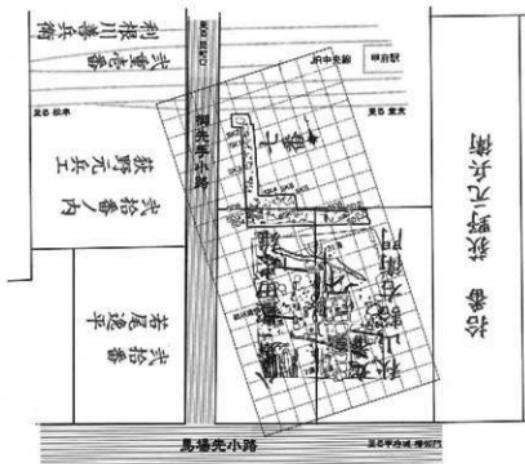


第VI-2小期(甲府勝手小巷設置期) [Fig.117] : 甲府絵図(文久2(1862)年)

第43図 43街区 時期別土地利用状況図(3)



第VI-2小期(甲府勝手小普請設置期) [Fig.118] : 價宝甲府絵図 第二版(嘉永2(1849)年以降)



第VI期(明治期) [Fig.119] : 明治30年写甲府公園(仮称)(明治30(1897)年)

第44図 43街区 時期別土地利用状況図(4)

参考文献

- 秋山敬 1998 「一蓮寺門前町の成立」『武田氏研究』第19号
甲府市教育委員会 1998 「武田氏館跡Ⅲ」 甲府市文化財調査報告7
甲府市教育委員会 2000 「史跡武田氏館跡V」 甲府市文化財調査報告9
甲府市教育委員会 2000 「史跡武田氏館跡Ⅵ」 甲府市文化財調査報告11
甲府市教育委員会 2001 「甲府城下町遺跡Ⅰ」 甲府市文化財調査報告15
甲府市教育委員会 2001 「秋山氏館跡」 甲府市文化財調査報告16
甲府市教育委員会 2002 「史跡武田氏館跡Ⅶ」 甲府市文化財調査報告18
甲府市教育委員会 2002 「甲府城下町遺跡Ⅱ」 甲府市文化財調査報告19
甲府市教育委員会 2003 「史跡武田氏館跡Ⅷ」 甲府市文化財調査報告23
甲府市教育委員会 2004 「塙部遺跡Ⅰ」 甲府市文化財調査報告24
甲府市教育委員会 2005 「塙部遺跡Ⅱ」 甲府市文化財調査報告30
甲府市教育委員会 2006 「甲府城下町遺跡Ⅲ」 甲府市文化財調査報告33
甲府市教育委員会・財团法人山梨文化財研究所 2006 「第4回遠跡（第342次）」 甲府市文化財調査報告34
甲府市教育委員会 2008 「甲府市内遺跡V」 甲府市文化財調査報告38
甲府市教育委員会 2007 「甲府城下町遺跡Ⅳ」 甲府市文化財調査報告39
甲府市教育委員会 2009 「甲府市内遺跡VI」 甲府市文化財調査報告41
甲府市教育委員会 2009 「史跡武田氏館跡Ⅸ」 甲府市文化財調査報告42
甲府市教育委員会 2009 「武田城下町遺跡III」 甲府市文化財調査報告43
甲府市教育委員会 2009 「甲府城下町遺跡V」 甲府市文化財調査報告52
甲府市教育委員会・財团法人山梨文化財研究所 2012 「甲府城下町遺跡VI」 甲府市文化財調査報告57
甲府市役所 1987 「甲府市史」 資料編 第2巻 近世 I
甲府市役所 1990 「甲府市史」 通史編 第3巻 近代
財团法人山梨文化財研究所 2011 「甲府城下町遺跡（丸の内二丁目109地点）」
平凡社 1995 「山梨の地名」 日本歴史地名大系19
山梨県 2004 「山梨県史」 通史編 第3巻 近世 I
山梨県教育委員会 1995 「甲府城跡V」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第96集
山梨県教育委員会 1996 「甲府城跡VI」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第140集
山梨県教育委員会 1999 「日向町遺跡発掘調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第170集
山梨県教育委員会 2004 「甲府城下町遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第215集
山梨県教育委員会 2005 「県指定史跡甲府城跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第220集
山梨県教育委員会 2006 「甲府城跡認定調査報告書」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第232集
山梨県教育委員会 2007 「甲府城下町遺跡（甲府地方裁判所地点）」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第249集
山梨県教育委員会 2009 「甲府城下町遺跡」 山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第258集
山梨県教育委員会 2009 「附指定史跡甲府城跡」
山梨県教育委員会ほか 1969 「甲府城総合調査報告書」
山梨県立博物館 2011 「柳沢吉保と甲府城」

おわりに

甲府市教育委員会が発行する甲府城下町遺跡の発掘調査報告も、本書でⅧ分冊目となり、各調査地点ごとに遺構・遺物の出土傾向の違いや変化など、遺跡の様相が徐々に明らかとなってきた。今回報告した発掘調査においても、17街区では二の堀外側の町人地の様相の一部が窺え、43街区では武家屋敷の地割など城下町の形成に関わる遺構を検出することができた。近世の城郭・城下町の研究また地域の歴史教育にとっても、またひとつ貴重な資料を得ることができたといえよう。

発掘調査自体は、2007年および2009年に実施したもので、刊行までに6年の歳月を要した。このたび調査の成果がこうして公にできたのも、発掘調査に参加していただいた現場スタッフの皆様、また地道な整理作業に携わって報告をまとめ上げていただいた整理スタッフの皆様、その他本発掘調査に関わっていただいた多くの方々の協力によるものである。

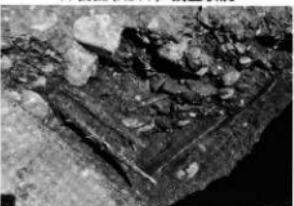
最後になりましたが、ご協力いただきました関係機関、各位に対しまして、心より御礼申し上げます。



17街区(KJ17) 調査状況



1. SE1・3 確認状況(南から)



2. SE1 上部堆積状況(南から)



3. 同左(南から)



4. SE1 遺物出土状況



5. 同左 遺物出土状況(68)



6. 同左 木材堆積状況(南から)



7. 同上 石積確認状況(南から)



8. 同左 石積・銅木



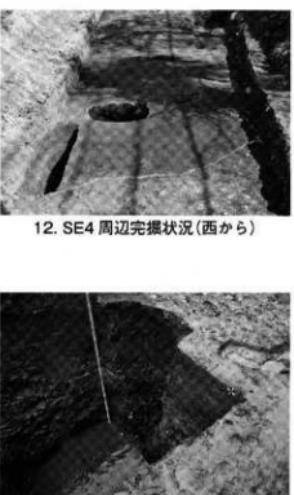
9. SE1・3 調査状況(南から)



10. SE1 石積検出状況(南から)



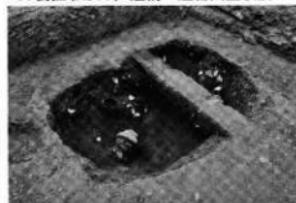
11. SE3 堆積状況(南から)



12. SE4 周辺完掘状況(西から)

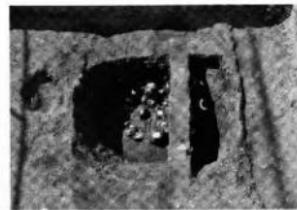
13. SE4 断面(南西から)

17街区(KJ17) 遺構・遺物出土状況



2. SE2 調査状況(南東から)

3. 同左 遺物出土状況[66]



1. SE1・2 調査状況(東から)

4. 同左 遺物出土状況[20]

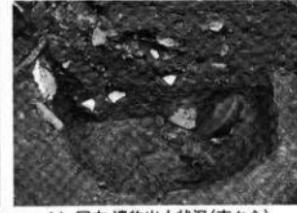
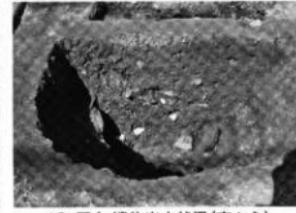
5. 同左 遺物出土状況(南から)



6. SE2 遺物出土状況

7. 同左 遺物出土状況[41]

8. 同左 遺物出土状況[33]



9. 同上 遺物出土状況[48他]

10. 同左 遺物出土状況(南から)

11. 同左 遺物出土状況(南から)

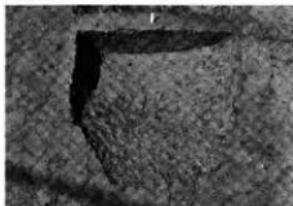


12. 同上 遺物出土状況[52]

13. 同左 遺物出土状況[52]

14. 同左 完掘状況(南から)

17街区(KJ17) 遺構・遺物出土状況



1. SK1 断面(南から)



2. SD2 間知石残存状況(北から)



3. 同左 調査状況(南から)



4. SD1 完掘状況(南から)



5. 同左サブトレ内櫛出土状況(北西から)



6. SD2 断面(北西から)



7. SD2 断面(北西から)



8. 同左 堆積状況(北西から)



9. 南壁堆積状況



11. 同左 近景(北西から)



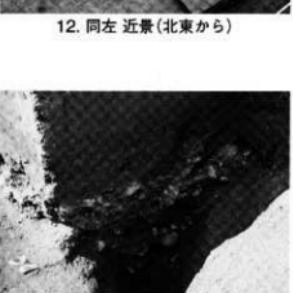
12. 同左 近景(北東から)



10. SD2 櫛堆積状況(南東から)

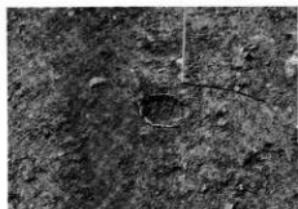


13. 同左 完掘状況(南東から)



14. SD2 北側堆積状況

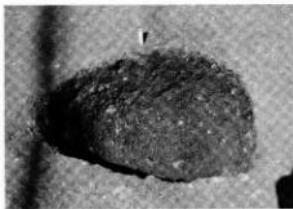
17街区(KJ17) 遺構・遺物出土状況



1. Pit1出土 銅碗確認状況



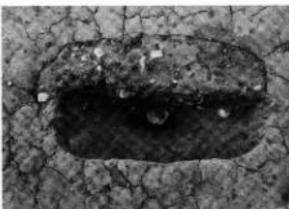
2. Pit1 断面(東から)



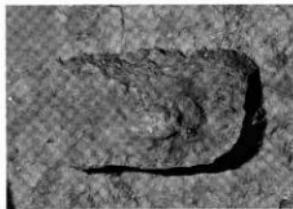
3. 同左 完掘状況(東から)



4. Pit2 断面(東から)



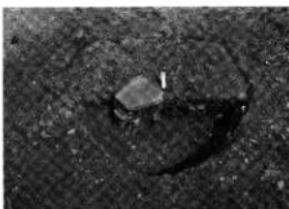
5. Pit3 断面(東から)



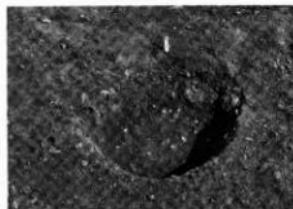
6. 同左 完掘状況(南から)



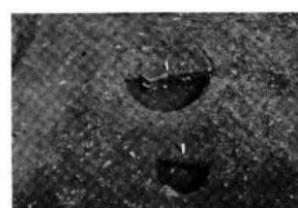
7. Pit4 断面(東から)



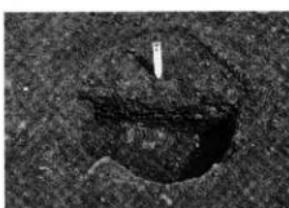
8. Pit5 断面(東から)



9. 同左 完掘状況(南から)



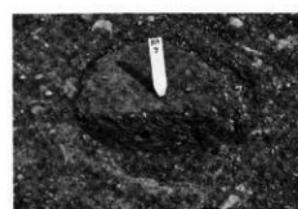
10. Pit5・6 確認状況(南から)



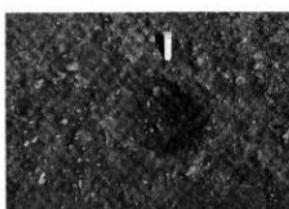
11. Pit6 断面(南から)



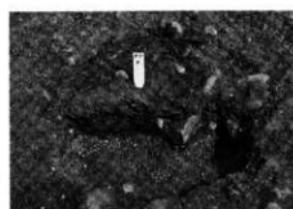
12. 同左 完掘状況(南から)



13. Pit7 断面(南から)

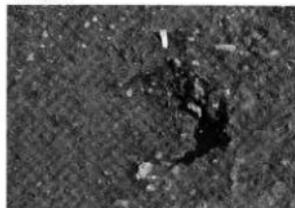


14. 同左 完掘状況(南から)



15. Pit8 断面(南から)

17街区(KJ17) 遺構・遺物出土状況



1. Pit8 完掘状況(南から)



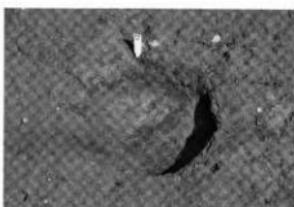
2. Pit9 断面(南から)



3. 同左 完掘状況(南から)



4. Pit10 断面(南から)



5. 同左 完掘状況(南から)



6. Pit11 断面(南から)



7. Pit11出土(69) 磁板か(南から)



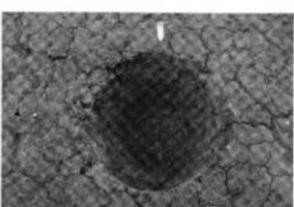
8. Pit12 断面(南から)



9. 同左 完掘状況(南から)



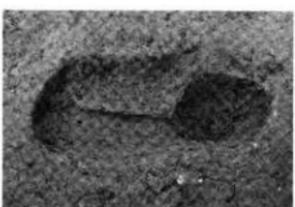
10. Pit13 断面(南から)



11. 同左 完掘状況(南から)



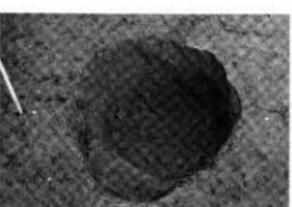
12. Pit14 断面(南から)



13. Pit14 完掘状況(南から)



14. Pit15 断面(南から)



15. 同左 完掘状況(南から)

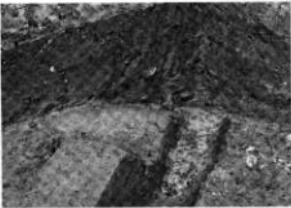
17街区(KJ17) 遺構・遺物出土状況



1. SX1 完掘状況(南東から)



2. SX1 調査区北壁セクション



3. SX1 断面(南から)



4. SX1 近景(南西から)

5. 調査区東側河川堆積層
遺物出土状況(西から)

6. 同左 遺物出土状況(101他)



7. 調査区東側河川堆積層 遺物出土状況



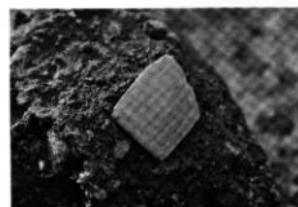
8. 同左 遺物出土状況



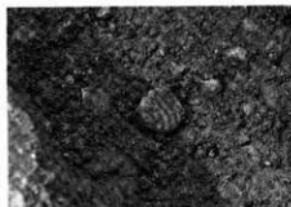
9. 同左 遺物出土状況(120)



10. 同上 遺物出土状況



11. 同左 遺物出土状況(99)



12. 同左 遺物出土状況(128)



13. 骨(犬) 検出状況



14. 木杭 検出状況



15. 2次調査区 東端北壁セクション

17街区(KJ17) 調査区状況及び調査風景



1. 調査区南側 線路境側溝跡(西から)



4. 2次調査下層精査状況(西から)



5. 同左 植物根跡確認状況



8. 写真測量(ポール撮影)状況



6. 調査区設定作業



7. 基準点設置作業



9. 写真測量(遺構断面)状況



10. 調査風景(光波測量)



11. 調査風景



12. 調査風景(実測作業)

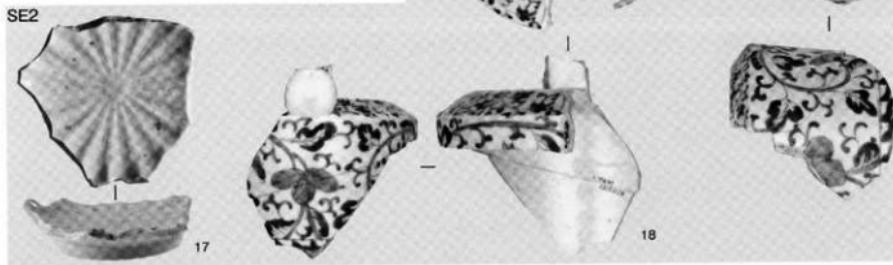


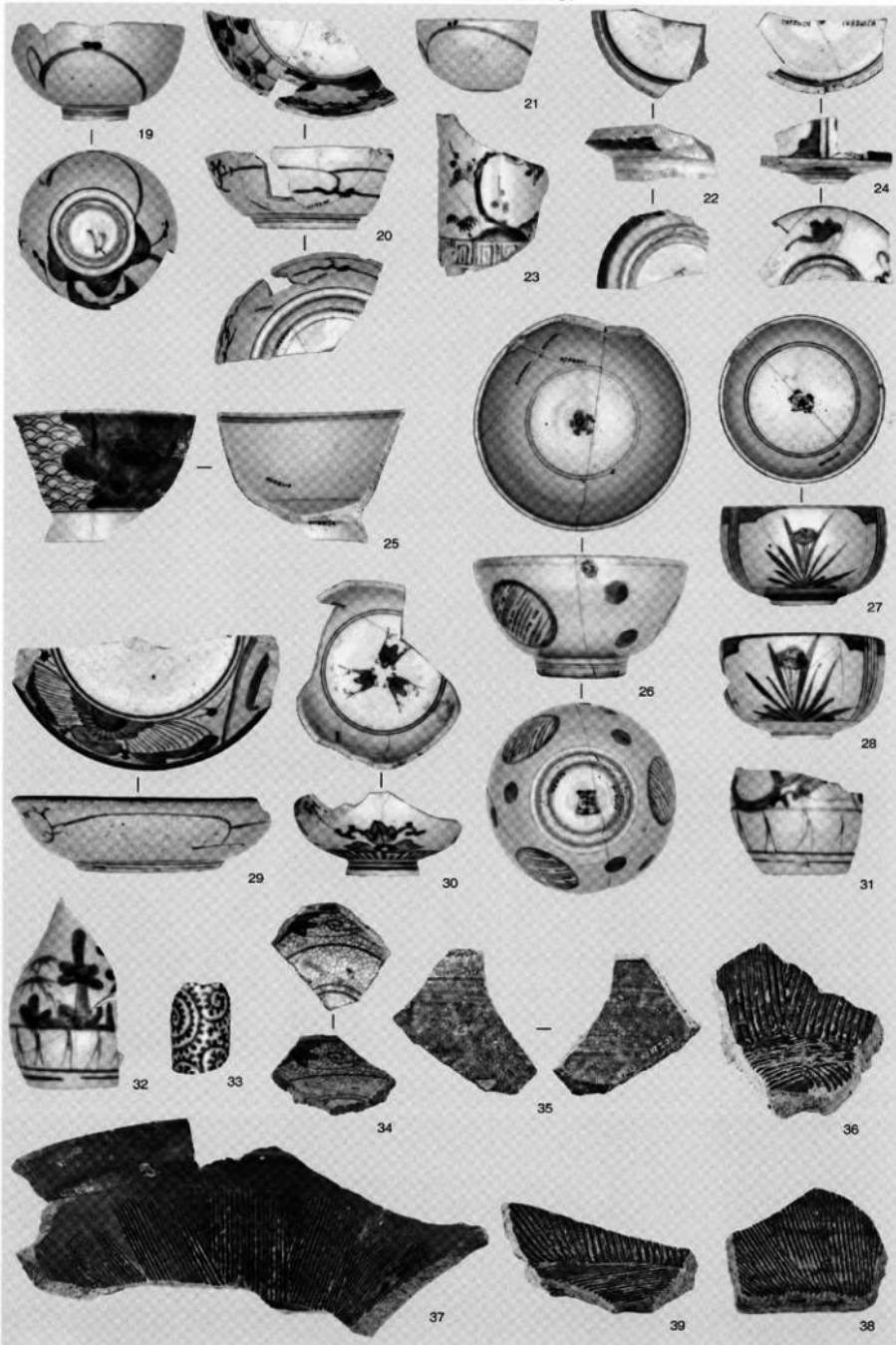
13. 埋め戻し後状況(東から)

SE1・3



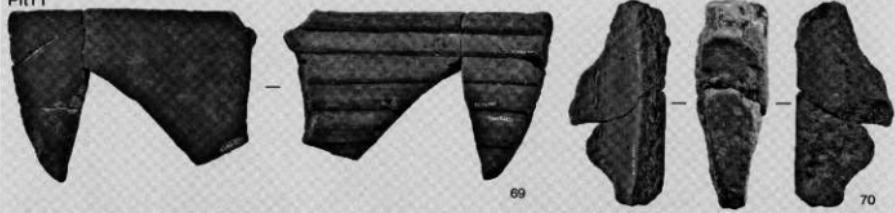
SE2



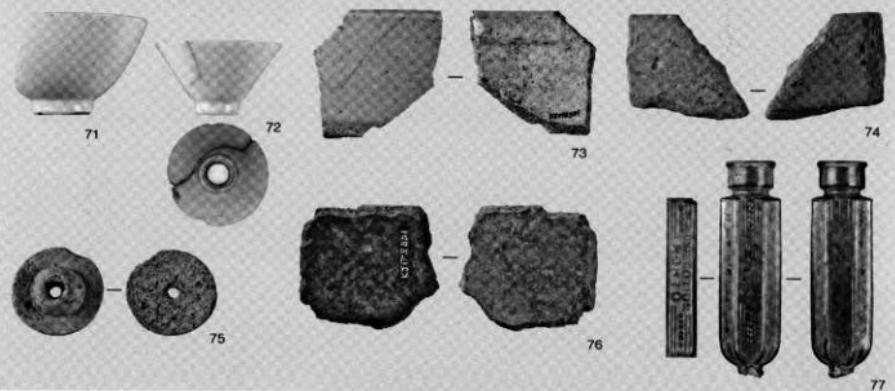




Pit11



SD1

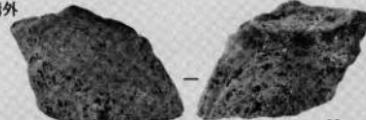


SD2



17街区(KJ17) 出土遺物 (遺構外①)

遺構外



92

93

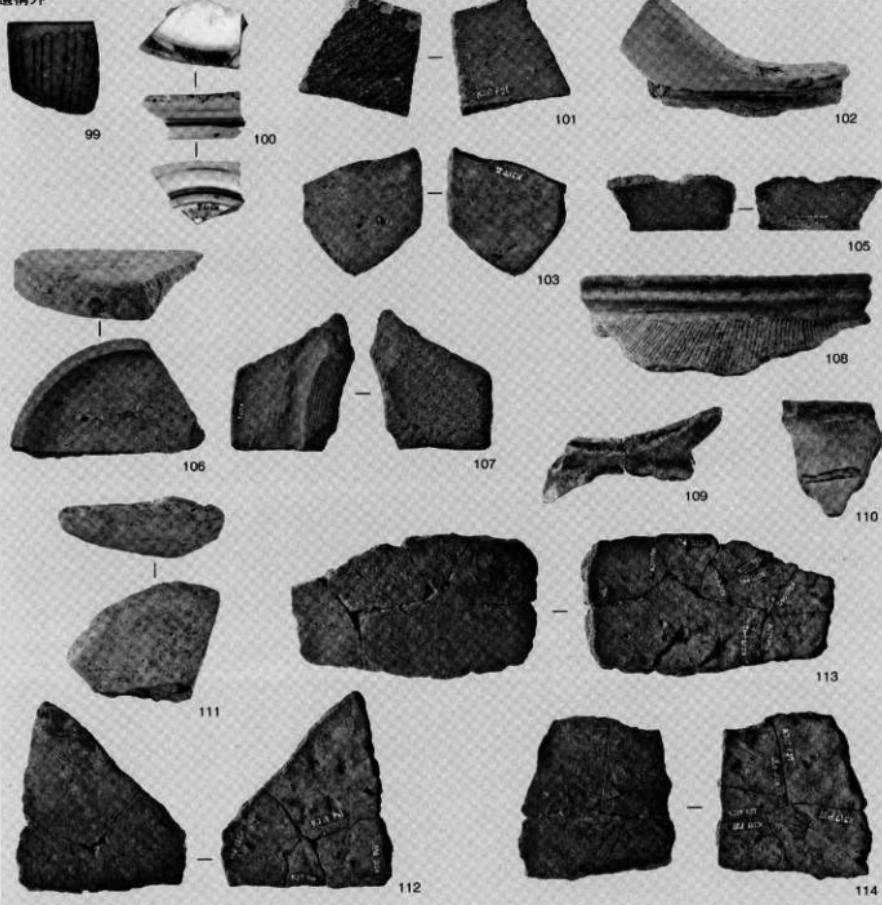
北側サブトレー括



97

98

遺構外



99

100

101

102

105

103

108

106

107

109

110

113

111

112

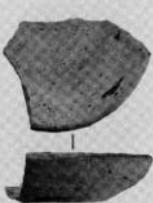
114

サブトレー括



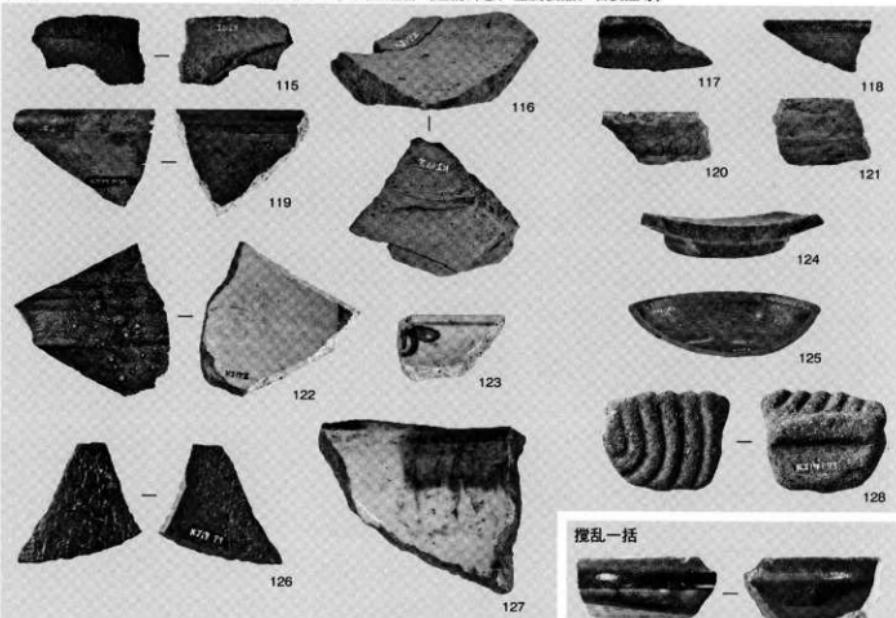
94

95

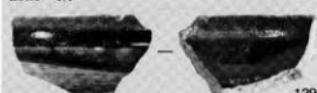


図版 14

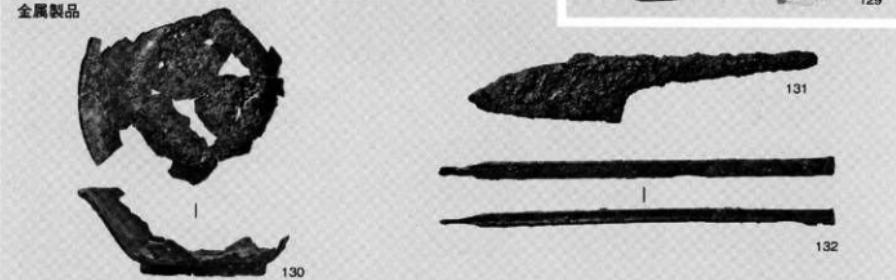
17街区(KJ17) 出土遺物(遺構外②、金属製品、石製品等)



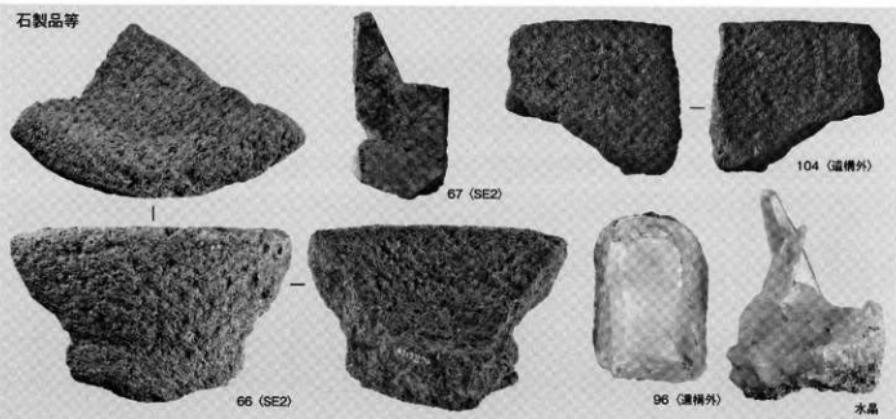
攪乱一括



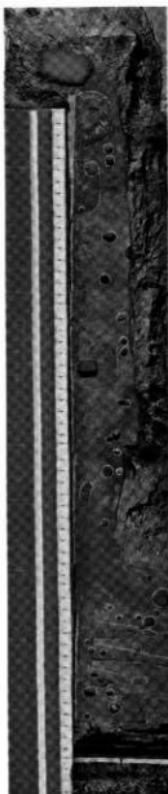
金属製品



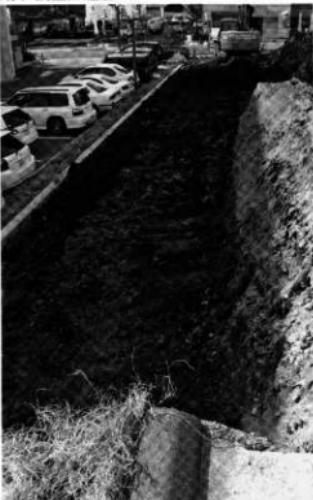
石製品等



43街区(KJ1-12) 表土剥ぎ、調査区全景 (モザイク写真)、調査区近景



1. 表土剥ぎ状況(北から)



3. 表土剥ぎ状況(東から)



2. 表土剥ぎ状況(南から)



4. 調査区全景(南から)



5. 完掘状況(北西から)



1. 完掘状況(南から)



2. SK1 断面(南から)



3. 同左 完掘状況(東から)



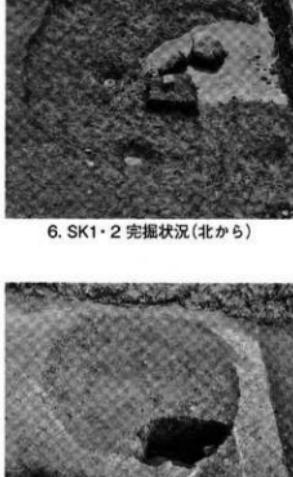
6. SK1・2 完掘状況(北から)



4. SK2 断面(南から)



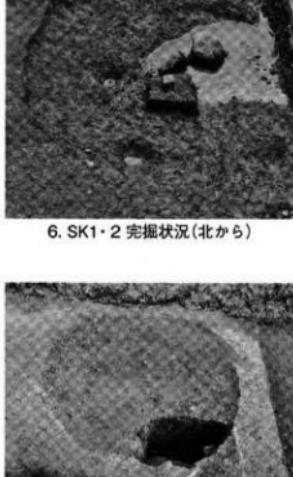
5. 同左 完掘状況(東から)



7. SK3 断面(西から)



8. 同左 遺物出土状況(西から)

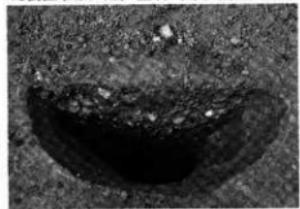


9. 同左 完掘状況(西から)

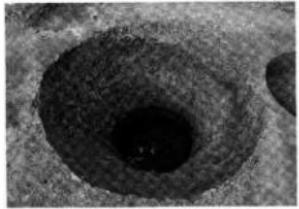
43街区(KJ1-12) 土坑(2)、調査区近景



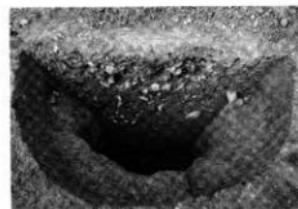
1. SK4・5 確認状況(南から)



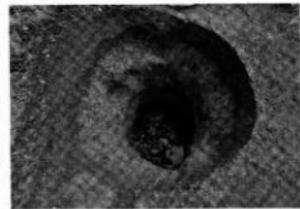
2. SK4 断面(南から)



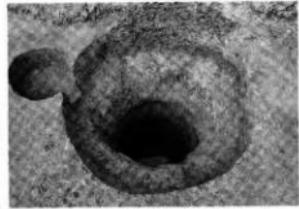
3. 同左 完掘状況(南から)



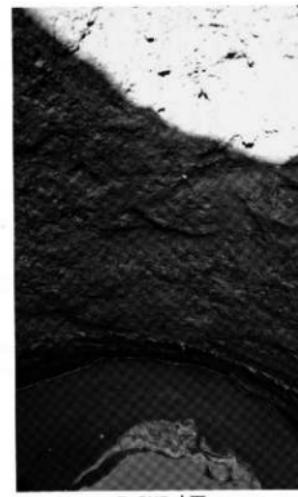
4. SK5 断面(南から)



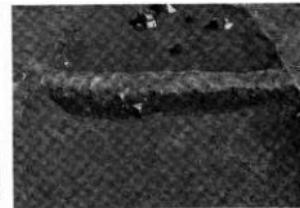
5. 同左 完掘状況(西から)



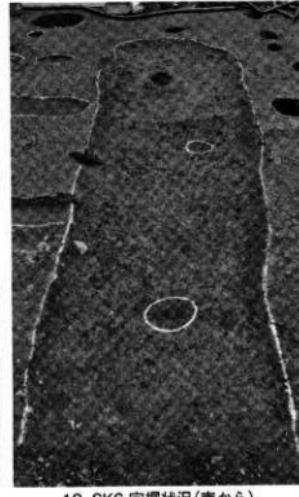
6. 同左 完掘状況(南から)



7. SK5 内面



8. SK6 断面(南から)



10. SK6 完掘状況(南から)



12. 同左 完掘状況(南から)



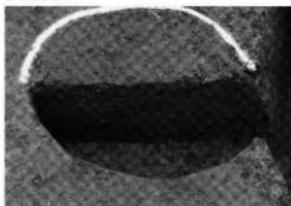
13. 調査区近景(西から)



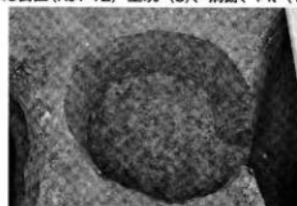
11. SK7 断面(南から)

図版 18

43街区(KJ1-12) 土坑(3)、溝跡、Pit(1)



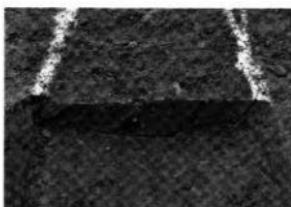
1. SK8 断面(南西から)



2. 同左 完掘状況(南西から)



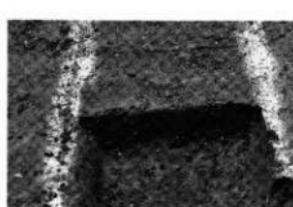
3. 調査区南東部造構確認状況(西から)



4. SD1 断面(東から)



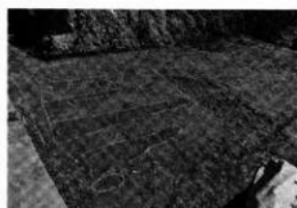
5. SD1・2 断面(東から)



6. SD2 断面(東から)



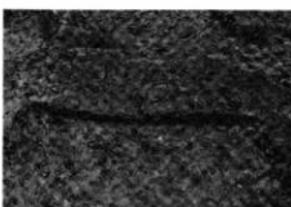
7. SD1・2 完掘状況(東から)



8. 南西部造構確認状況(南西から)



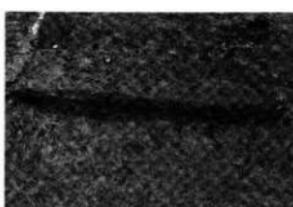
9. SD3・4・5 完掘状況(西から)



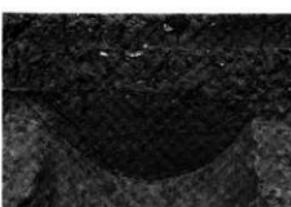
10. SD3 断面(西から)



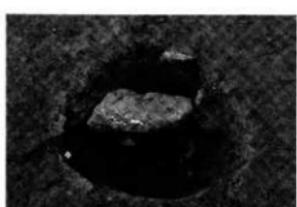
11. SD4 断面(西から)



12. SD5 断面(西から)



13. SD6 断面(西から)



14. Pit1 断面(西から)

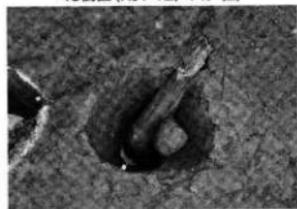


15. Pit1 破片検出状況(南から)

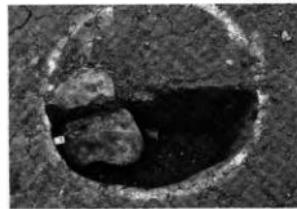
43街区(KJ1-12) Pit (2)



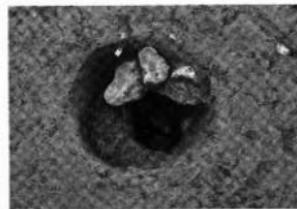
1. Pit2 断面(西から)



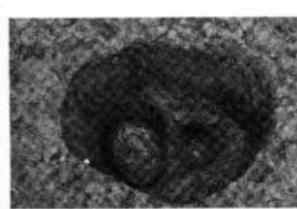
2. Pit2 完掘状況(西から)



3. Pit3 断面(南から)



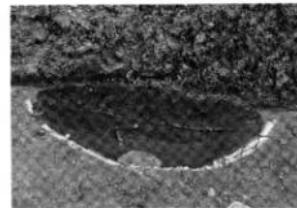
4. Pit3 完掘状況 1(東から)



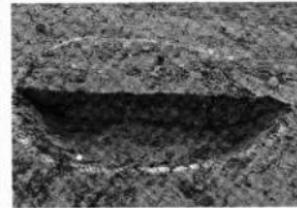
5. Pit3 完掘状況 2(南から)



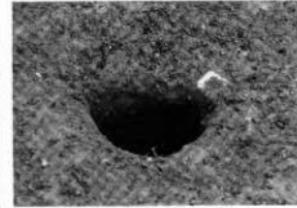
6. Pit4 断面(南から)



7. Pit5 断面(西から)



8. Pit6 断面(南から)



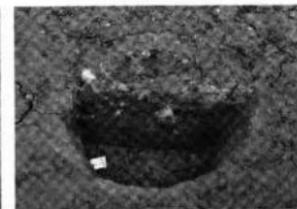
9. Pit7 断面(南から)



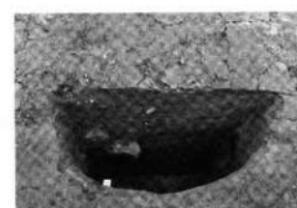
10. Pit9 断面(南から)



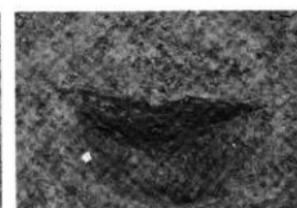
11. Pit10 断面(南から)



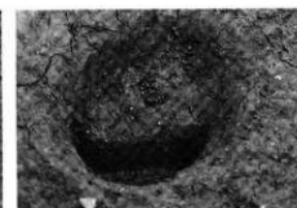
12. Pit11 断面(南から)



13. Pit12 断面(南から)



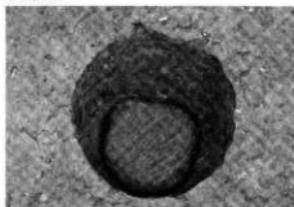
14. Pit13 断面(南から)



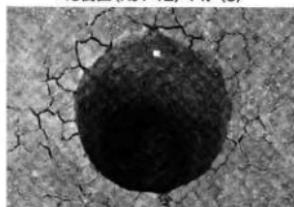
15. Pit15 断面(南から)

図版 20

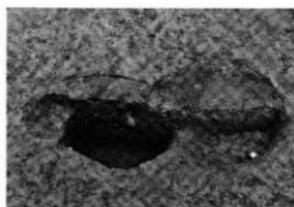
43街区(KJ1-12) Pit (3)



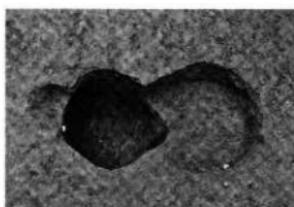
1. Pit15 磚石検出状況(南から)



2. Pit15 完掘状況(南から)



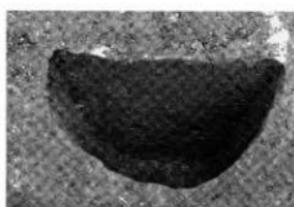
3. Pit17・18 断面(南から)



4. Pit17・18 完掘状況(南から)



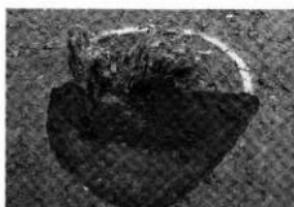
5. Pit19 断面(南から)



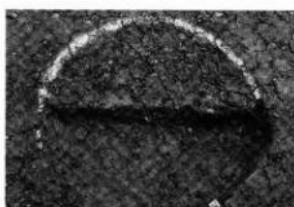
6. Pit20 断面(南から)



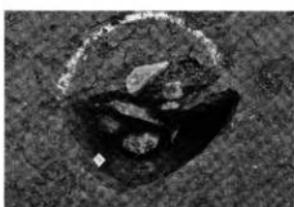
7. Pit20・21 完掘状況(南から)



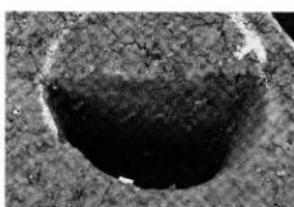
8. Pit21 断面(南から)



9. Pit22 断面(南から)



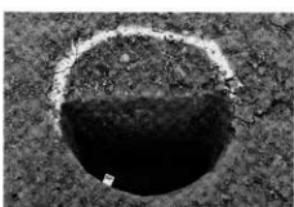
10. Pit23 断面(南から)



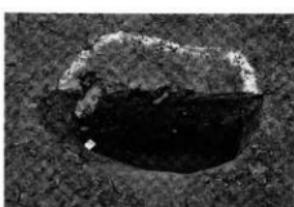
11. Pit24 断面(南から)



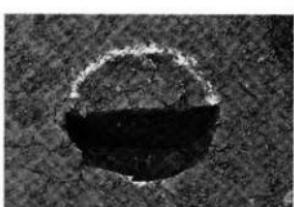
12. Pit25 断面(南から)



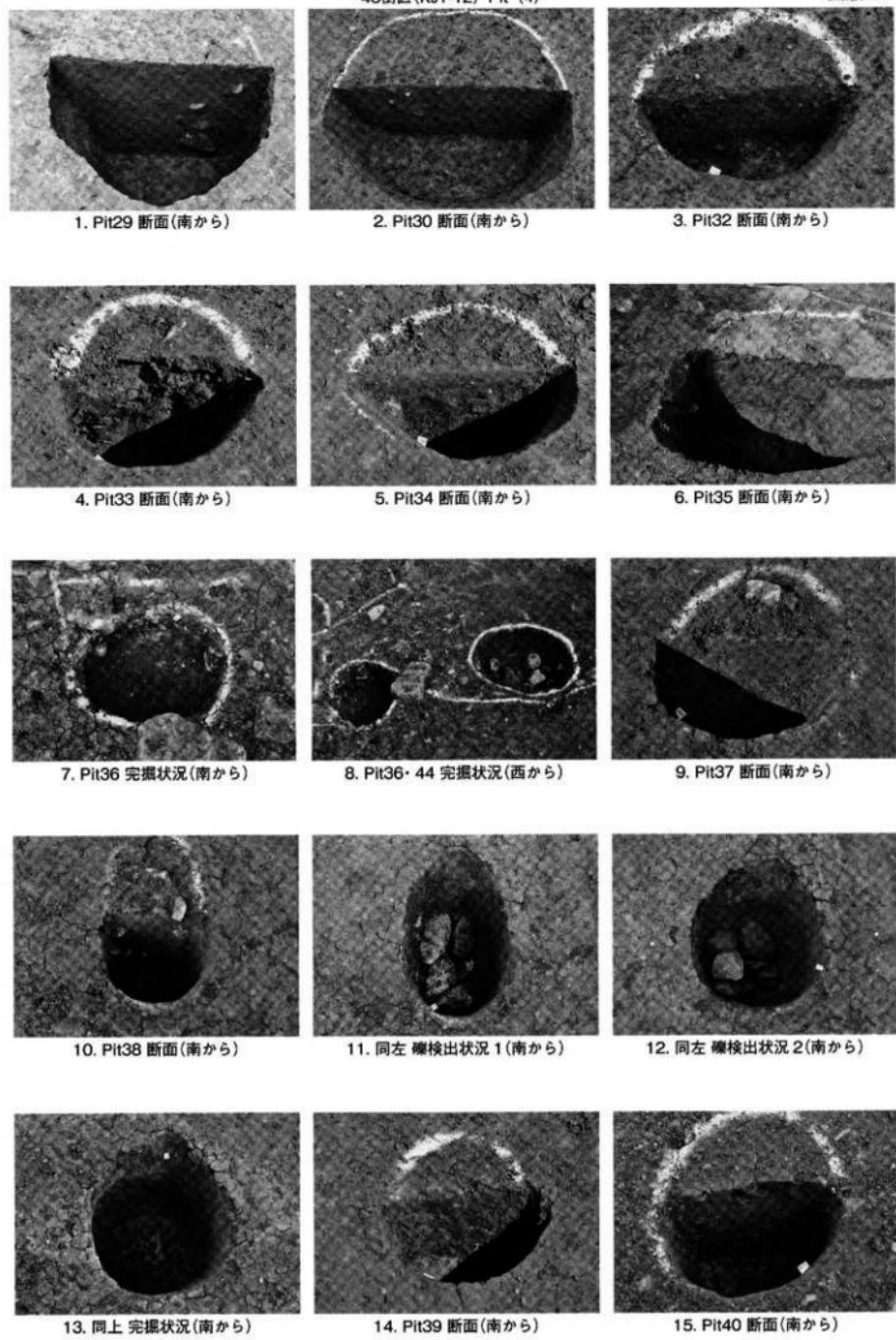
13. Pit26 断面(南から)



14. Pit27 断面(南から)

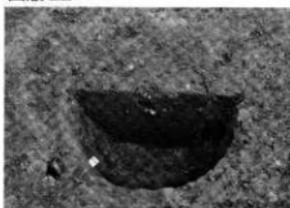


15. Pit28 断面(南から)



図版 22

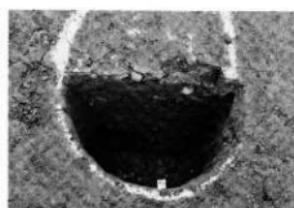
43街区(KJ1-12) Pit (5)



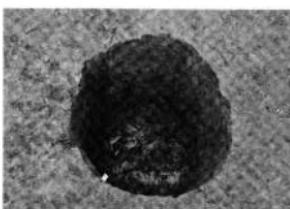
1. Pit41 断面(南から)



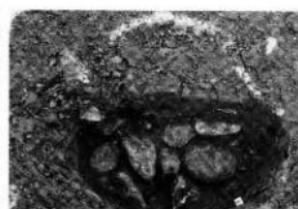
2. Pit42 断面(南から)



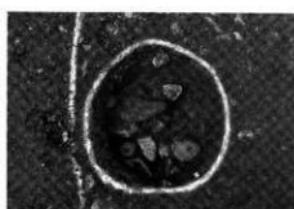
3. Pit43 断面(南から)



4. Pit43 完掘状況(南から)



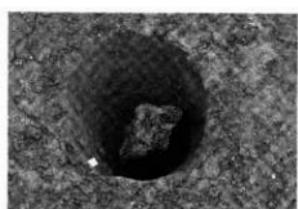
5. Pit44 断面(南から)



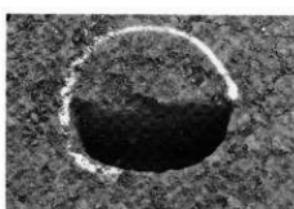
6. 同左 完掘状況(南から)



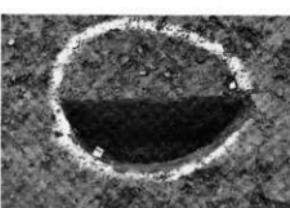
7. Pit45 断面(南から)



8. Pit46 材検出状況(南から)



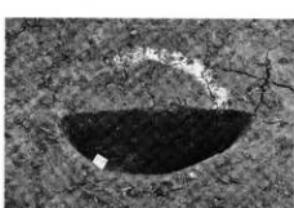
9. Pit47 断面(南から)



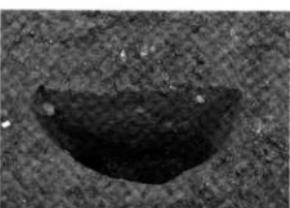
10. Pit48 断面(南から)



11. Pit49 断面(南から)



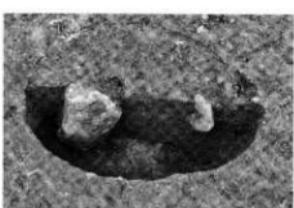
12. Pit50 断面(南から)



13. Pit51 断面(南から)



14. Pit51 完掘状況(南から)



15. Pit52 断面(南から)

43街区 (KJ1-12) 調査風景、出土遺物 (1)



1. 調査風景



2. 調査風景



3. 調査風景



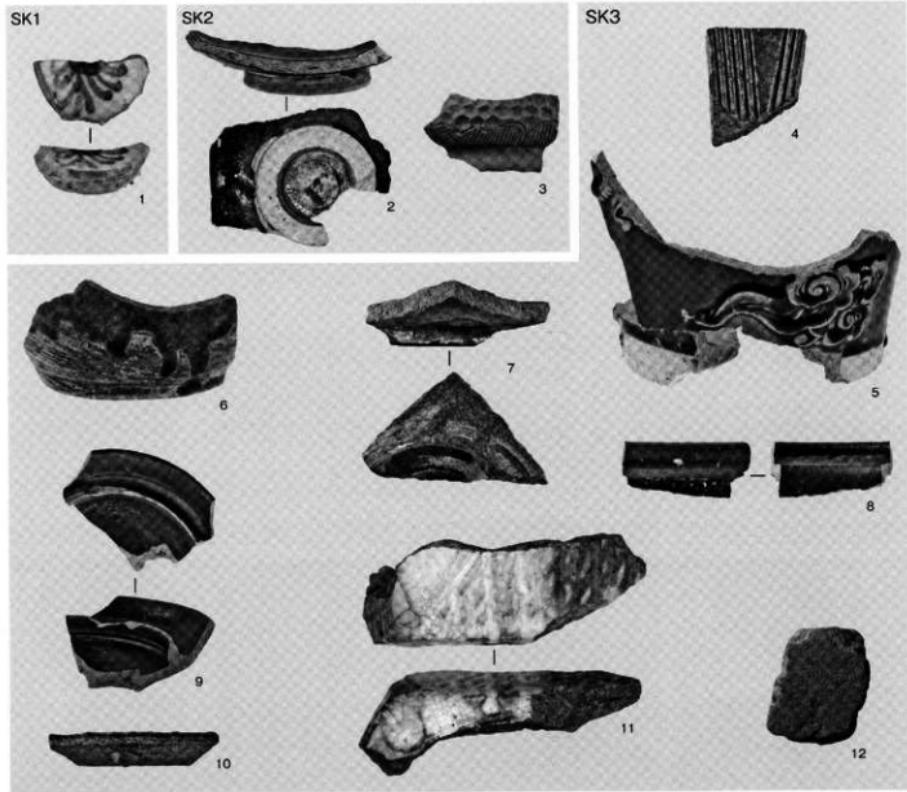
4. 調査風景



5. 調査風景



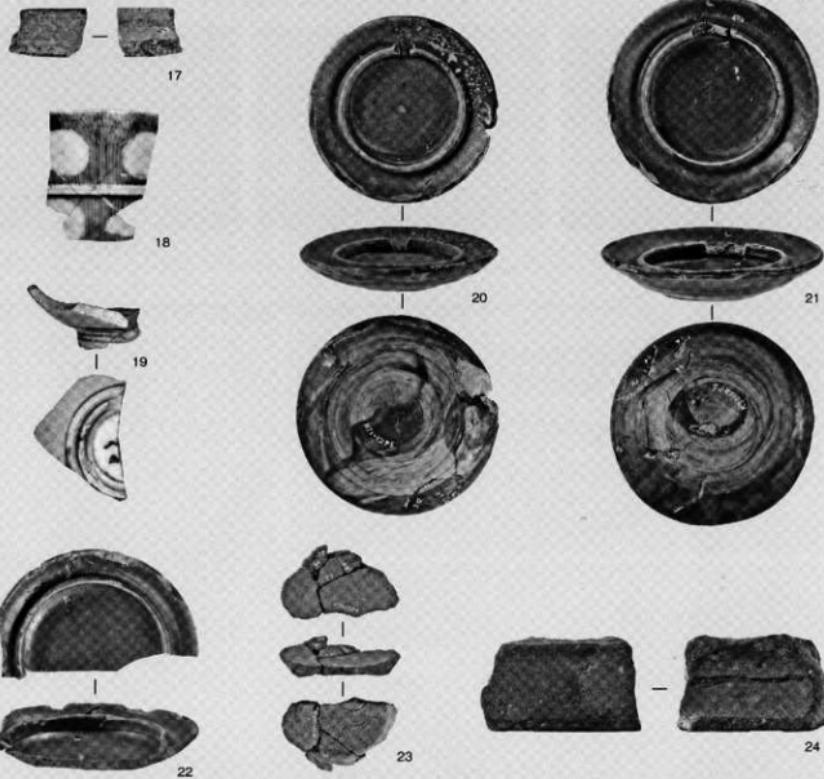
6. 調査風景



SK5



SK6



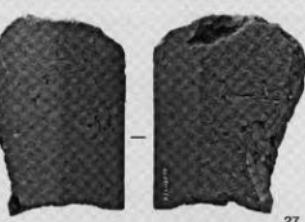
SD4



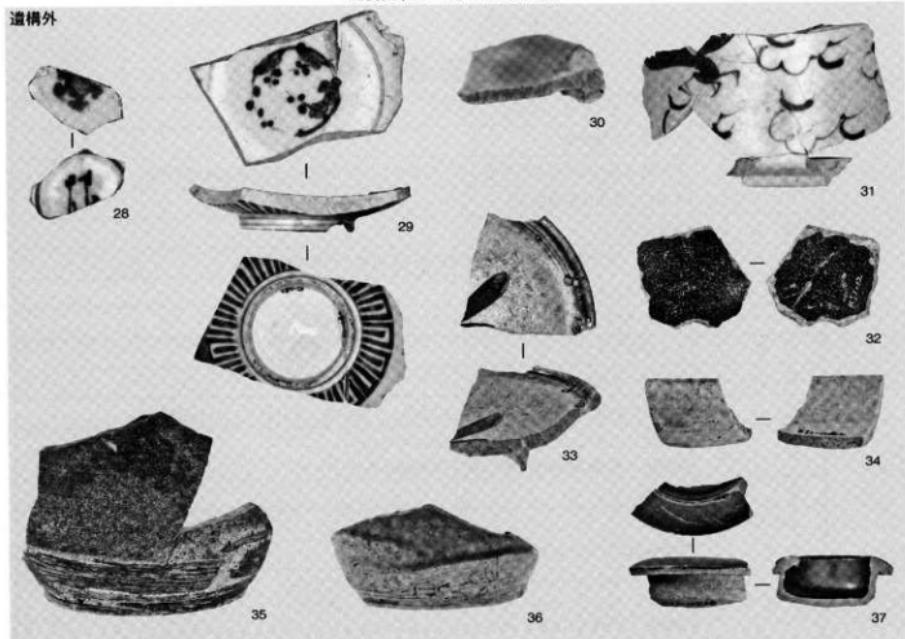
Pit20



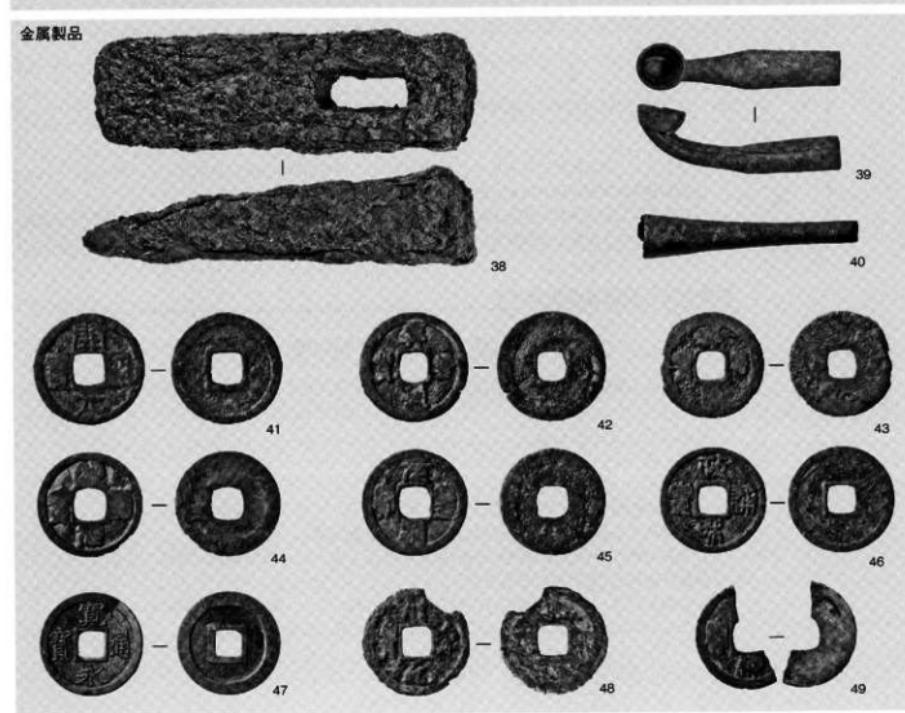
Pit43



造構外



金属製品



報告書抄録

ふりがな	こうふじょうかまちいせき
書名	甲府城下町遺跡Ⅷ
副書名	甲府駅周辺土地区画整理事業(17・43街区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	甲府市文化財調査報告 62
著者名	望月秀和
発行者	甲府市・甲府市教育委員会・公益財團法人山梨文化財研究所
編集機関	公益財團法人山梨文化財研究所
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL055-263-6441
印刷日	平成25年3月1日
発行日	平成25年3月15日
所在地	山梨県甲府市 朝日二丁目20番外(17街区)・丸の内一丁目12-3外(43街区)
位置	17街区：北緯35度66分87秒 東経138度56分31秒 43街区：北緯35度66分73秒 東経138度56分68秒
標高	275m
市町村コード	19201
調査原因	甲府駅周辺土地区画整理事業
調査期間	17街区：平成22(2009)年3月10日～3月26日(第1次) 平成22(2009)年8月30日～9月29日(第2次) 43街区：平成20(2007)年3月3日～3月31日
調査面積	17街区：209 m ² 43街区：227 m ²
遺跡概要	主な時代 中・近世 主な造構 土坑、ピット、溝跡 主な遺物 江戸時代の陶磁器類、古墳時代・平安時代の土師器等 特記事項
要約	17街区：二の堀外側の町人地とする地域の調査。中世後期の造構は確認できず、井戸跡より17・18世紀代の陶磁器類が出土した。 43街区：二の堀内側の武家屋敷地の調査。築城期に埋め立てられた井戸跡、屋敷境に関わる造構を検出した。主な出土遺物としては肥前・瀬戸美濃所産の18～19世紀代の陶磁器類が出土した。

甲府市文化財調査報告書 62

甲府城下町遺跡Ⅷ

甲府駅周辺土地区画整理事業(17・43街区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25年3月15日 発行

編集・発行

甲府市

〒400-8585 山梨県甲府市相生二丁目17番1号 TEL 055-237-1161

甲府市教育委員会教育部生涯教育振興室生涯振興課

〒400-0865 甲府市太田町10番1号遊亀会館1階 TEL 055-223-7324

公益財團法人山梨文化財研究所

〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441

